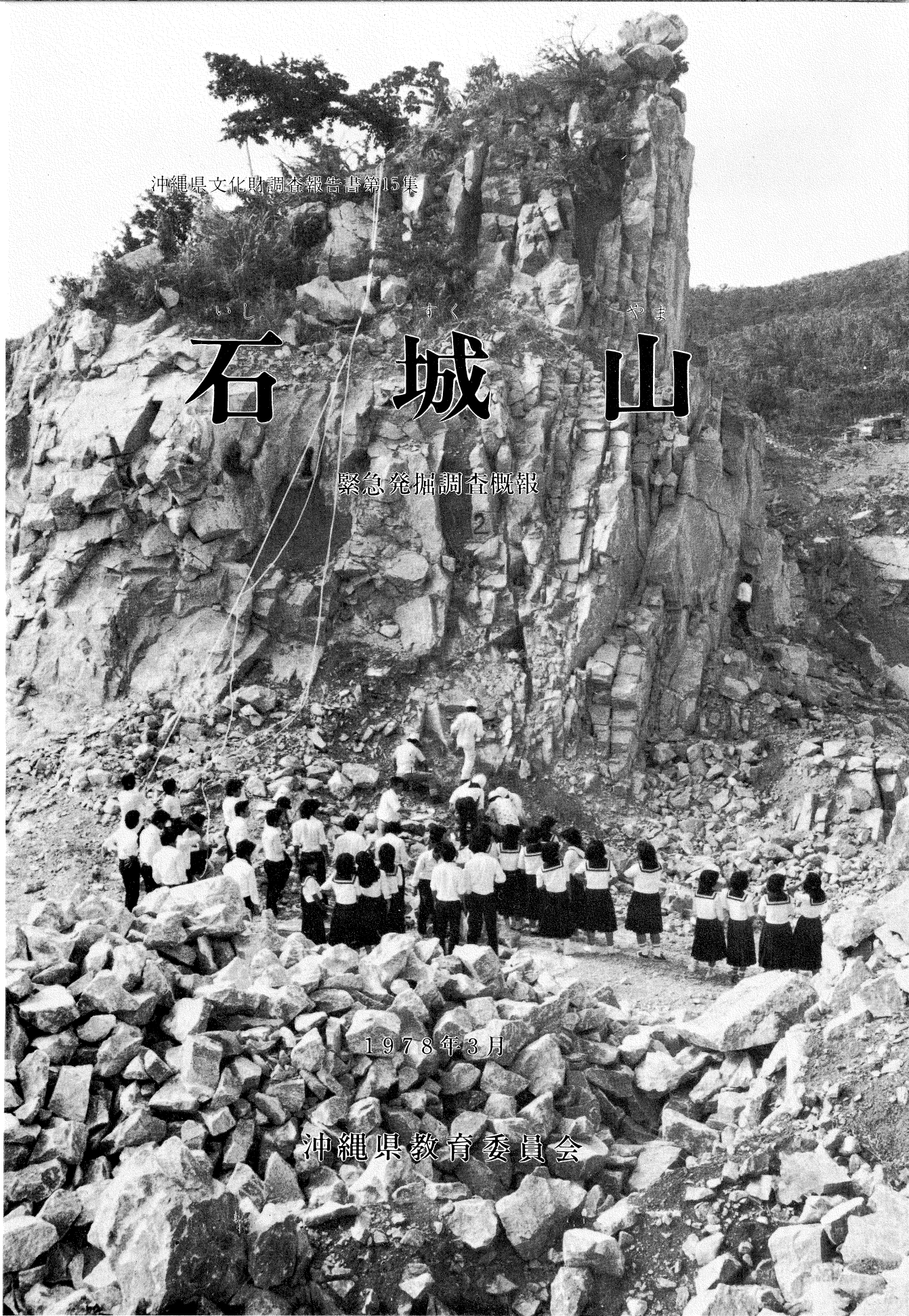


沖縄県文化財調査報告書第15集

石城山

緊急発掘調査概報

2

1978年3月

沖縄県教育委員会

沖縄県文化財調査報告書第15集

石城山（いしすくやま）

緊急発掘調査概報

1978年3月

沖縄県教育委員会

目　　次

本文目次

例　言 …… 1

はじめに …… 3

Ⅰ　石城山の位置と現状 …… 5

Ⅱ　調　査　経　過 …… 6

1　調査に至るまでの経過 …… 6

2　調　査　の　経　過 …… 6

Ⅲ　調査の内容 …… 7

1　遺跡残存状態 …… 7

2　出　土　遺　物 …… 7

①　自然遺物 …… 8

②　人工遺物 …… 8

Ⅳ　石スク山遺跡の試掘調査（1960・1962年の小調査概要） …… 10

はじめに …… 10

遺　　物 …… 10

(イ)　石　器 …… 10

(ロ)　土　器 …… 10

(ハ)　陶磁器 …… 12

ま　と　め …… 13

Ⅴ　石垣市石城山動物遺骸群集の概要 …… 49

いきさつ …… 49

(1)　石城山動物群 …… 49

(2)　地　質 …… 51

(3)　石垣島の鹿化石に関する補足 …… 52

(4)　カンドウ原遺跡のリュウキュウジカ …… 52

(5)　鳥類と両棲類の簡単な記述 …… 53

図版説明 …… 57

Ⅵ　八重山の名号碑石 …… 79

Ⅶ　石城山に関する伝説 …… 91

Ⅷ　石城山保存運動年表 …… 92
おわりに …… 97

挿図目次

第Ⅰ－1図　石垣島と石城山の位置 …… 14
〃 －2〃　石城山西端残丘地区地形現況 …… 15
〃 －3〃　石城山出土土器 …… 16
〃 －4〃　〃 …… 17
〃 －5〃　〃 …… 18
〃 －6〃　〃 …… 19
〃 －7〃　〃 …… 20
〃 －8〃　〃 …… 21
〃 －9〃　〃 …… 22
〃 －10〃　〃 …… 23
〃 －11〃　〃 …… 24
〃 －12〃　〃 …… 25
〃 －13〃　〃 …… 26
〃 －14〃　〃 …… 27
〃 －15〃　〃 …… 28
〃 －16〃　石城山出土陶器 …… 29
〃 －17〃　〃 …… 30
〃 －18〃　〃 …… 31
〃 －19〃　〃 …… 32
〃 －20〃　石城山採集土器，青磁，石器 …… 33
〃 －21〃　石城山採集石器 …… 34
第Ⅱ－1図　石城山裂か第4の見取図 …… 51

表目次

第1表　土器，陶磁器集計表 …… 13

図版目次

図版Ⅰ－1A　石城山西端残丘を東より望む …… 35
〃　－1B　石城山西端残丘南よりの近景 …… 35
〃　－2A　石城山西端残丘北よりの近景 …… 36
〃　－2B　石城山西端残丘西よりの近景 …… 36
〃　－3A　石城山西端残丘を北より望む …… 37
〃　－3B　石城山裂か第1地点・第2地点 …… 37
〃　－4A　石城山裂か第2地点 …… 38
〃　－4B　石城山裂か第2下部および第3地点 …… 38
〃　－5A　石城山裂か第4地点 …… 39
〃　－5B　石城山裂か第5地点 …… 39
〃　－6A　石城山第6・第7地点 …… 40
〃　－6B　石城山在，「前石垣親雲上」家系の墓 …… 40
〃　－7A・B　石城山出土土器 …… 41
〃　－8A・B　〃 …… 42
〃　－9A・B　〃 …… 43
〃　－10A・B　石城山出土の陶磁器 …… 44
〃　－11A　〃 …… 45
〃　－11B　石城山出土石器 …… 45
〃　－12A　石城山出土土器 …… 46
〃　－12B　石城山採集土器・青磁 …… 46
〃　－13　1～3石城山採集石器，4籾圧痕のある土器 …… 47

図版Ⅱ－1　石城山西端残丘を北東側より望む …… 65
〃　－2　1　石城山西端残丘南側近景 …… 66
〃　－〃　2　石城山西端残丘東側近景 …… 66
〃　－3　1　裂か第2・第3地点 …… 67
　　2　裂か第4地点 …… 67
〃　－4　1.2　裂か第4から続く洞の下部堆積層 …… 68
〃　－5　1　裂か第2地点の堆積状況 …… 69
　　2　裂か第4地点下洞の堆積状況 …… 69
〃　－6　裂か第2地点の鹿化石等の理存状態 …… 70
〃　－7　石城山出土の鹿化石 …… 71

図版Ⅱ－8　石城山出土の鹿化石 …… 72
〃　－9　〃 …… 73
〃　－10　〃 …… 74
〃　－11　〃 …… 75
〃　－12　石垣島白保轟川流域採集の鹿化石 …… 76
〃　－13　〃 …… 77
〃　－14　〃 …… 78

例　　言

1　本報告書は，八重山石垣市在，石城山遺跡の緊急発掘調査に関するもので，昭和52年度事業として文化庁の補助（80％）を得て沖縄県教育委員会が実施した結果を収録したものである。

2　本報告書の各項目の執筆等は次のとおりである。

はじめに	安里嗣淳	（沖縄県教育庁文化課専門員）
Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	〃	
Ⅳ	大浜永亘	（八重山商工高校教諭）
Ⅴ	長谷川善和	（国立科学博物館）
	野原朝秀	（琉球大学教育学部）
Ⅵ	鏡山猛	（九州歴史資料館々長）
Ⅶ	石垣久雄	（八重山高校教諭）
Ⅷ	石堂徳一	（石垣市教育委員会）
おわりに	安里嗣淳	
遺物実測	比嘉春美	（那覇市在）
実測トレース	大城洋子	（今帰仁村諸志在）
割つけ・編集	平安秀子	（那覇市在）
遺物撮影	上原静	（沖縄県教育庁文化課嘱託）
石器石質同定	大城逸朗	（沖縄県立博物館学芸員）

3　「石城山」（いしすくやま）の城（すく）の文字については，底（すく）の字をあてることもあり，とくにいずれかに定まっているわけではない。

当面は「石スク山」とでも表記すべきかとも考えられるが，ここでは，一般的に用いられる城の字をあてることとした。しかし，とくに固定する必要はないので，この報告書を文献として扱うときだけ「石城山」と表記すればよいと考える。

石城山―緊急発掘調査概報

はじめに

石城山は石垣島四箇のはるか後方山手，バンナ岳の麓にある新生代古第三紀始新世石灰岩（宮良層）の岩山である。

この山は，本文の石垣久雄の報文にあるように，この地域における村のなりたちや遷り変わりの伝承と深い関わりをもつ山である。

伝承は時代や内容を事実として確定することはできないが，この石城山遺跡はほぼ全体が遺跡となっており，土器，石器，外国製陶器，磁器を出土し，また貝塚を形成していること等から，この地において人間の生活活動が或る時期に展開されていたことは事実である。伝承はこれらの事実をある程度反映しているといえるかもしれない。

石灰岩の地層から成る石城山は，石垣島ではマンゲー山，桃里恩田貝塚の岩山と同様，きわめて数少ない例のひとつである。この種の石灰岩は周知のように，建設工事の骨材として優れた品質をもっている。

この「稀少価値」が，現代の諸開発の進行の中で採石の対象となり，その結果大規模な遺跡破壊をもたらすこととなったのである。その経過は本文の石堂徳一の報文に詳しいが，石城山はここ十数年採石が続けられ，今やかつての面影は殆んどなくわずかに西端にその片鱗を残すのみである。

特にここ数年，石城山はかつての「山」から巨大な「凹地」と化しており，まさにその様相は転倒しているというにふさわしい。わずかに残された遺跡地域についてもすべてが急崖となっており，そのままの状態での保存はきわめて困難であると判断されたので，当県教育委員会は文化庁の補助を得て，緊急発掘調査を実施することとなったのである。

一方，この急崖断面の裂かには鹿化石骨が堆積していることがわかり，この調査もあわせて行なうこととなった。

調査の結果，石城山遺跡は殆んど破壊されており，裂か堆積層以外には遺物包含層は存在しないことが判明した。また，裂か堆積層中の出土品も貝殻が主体で，遺跡の内容を知る手がかりとなるべき人工遺物に乏しかった。

しかしながら幸いにして，本文の大浜永亘氏の報文に紹介するように，かつて二つの小調査が行なわれており，その内容について本報告書に掲載させていただく運びとなった。これにより，本遺跡の概要は把握できよう。

今回の発掘調査の実施にあたっては，石垣市教育委員会の石堂徳一氏をはじめとする職員各位の多大なご援助を賜わった。八重山商工高校教諭の大浜永亘，八重山高校教諭の石垣久雄・伊波寛の三氏には，調査現場に於て種々御教示，ご援助を賜わった。大浜氏はさらに，氏によるさきの小調査についての玉稿も寄せられた。

東京国立科学博物館古脊椎動物研究室の長谷川善和博士には，遠路にもかかわらず調査の指導をしていただき，また出土した鹿化石をはじめとする動物遺存体についての分類と検討も担当していただいた。その内容は本文に記すとおりである。

桃林寺の安室雲月氏には，さきの調査で得られた資料の利用について，快諾をされた。

琉球大学助教授野原朝秀氏は，以前から石城山一帯の踏査をされていたが，今回も多忙な中を参加していただいた。

また九州歴史資料館々長の鏡山猛先生には，同館研究論集よりの玉稿の転載をご快諾いただいた。

ここに記して，以上の方々に厚く感謝申し上げる次第である。

調査は次のような構成で実施された。

調査員	安里嗣淳（沖縄県教育庁文化課専門員）
同上	長谷川善和（東京国立科学博物館，古脊椎動物研究室）
同上	野原朝秀（琉球大学助教授）
調査補助員	大城洋子（今帰仁村諸志在）
同上	上江洲直子（琉球大学学生）
同上	富村龍男（石垣市在）
他作業員一同	

資料整理，報告書の作成には次の方々が参加し，多大な協力を寄せられた。記して謝意を表したい。

遺物実測	比嘉春美・大城慧
実測図トレース	大城洋子
貝類分類	花城潤子
〃同定	知念盛俊（那覇高校教諭）
遺物撮影	上原静
割りつけ，編集，拓本等	平安秀子

さらに，現地補足調査を，大城慧，花城潤子の両君が実施した。

Ⅰ　石城山の位置と現状

石城山遺跡は，沖縄県八重山群島石垣島の南部，石垣市街地より北方約1.5㎞の地点にある。この地点は，海岸線から連なる広大な琉球石灰岩台地（平野）がバンナ岳の麓と接するところであり，周辺の地質とは異質の新生代古第三紀始新世石灰岩（宮良層）が山麓部で突出した岩山である。バンナ岳は古生代末～中生代初に位置するとされる富崎層（チャート，千枚岩，砂岩）によって形成されている。

石城山は，現存する地域の頂部標高が約79m，遺跡地及び鹿化石骨包含裂かのレベルが63m～65mである。

石城山からは，前面（南側）の広大な平野（キビ畑及び市街地）や，海上に浮ぶ竹富島，西表島などを眺望することができる。

後背地には標高230mのバンナ岳をひかえ，この山の北側には名蔵平野が，東側には宮良川一帯の平野が展開する。

かつて石城山は巨大な岩山であった。しかし建設用骨材としての石灰岩採掘がここ十数年続けられ，その殆んどは姿を失なったばかりか，さらに付近地表より15～30mも掘削され，石城山が「根こそぎ」引抜かれてしまったような状態となっている。西端地域にわずかの範囲ではあるが石城山のかつての容姿を推測する手がかりとなる巨岩の片鱗が見られる。おそらくかつての石城山の西崖部に相当するものとみられる。

この残丘は第Ⅰ－2図に示すように，西側が自然斜面をなし，北，東，南の三面は採石によって急崖となり，岩肌をむき出しにしている。

土器片，陶磁器片，貝殻などが西側の斜面地域でわずかに採集されるが，層としてはみられない。北面，東面には裂かがいくつかあり，その中に土が流入堆積している。この裂か堆積土は東面の第2裂かでは二層に分かれ，下層は赤褐色土，上層は黒色土となっている。（以下「裂か下層」・「裂か上層」と呼ぶ）。

裂か下層は鹿化石骨を中心とする動物遺存体包含層で，上層は石城山遺跡の遺跡包含層である。また，この残丘の東隣には古墓があり，「前石垣親雲上」の家系の墓と伝えられる。石碑も建てられていたが，現在は採石工事による破壊をさけるため，石垣市立博物館に移されている。

Ⅱ 調 査 経 過

1 調査に至るまでの経過

石城山遺跡は不幸にして破壊されてしまったが，その内容については以前から関心がもたれていた。すでに1960年，当時中学生であった大浜永亘氏（現，八重山商工高校教諭）を中心としたグループによる調査が行なわれている。その内容は当時の地元新聞に紹介されている。

また1962年，八重山毎日新聞社の主催により，宮良賢貞氏を団長とする人々によって，小調査が行なわれている。

1961年，採石計画が明らかとなるや市民の側から保存運動が盛り上がり，1963年末には石垣市当局も保存の方針を決定し，土地買上げ予算計上を市議会に提案したものの，多数の反対にあって挫折し，その後は採石工事により破壊の一途を辿ることとなった。

その後有効な対策が講じられることもなく，沖縄県の祖国「復帰」を迎え，いわゆる4条鉱山の再申請が採石業者よりなされることとなった。この処理にあたって沖縄県教育庁文化課では，西端残丘と古墓及び拝所の保存を申し入れ，これらの地域については採石予定地より除外した。

しかしながら，すでに遺物残存量はきわめて微少なものとなり，しかもそれは急崖面に付着しているような状態であった。乾燥と降雨のくり返しで，それらが自然崩壊していくことは確実であると予想されたので，緊急に発掘を行ない，記録保存の措置をとることとなったのである。

2 調査の経過

調査は1977年9月5日より13日まで発掘調査を行ない，その後10月，11月，12月，1978年3月にそれぞれ断片的な観察調査を行なった。

発掘は裂か堆積土について実施した。第Ⅰ－2図に示すように，裂か等を東側より1，2，3，4，5，6，7と名付け，各裂かごとに発掘を行なった。

裂かは前述したように第2地点のみ上層と下層に分かれ，下層は鹿化石骨を主体とする動物遺存体包含層，上層は石城山遺跡遺物包含層（土器，陶器，磁器，貝殻）である。

いずれの裂かも，採石により縦方向にその断面が露出した形態になっていて，しかも壁面に土が付着して残存しているという様相を呈していた。したがって，これを上より掘り下げていくことは極めて危険であると判断されたので，各裂かごとに遺物を横から不規則にとり出すという方法を採らざるを得なかった。

なお，裂か第2地点の大部分については，石垣市教育委員会より凝固切取で保存したい旨の申入れがあったため，発掘は行なわなかった。

Ⅲ　調査の内容

1　遺跡残存状態

(イ)　残丘西側斜面地点

麓部にわずかながら土器や青磁，外国製陶器の細片が見られたが，包含層としては残存していない。

(ロ)　裂か第1地点

赤土が壁に付着した状態で残っているが，遺物は全く含まれていない。

(ハ)　裂か第2地点

幅約 80 ～ 1m の裂かで，堆積土は厚さ約1.5mである。上層の約 50cmは黒色土で石城山遺跡の包含層である。アラスジケマンガイを主体とした貝殻や小動物の骨片等が含まれている。いわゆる八重山式土器の細片も含まれているが，少量である。

下層は赤褐色土で，鹿化石を主体とした化石動物骨が含まれている。この下層は洪積世に属するものと考えられている。

(ニ)　裂か第3地点

第2地点の下方に幅約 20cmの縦に細長い裂かがあり，黒色土が堆積している。第2地点の上層と同様の石城山遺跡包含層である。小動物骨片，貝殻，土器細片が含まれている。

(ホ)　裂か第4地点

巨大な裂かで，片側の面が崩壊していて幅は不明であるが，深さは5m余に及ぶものとみられる。壁面に赤土が付着しており，その中に鹿化石骨が含まれている。急崖となっているため，採掘が可能な範囲に限って不規則に化石骨を取り上げた。

(ヘ)　第5地点

幅約20cm，長さ約1.5mの小さな裂かで，残丘の北側に位置する。かなり固い赤褐色土が裂か中に堆積しており，その中に鹿化石骨の混入がみられた。

(ト)　第6地点

第5の西方にあり，裂かとは認め難いが，採石による撹乱で土石が崩壊しているところで，鹿化石骨が集中して得られる地点がある。原位置からそれほど動いているとはみられないので，この付近が裂かであった可能性もある。

(チ)　第7地点

裂かとは認められないが，第6の北約20m，採石で土石がおしよせられたところで，わずかに鹿化石細片が得られた。

2　出土遺物

出土遺物は大別すると，洪積世に属するとみられる鹿化石骨を中心とする動物化石群と，中世後半の石城山遺跡に関連する土器，陶磁器，石器，貝殻等とに分けられる。

洪積世遺物については，別項を設けて，長谷川善和博士が報告するので，ここでは石城山遺

跡の出土品に限って紹介したい。なお，石城山遺跡出土品は，㋐今回の調査に於ける採集品，㋑1960年，1962年の前述した小調査に於けるものの二通りがあるので，両者項を別にして扱うこととする。㋐については本項であり、㋑については大浜永亘（Ⅳ）の項である。

① 自然遺物

小動物の骨片，貝殻等が得られた。小動物骨片については，長谷川善和博士が別項で若干触れているが，それによると，両棲類，鳥類等が含まれているようである。

貝の種類は次の通りである。アラスジケマンガイが比較的多量であった。

アラスジケマンガイ	ソメワケグリ
ヒメジメコ	フネガイ科エガイの一種
スダレハマグリ	オキナワヤマタニシ
カワラガイ	ヤンバルマイマイ（？）
カンギク	オキナワウスカワマイマイ
リュウキュウシラトリガイ	リュウキュウキセルモドキ

（県立那覇高校教諭　知念盛俊氏の同定による）

② 人工遺物

骨器

動物の骨を素材にして加工したもので，錐状を呈し，装着部と頭部とに分かれる。（第Ⅰ－21図4）。

頭部は円錐形をなしており，装着部とは明瞭な段差をもって区切られる。装着部は欠落しているが，残存部から頭部より若干細く削り出されていることが窺える。

全体の表面に，加工時の小刻みの工具痕（刃物による削り痕）がみられる。第3地点の出土である。

石器

標品1（第Ⅰ－21図の1，図版Ⅰ－13の3）。表面採集品である。石斧の上半部にあたるとみられ，下半部（刃面）が欠損し，また上半部の片面および頭部も剥離している。残存部断面でみると，略隋円形をなし，上半部から下半部へ向けて若干厚くなっていくものとみられる。敲打によって表面が調整されており，さらに側面についてはいくらか研磨が加えられている。石質は緑色片岩である。

標品2（第Ⅰ－21図の3，図版Ⅰ－13の2）。表面採集品である。石斧の下半部（刃面）にあたるもので，上半部は欠損している。この石斧は胴部が斜方向に割れた後，再び別の石器として加工転用されているので，一次石器と二次石器とに分けて述べる。

一次石器は長軸が推定10cm 前後，幅は中央部がやや大きく，刃部へゆるやかに狭くなる。比較的均整のとれた両刃で，全面よく研磨されている。側面は研磨面を形成し，表裏面との境界に比較的明瞭な稜線（角）をつくっている。いわゆる定角式である。刃部は使用によるものとみられる磨耗部がある。刃面に平行に研磨されているようなので，あるい

はその一部については，二次石器の段階における加工も含まれているとも考えられる。

二次石器は，一次石器の欠損による下半残存部を再加工したもので，掲げた標品はそれ自体で完形品である。一次石器の胴部が，斜方向に割ってできた隋円状の破面に再び研磨を施し，一次石器面との境界も丸みをもたせて研磨してある。破面は若干の弱い凹凸があるので，凸部が研磨をうけている形になっている。

一次石器の刃面の一角に，敲打による抉入部がつくられている。緊縛のための抉入部であろうか，あるいは握斧として指かけにするためのものであろうか。いまのところこの二次石器の器種（用途）は判然としないが`形態的には一次石器の破損面と，表面との境界が鋭角になる部分が，あたかも刃状を呈し，破面全体が刃部，一次石器の刃部が頭部にあたるのではないかという印象をもつ。

二次石器のみかけ上の刃部は，小刻みの損耗面をつくっている。石質は輝緑岩である。

標品3(第Ｉ－21図の2，図版Ｉ－13の1）。この標品は野原朝秀氏の採集によるもので，石城山遺跡の前道路上発見とのことである。比較的重量感のある石斧で，全面よく研磨されている。

両側面には略中央の位置に敲打面が部分的にみられ，それぞれ二つの敲打点を有し，対応する位置にある。緊縛又は挿入の必要からつくられたものであろうか。

頭部および刃面，刃部とも欠損している。両欠損部共敲打による損耗がみられるので，この石斧はある段階から「敲打」的な用法に転化しているのではないかと考えられる。石質は輝石玢岩である。

土器

いわゆる八重山式土器の範疇に属するものである。胎土に比較的多量の貝殻細粒が混入されている。焼成は良好である。表面はアバタ状に貝殻等の脱落痕がみられる。器面調整によるものとみられる浅い無数の条痕がある。条痕の方向は基本的に横又は斜であるが，特に一定しているわけではない。

器形は全形を窺えないが，これまでの他遺跡出土例を参考にすると，口縁は直口で（第Ｉ－20図の2，図版Ｉ－12Ｂ2），胴部は垂直に底部に達し，底部角がやや丸みを帯びた平底(第Ｉ－20図の3，図版Ｉ－12Ｂ3）のいわゆる隅丸横コの字型の土器になるものと考えられる。

口縁から数cm 下の外面上半部には，水平方向の把手（外耳）がつけられている。

籾の圧痕を有する土器片

図版Ｉ－12Ｂ3に示す土器片の外表面に籾の圧痕とみられるものがある。

陶器

灰釉陶器胴部細片で，従来南蛮と称されてきた外国製陶器である。黄褐色の釉が表面にかけられ，内面は無釉である。胎土は赤茶色を呈し，石英の微粒が混入している。

青磁

碗の高台である。高台の畳付部は内縁，外縁とも角をなし，高台内部は中央部の釉が除去されている。釉は淡青で，見込には全面かけられている。胎土は微少な気泡がみられる。一般に明代に属するとされるものに相当する。（図版Ｉ－12Ｂ4）

Ⅳ　石スク山遺跡の試掘調査（1960・1962年の小調査概要）

県立八重山商工高校教諭　　大　浜　永　亘

はじめに

今回報告する出土遺物は，W・I・O考古学研究グループにより，1960年8月15日石スク山調査の際，頂上において2m×2mのpitを設定し試掘を行なったときのもの（注1）と，八重山毎日新聞社主催，宮良賢貞氏を団長とする石スク洞窟調査団による1962年1月25日の第一次調査（注2），さらに1962年2月3日の第二次調査（注3）により表採されたところの，石器，土器，須恵器，中国製の青磁，南蛮陶器，沖縄産の荒焼等についてである。

試掘したときの層序は，第1層は表土で，第二層が包含層である。黒色で地表面下約40cmの深さに達すると基盤石灰岩となる。

以下これらの遺物について述べる。

1　遺　物

(イ)　石　器（第I－20図の5）

花崗岩の丸い自然礫を利用した磨石である。半分は欠失しているが，ほぼ卵形を呈するものと考えられる。石面に擦りへり痕がある。

(ロ)　土　器

試掘によって検出された土器及び表面採集で得た土器は，第1表の通りである。すべて無紋の小破片で，復元して原形の窺えるようなものはない。製作手法は，巻き上げか，輪積みで行ない回転台を使用せず手捏ねによるものである。口縁部の形態や底部から，器形を窺ってみると，鉢形土器と壷形土器に分類される。

(1)　鉢形土器

この種の器形をなすものが本資料の大部分を占めている。

イ　外耳の付いていないもの（第I－3図1～6，第I－4図1～4（図版I－7A1～10）

胎土に小粒の貝を少量，混入し，土こねがよく，器厚が薄く，焼成良好である。口縁が直立するものと内彎するものとがある。第3図－1（図版I－7A1）は，外面に刷毛目があり，内面は指撫でで，器面調整が施されている。同図4（同図版4）は，口縁部の器面を指撫でし，肩部を箆撫で，また胴部にかけて，テンパーが引きずられ荒い擦痕が見られることから，箆削りで調整されていることが判る。色調は赤褐色を呈している。

第3図1，4は，器面に煤の付着しているのが見られ，煮沸器としての機能をもったものと思われる。

ロ　外耳の付いているもの（第I－4図5，7，第5図1）（図版I－7A9，13，14）

外耳の把手は，形状不明の破片を合わせて37個検出されているが，口縁部が残っているものは10個である。口唇部の2～4cmの下に横位置に，梯形，半月形の把手が付いてい

る。いわゆる外耳把手である。

胎土は，一般的に大粒の貝殻を多量に含み，厚手で雑な仕上げのものが大部分である。色調は有機物が付着しているため，黒褐色を呈し，煮沸用に使用されたと考えられる。

外耳の把手は，土器を持ち運ぶ「ささえ」の機能があった（推定）と考えられる。第Ⅰ－4図6（同図版10）は口径約15cm，高さ約11.5cmの浅鉢形土器で直立し，口唇部は薄く，胴部では，厚くなっている。貼付した把手がとれたくぼみの痕があるものが見られる。口縁部から胴部にかけて，指撫で器面調整がなされている。底部は篦状工具によって削りとられており，篦調整のときのテンパーが引きずられてできた凹凸の荒い擦痕が見られる。第Ⅰ－5図1は，口径約28cm，口縁部の器面を指撫での雑な仕上げを行ない，器面調整後，ややゆるやかなくぼみの肩部のところに，把手を貼付している。胴部，底部がないため器形全体を窺えないが，山原貝塚では（注10），深さ約11.5cmの平底の浅鉢形の土器の報告があり，これに類するものと考えられる。

胎土は，貝殻，砂粒（直径2～3mm)を混入している。つぎ目が見られ，色調は茶褐色を呈している。

これらの外耳の把手の形状を大きく分類すると，Ⅰ，梯形を呈するもの12個，第Ⅰ－6図2（図版Ⅰ－7Ｂ2），Ⅱ，半月形に呈するもの25個，第Ⅰ－7図2（同図版4）に分けられる。断面形は，ⅰ，鈎鐘状に呈するもの24個，第Ⅰ－7図1（同図版3），ⅱ，舌状形を呈するもの13個，第Ⅰ－4図7(図版Ⅰ－7Ａ13）に分けられる。外耳把手の手法は，棒状の粘土粒を肩部に口縁部と平行する様に貼付し，指撫でで形を整えていく手法である。

(2) 壷形土器（第Ⅰ－14図1～3（図版Ⅰ－9Ｂ 1. 2）

鉢形土器に比して，非常に少なく，3個だけである。薄手で焼成は良好である。これらは小破片のため，完形を窺うに足りるものがないが，口縁はラッパ状で，ゆるやかに外反し，胴部は強く張った形の平底の壷と考えられる。第Ⅰ－14図1（同図版1）は，口径約21cm，口唇部が平たく，口縁が外反し，外面が篦削り手法によって器面調整がされている。胎土には，少量の貝殻の粉末を含み，色調は黒褐色を呈している。同図2（同図版2）は，口径約14.5cm 口唇部が舌状を呈し，口縁がゆるやかに外反し，指撫でによって器面調整されている。胎土には少量の貝殻の粉末，砂粒，石英等が混入している。色調は赤褐色を呈している。

(3) 土器の底部

鉢形土器，壷形土器もすべて平底である。平底を底部から胴部にかけての断面によると丸味のあるものが大部分で，若干角ばったもの，第Ⅰ－8図2（図版Ⅰ－7Ｂ7）がある。第Ⅰ－8図2では「くびれの部分に継ぎ目が見られ，粘土で円形の平盤を作って，その上に粘土を輪積み，又は巻き上げしていく土器手法が窺える」（注4）と考察されたものと同一手法によっている。底径はおよそ23cm程度のものが多い。厚さは0.5～1cm以内28個，1cm以上15個である。色調は，ほとんどが有機物が付着しているためか，黒 茶褐色を呈す。外耳土器の機能を示す底部と考えられる。胎土に大粒（3～5mm）の貝殻を多量に混入しているものが大部分である。外面は雑な仕上げでザラザラしており，テンパーが露出している。内面はよく整形されている。底部の角は，篦で削りとったり，篦，指撫でをしている。

(4) 条痕を有する土器

第Ⅰ－15図1では，外面に縦位に細い溝が幾つもの平行状をなし，条痕となっている。内面にも横位の条痕がある。胎土は貝殻を少量に混入している。色調は外面が茶褐色で，内面は黒色である。焼成は堅固で良好である。同図2では，外面に条痕がある。即ち縦位に細い溝が幾つも平行状を呈している。内面は雑な仕上げで，横位に篦削り痕がある。胎土は少量，小石，石英等を混入している。色調は茶褐色である。条痕を有する土器は，製作過程において，貝殻や篦状工具によって，土器の表面を掻き取り，削り取りが行われたことを示すと考えられる。

(ハ) 陶磁器

土器に比して，非常に少ない。須恵器，青磁，南蛮陶器，荒焼等が主なものである。

(1) 須恵器

第Ⅰ－16図4（図版Ⅰ－10A1）で一片検出された。色調は青灰色を呈している。陶質で，器厚は約6mm，外面に平行線の押型が施され，内面には格子目押型がみられる。沖縄本島のグスク時代の遺跡等から検出される類須恵器の範疇に属するものと考える（注5）。八重山において，フルスト原遺跡（注6），元フウスク村跡遺跡（注7），新川ビロースク遺跡（注8），四ケ村の西端の遺跡（注9），山原貝塚（注10），西表仲間第2遺跡（注11），波照間下田原スク（ブリブチ）遺跡（注12）等から検出されている。

(2) 中国製の青磁

口縁部1片，底部2片検出された。第Ⅰ－16図1（図版Ⅰ－10A2）は，口径約16cmの碗である。無紋で口縁が外反している。胎土は白色を呈し，ガラス質である。釉色は淡緑色である。第16図2，3（同図版3，4）は，底部の破片である。3は底径約5.5cm，胎土は灰色で，コンクリート状を呈し，ところどころ気泡がある。釉色は，青緑色で見込部分は露胎である。貫入が大きく走っている。

(3) 南蛮陶器

口縁部3個，胴部11個，底部5個検出された。

第Ⅰ－18図2（図版Ⅰ－10B2），第Ⅰ－17図1は，玉縁状の口縁を呈する有耳壷である。胎土には，石英，砂粒が混入している。釉は，まだら状にかかり，黄褐色や茶褐色，黒色を呈している。薄手で，焼成温度は1200℃位であろう。巻き上げ轆轤整形である。底部は平底である。第Ⅰ－17図2は，外耳を肩部に水平方向に貼付されている。両端を指でおさえつけた跡がみられる。孔は，貫通している。肩部に刻印されているが摩耗等により字体が不明瞭で解読不可能である。

(4) 荒焼

いわゆる琉球南蛮である。無釉の炻器質で固く焼き締められている。胎土には混入物がなく，鉄分の為に赤褐色を呈している。巻き上げ成形後，轆轤成形を行なっている。第Ⅰ－18図1は，肩部に「十」の記がある。第Ⅰ－19図（図Ⅰ－11A）は，肥厚口縁の甕である。肩部の1.7cmの間に横に右巻きの渦の如き文様と，葉脈の如き文様が相互に規則的に手描きされている。これらの荒焼は、石スク山が，四カ村の発祥地で古今でも神聖な祭祀の場所であるため後世にも利用されたものか，それとも明和8年後の大津波を恐れ，避難した場所であったためのものか，

さらには，戦時中の要塞の場所である為なのか定かではないが，石器，土器，須恵器，青磁，南蛮陶器とは時代を異にする近世の遺物と考えられる。

まとめ

八重山において原始時代を考えると，13世紀〜14世紀にかけて，外来文化の流入が始まり，河川流域や砂丘に形成されていた無土器時代の人々が，離散し，石灰岩地帯のアブ（洞窟，岩陰）に住む古代社会への過渡期時代が想定される。これを仮称アブ時代という。アブ時代に移動した背景は，外敵の防禦が考えられる。

または，中世の集落地と伝承されている「元ムラ跡」等と呼ばれるところなどからは，夥しい量の外国製陶磁器（青磁，南蛮陶器）が土器と共伴して検出される。石スク山遺跡からの遺物である土器と外国製陶磁器を比較すると，土器が89％，外国製陶磁器はわずか11％で，他の遺跡と異なる状況を呈している。明末期時代の染付も検出されないところから，比較的古い時代に滅んだ遺跡と思われる。陶磁器類の詳細な研究を俟たねばならないが，遺跡の立地，または土器比率が陶磁器を上まわること等からして，筆者は，13世紀後半から14世紀末にかけてのアブ時代の遺跡である可能性が強いと考える。

注1　沖縄タイムス　1960年　9月25日

注2，3，八重山毎日新聞　1962年1月26日，1962年2月6日

注4　平得仲本御嶽遺跡発掘調査報告　1976年

注5　ヒニ城の調査報告，嵩元政秀　1960年

注6，7，8，9，10，11　大浜表採品

注9　鳥居籠蔵「有史以前の日本」の四ケ村の西端の遺跡と，1977年12月県教育庁文化課の調査による竿若東遺跡と同一遺跡か，今後検討を要する。

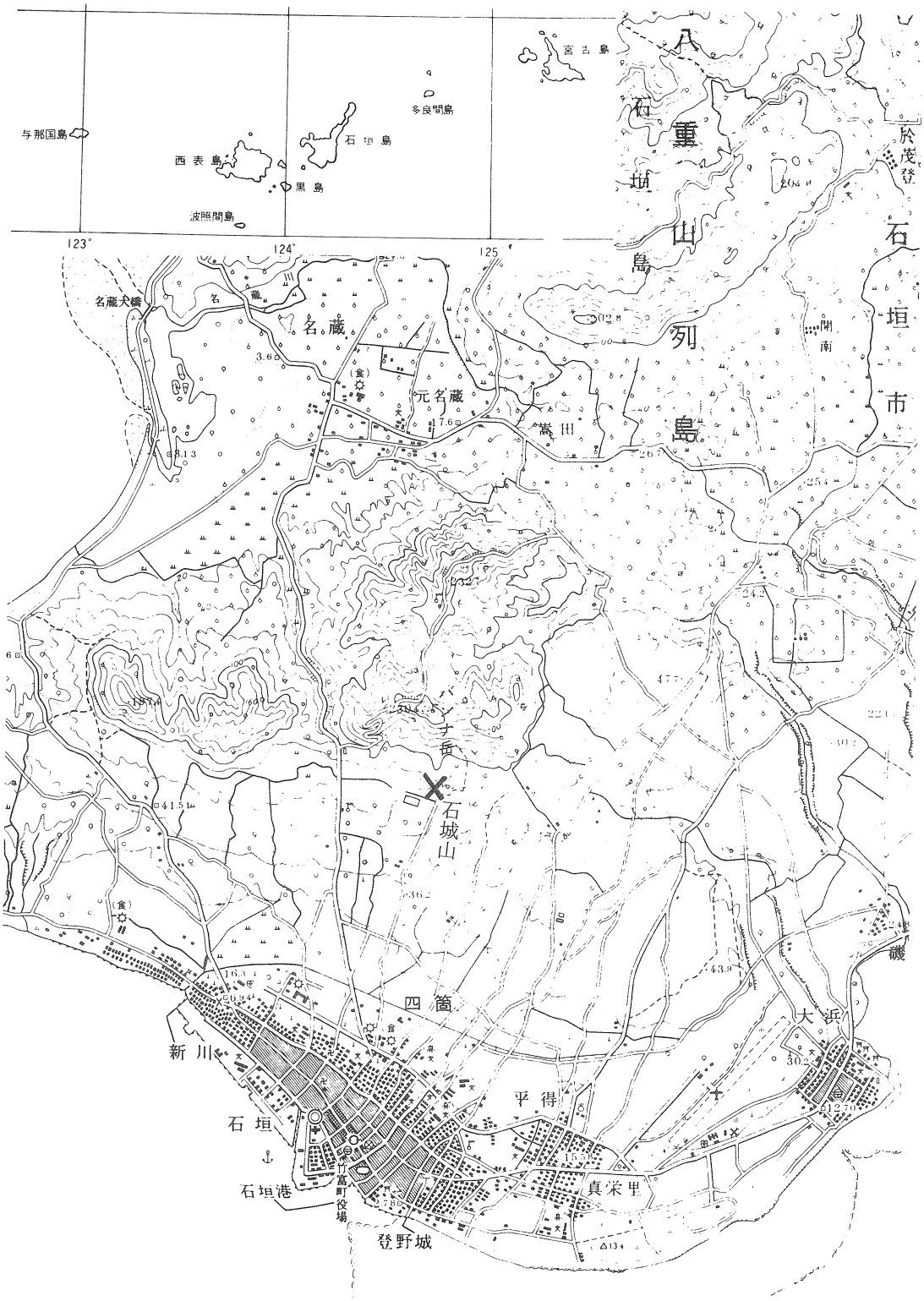
注10　山原貝塚「沖縄八重山」　滝口宏編　1960年

注12　沖縄タイムス　1977年12月22日

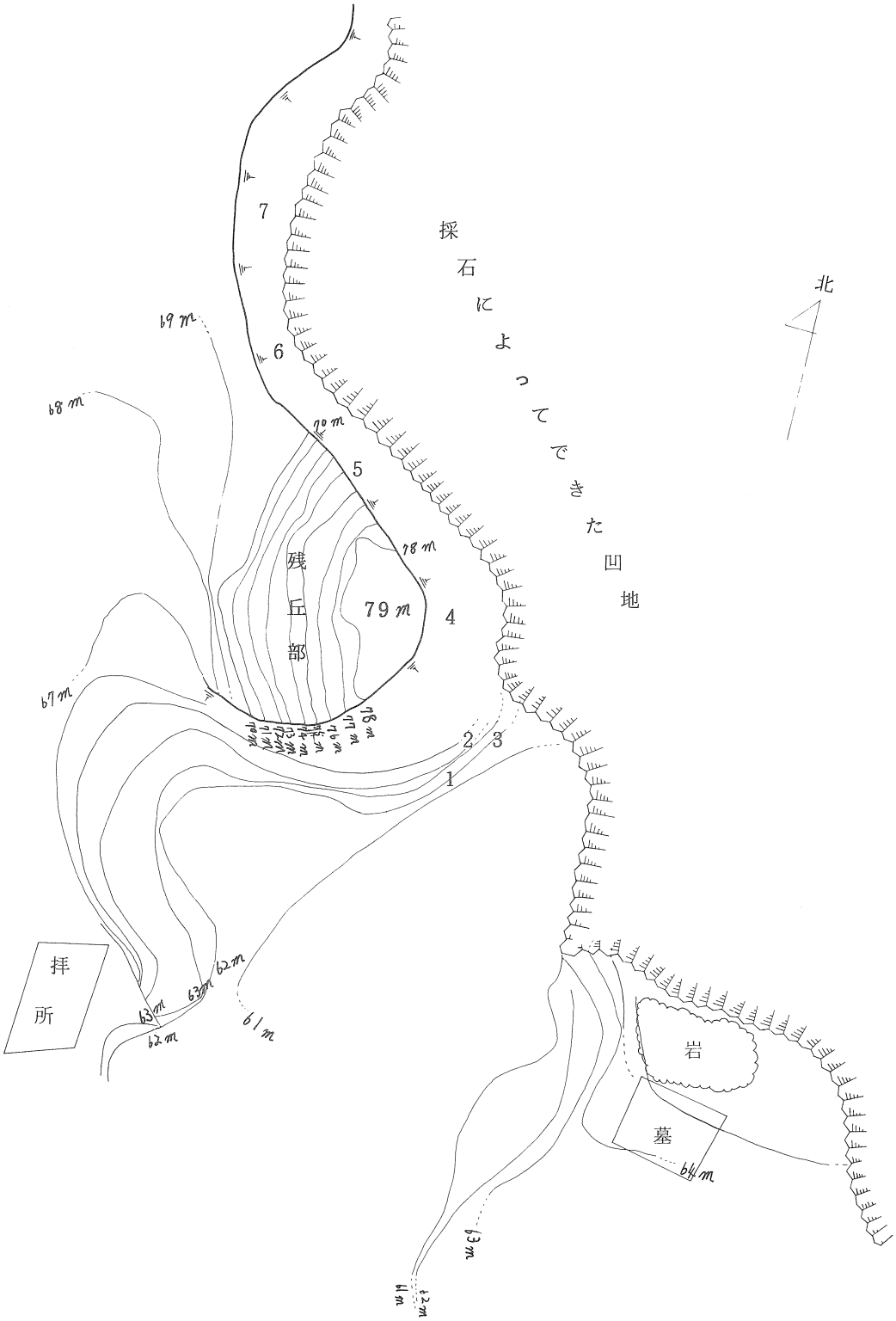
第1表　土器，陶磁器集計表

区分		土器	須恵器	青磁	南蛮陶器	荒焼
口縁部（器形）	鉢形	23(外耳10)	0	1		1
	壷形	3			3	1
底部（平底）	丸形	36	0	2		
	角形	7			5	
外耳		27				
胴部		104	1		13	
合計		200	1	3	21	2

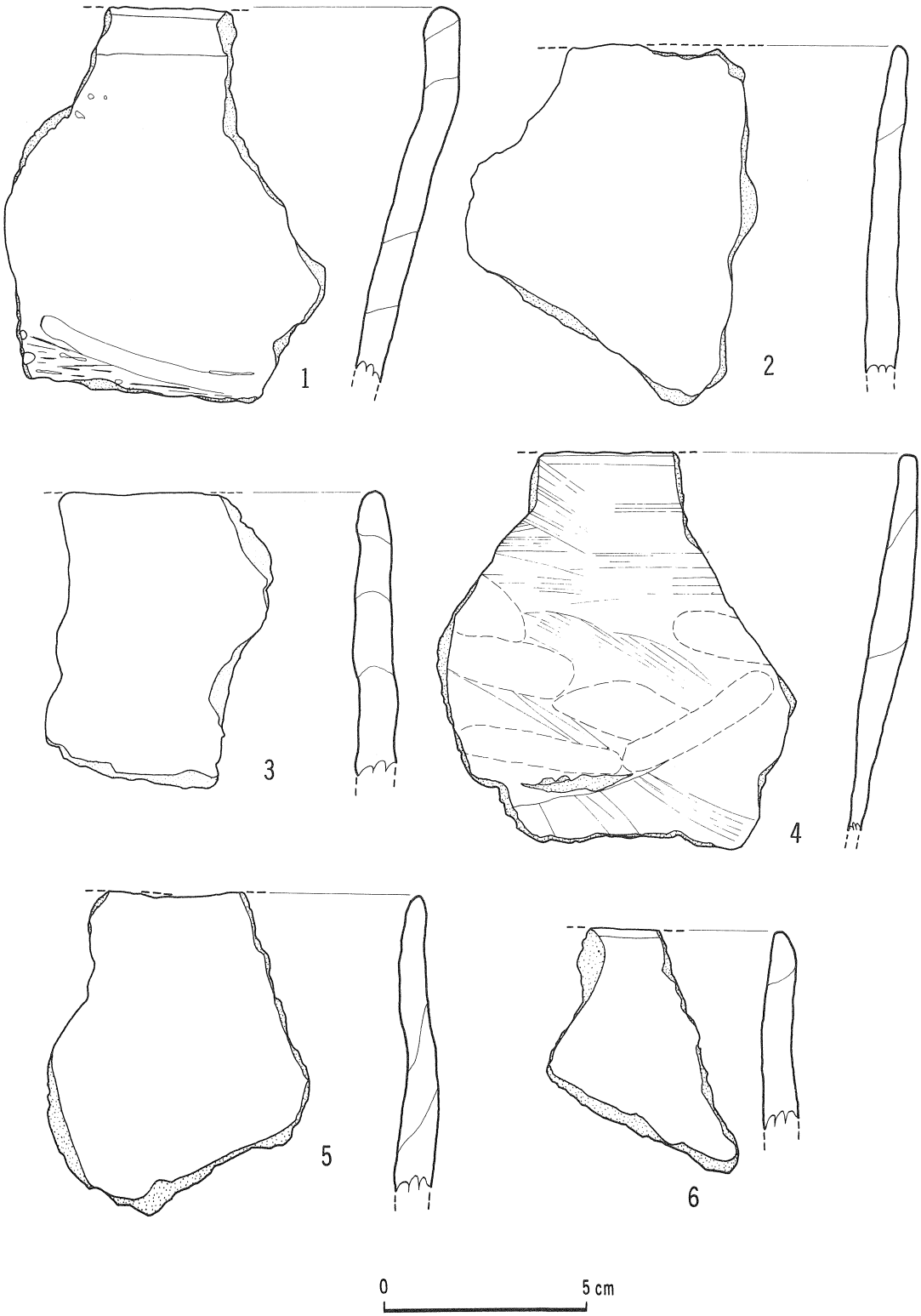
第Ⅰ－1図　石垣島と石城山の位置



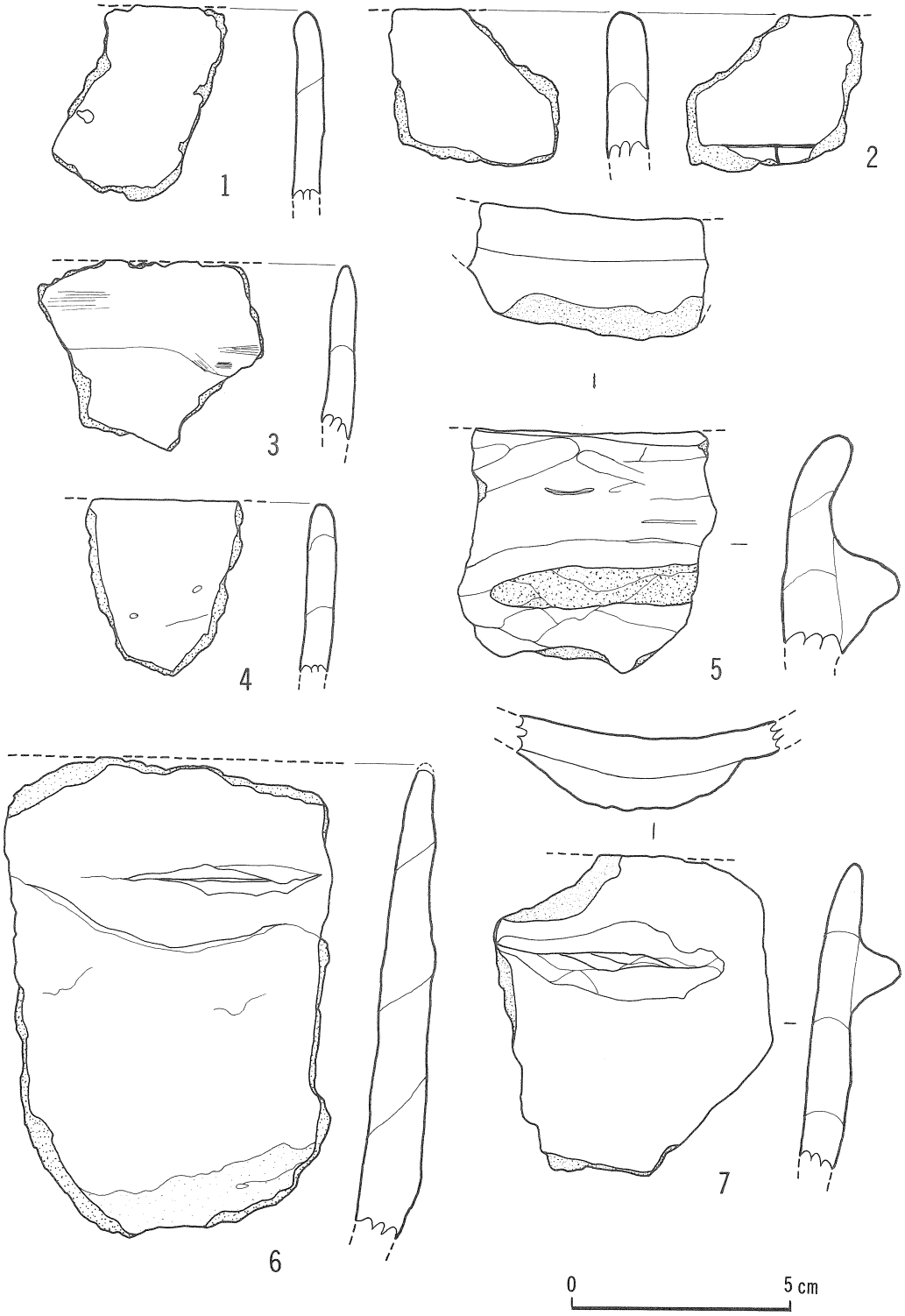
第Ⅰ－2図　石城山西端残丘地区地形現況



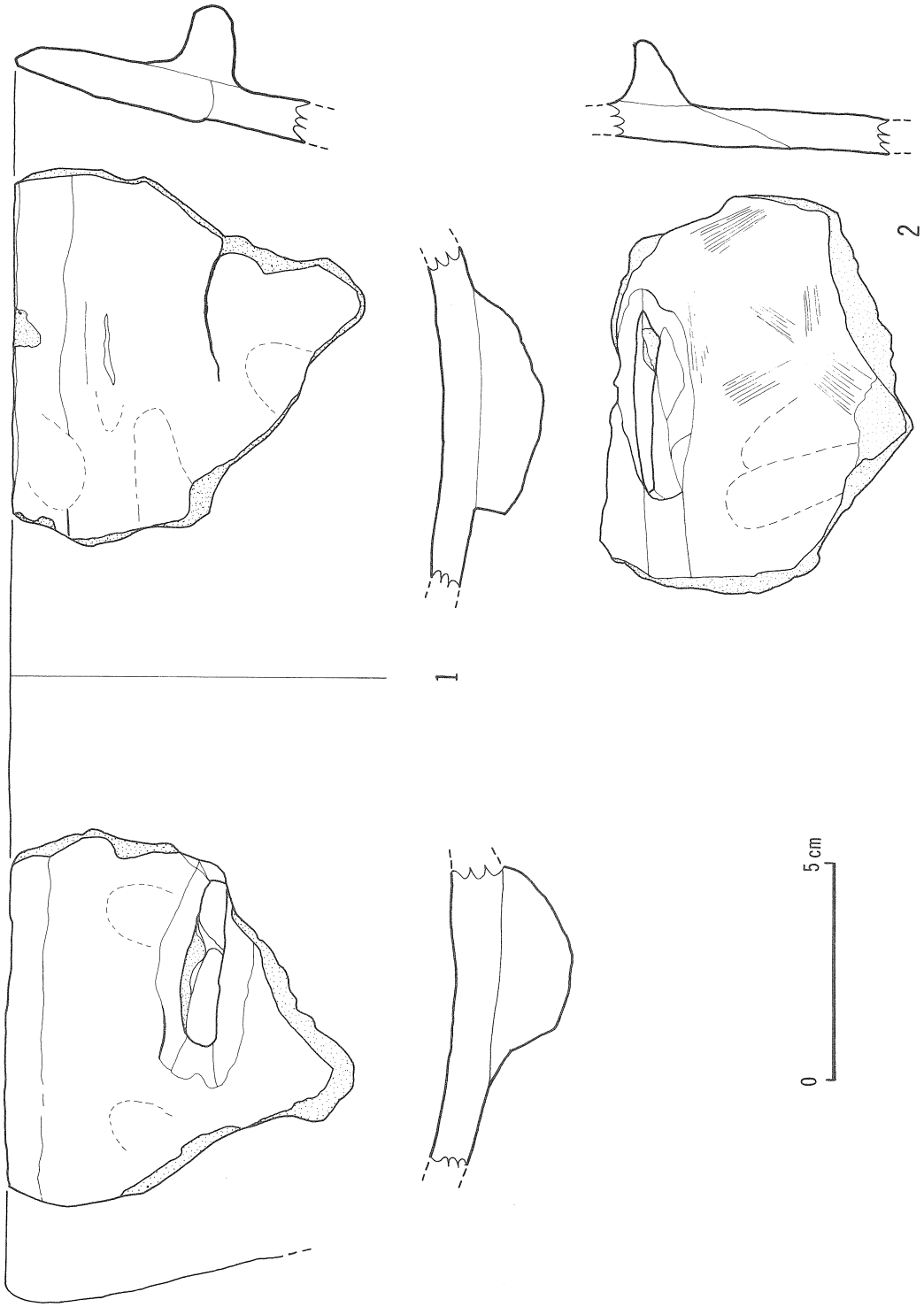
第Ⅰ－3図



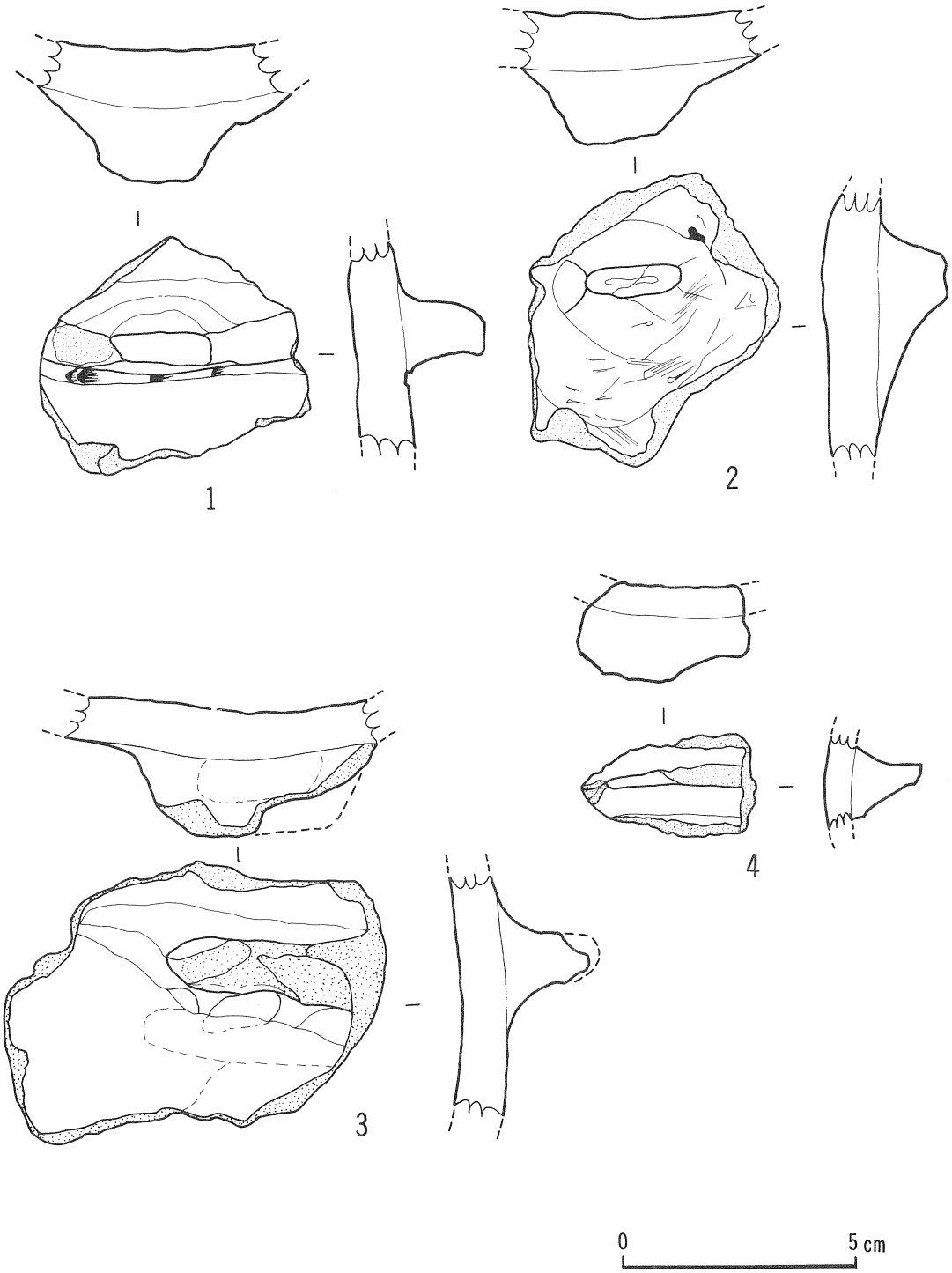
第Ⅰ－4図



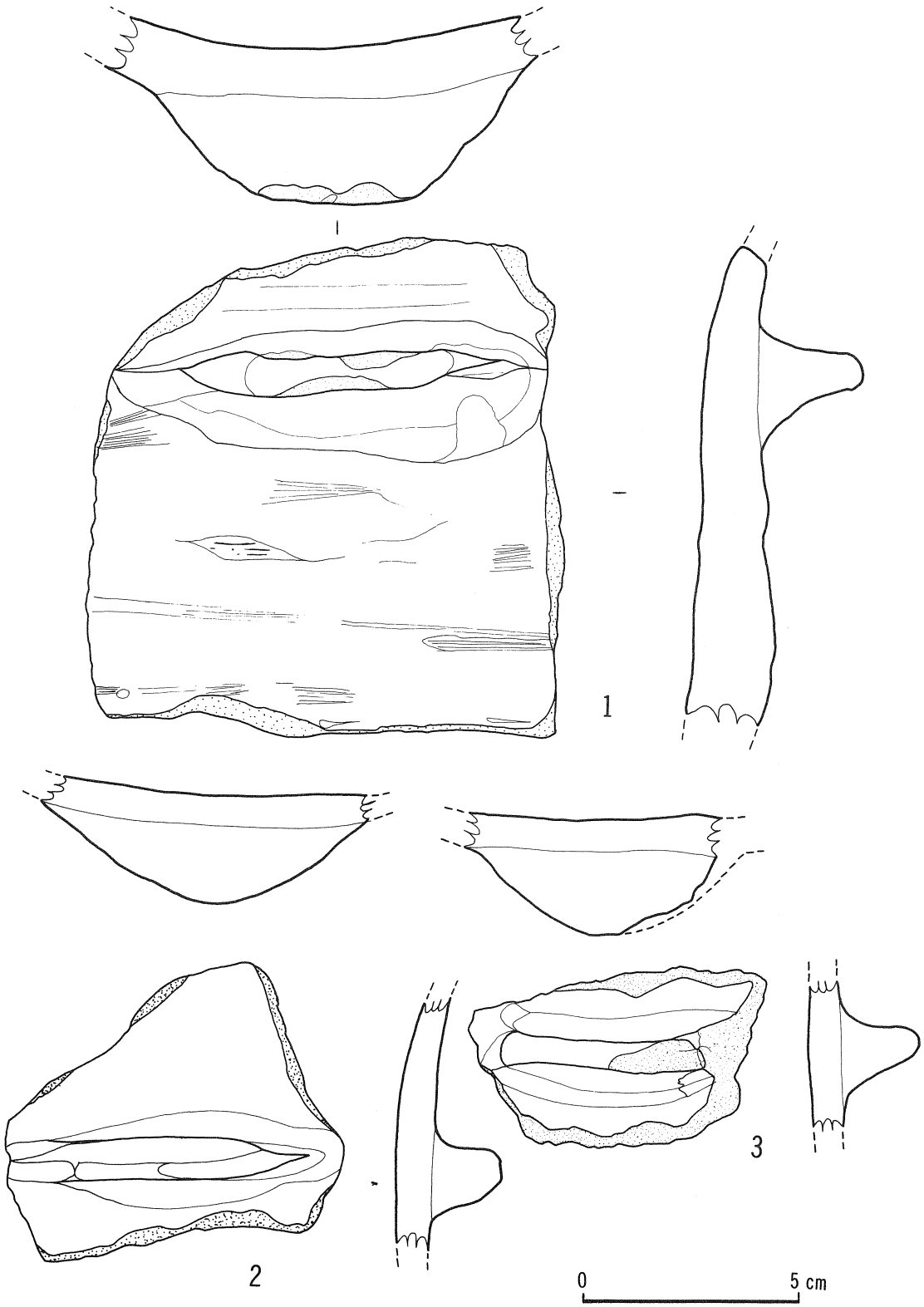
第Ⅰ－5図



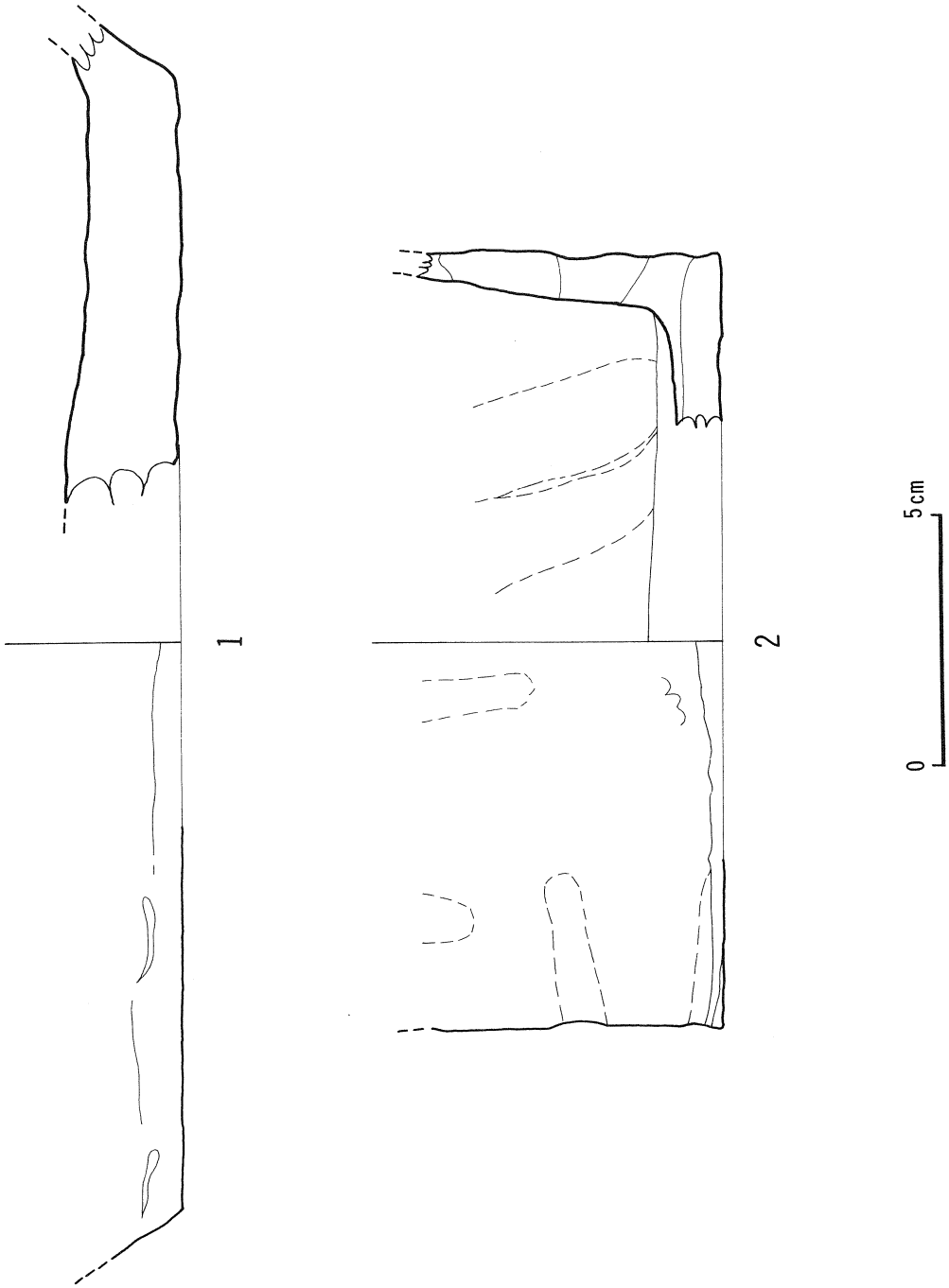
第Ⅰ－6図



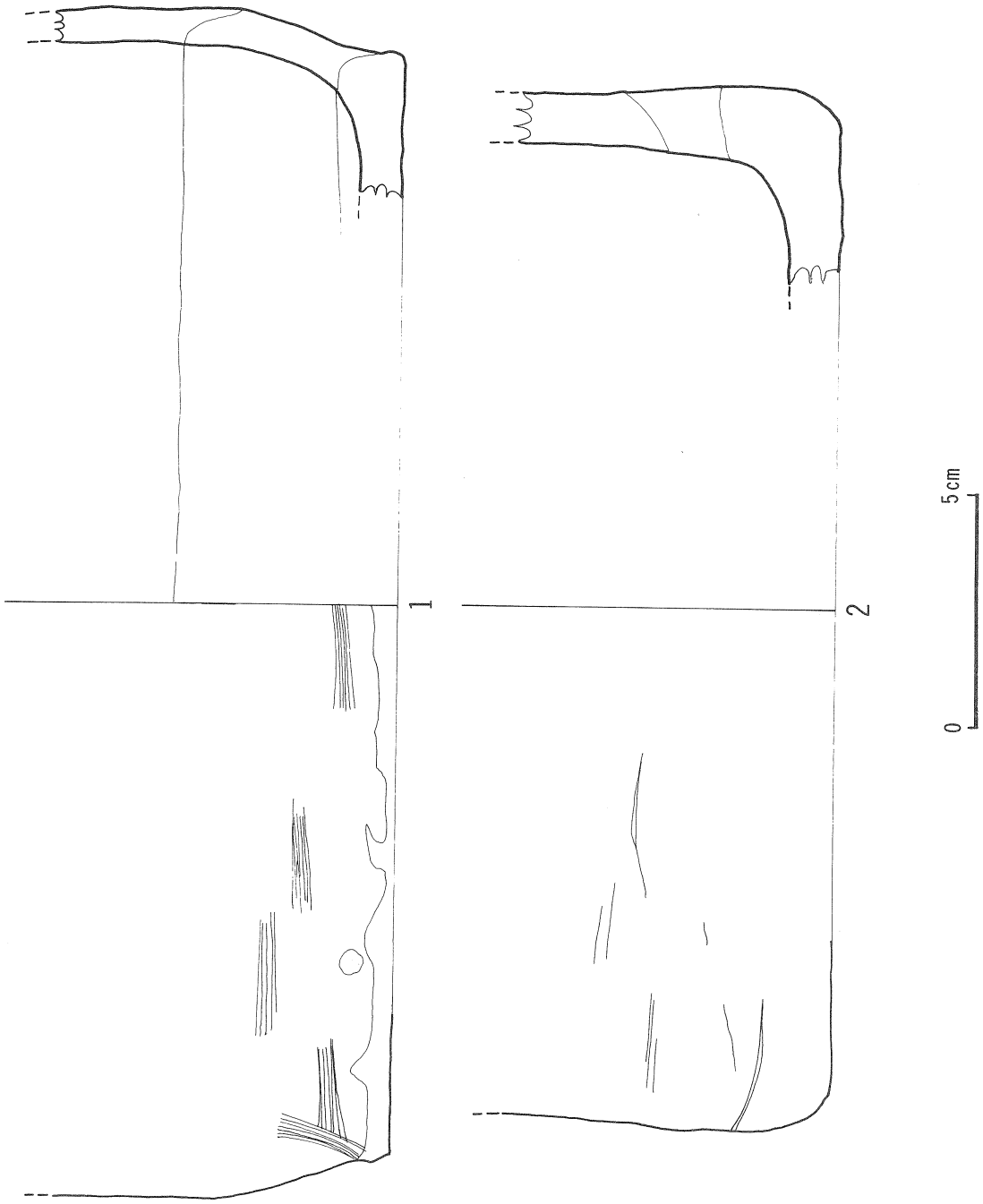
第Ⅰ－7図



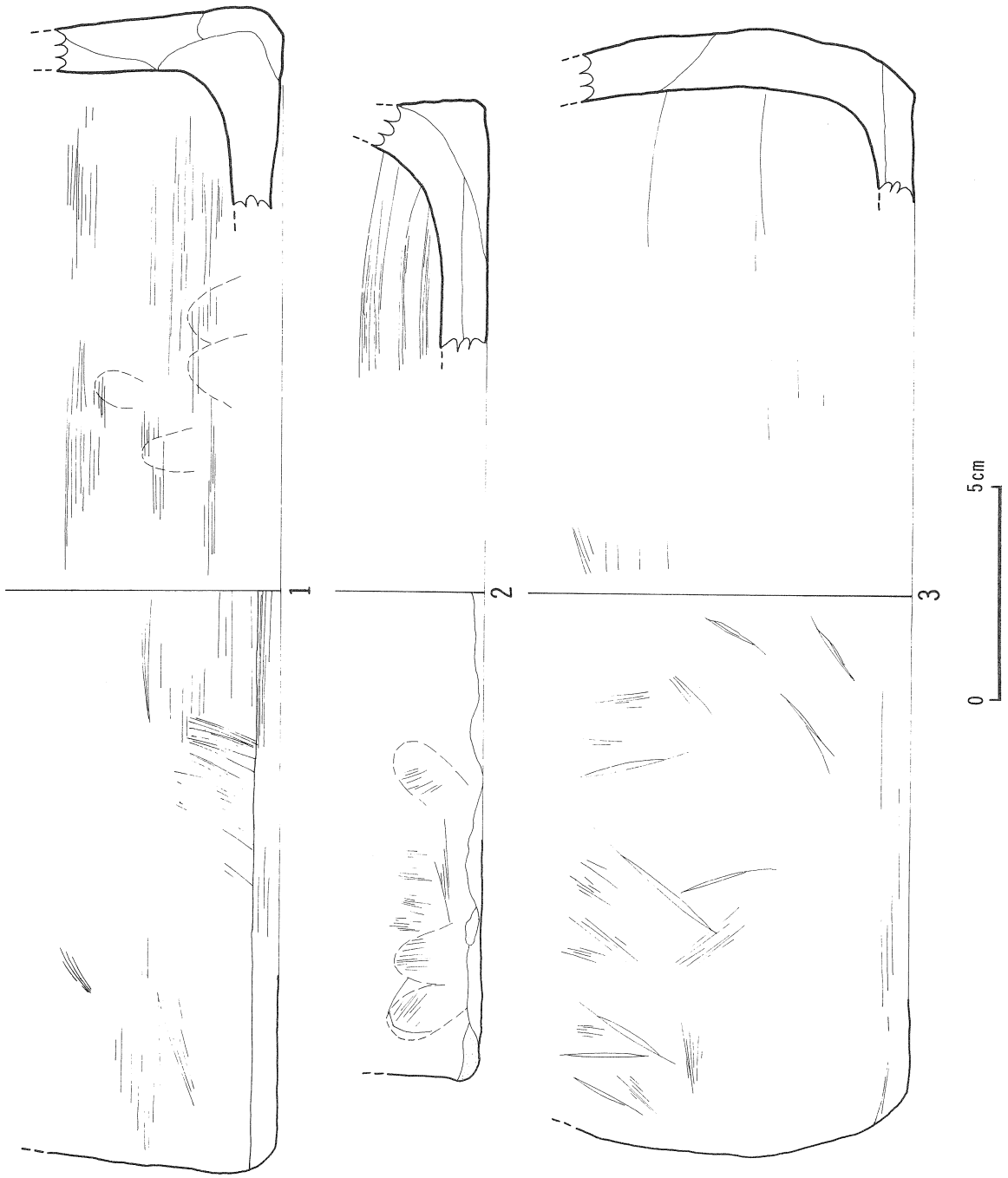
第Ⅰ－8図



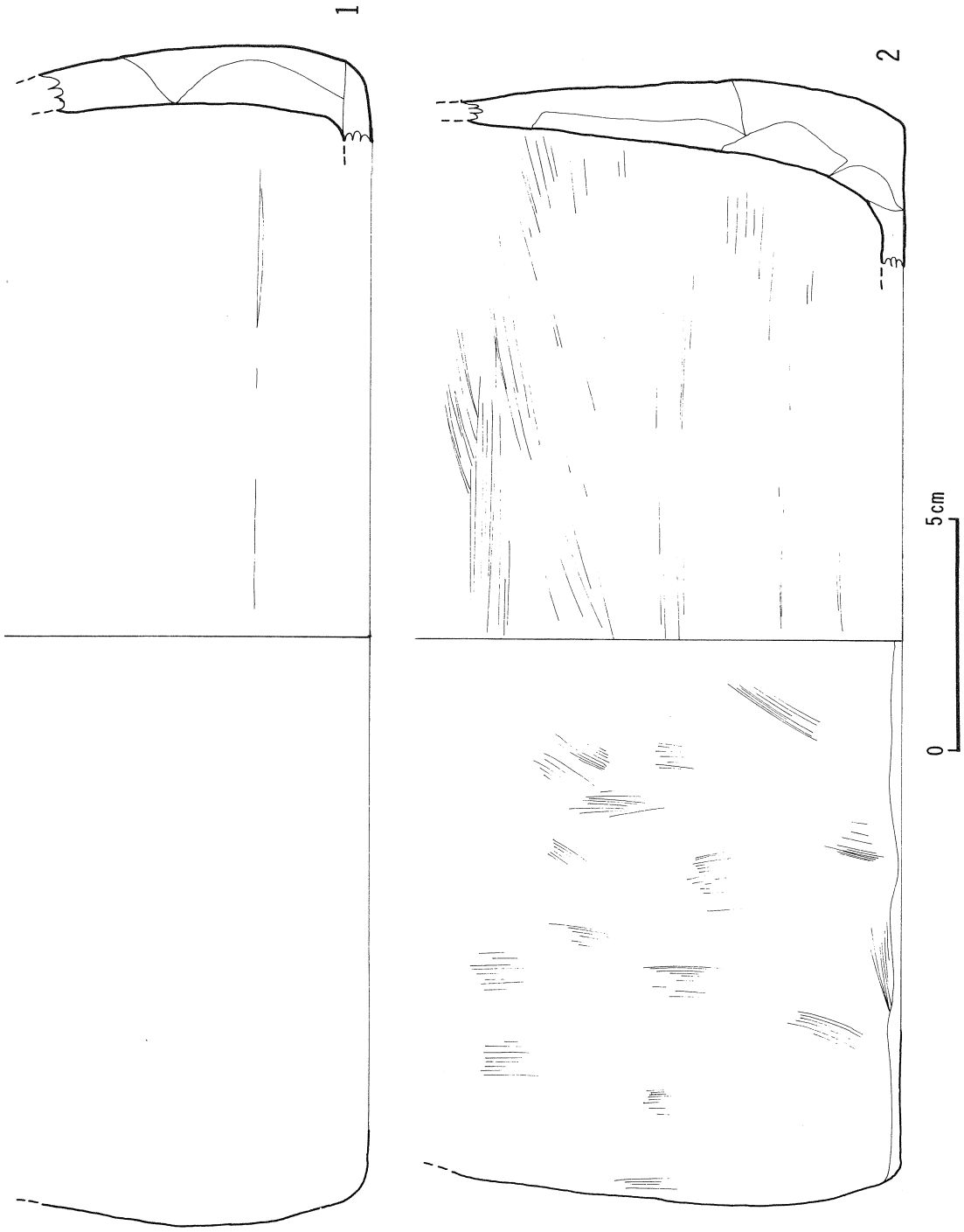
第Ⅰ－9図



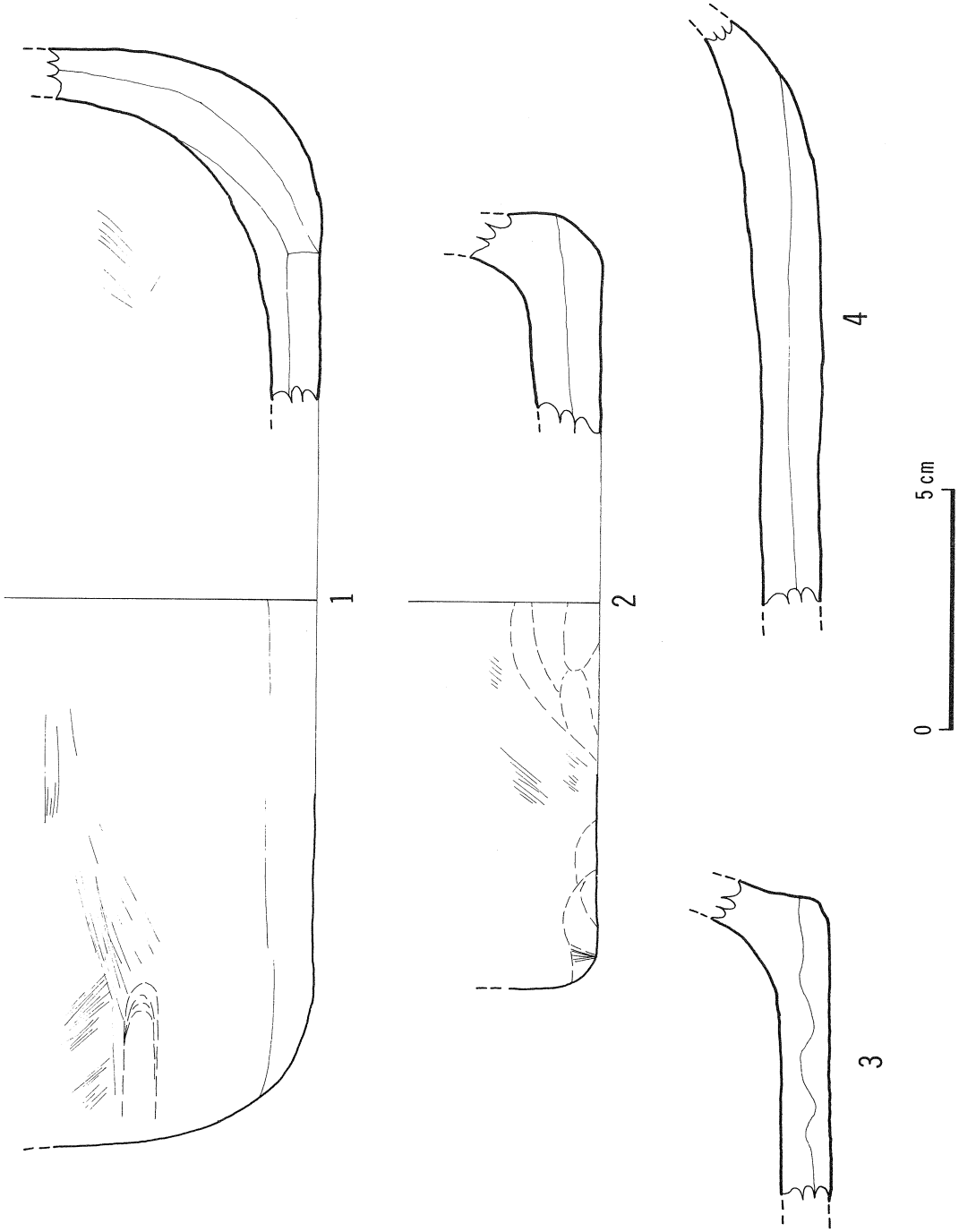
第Ⅰ－10図



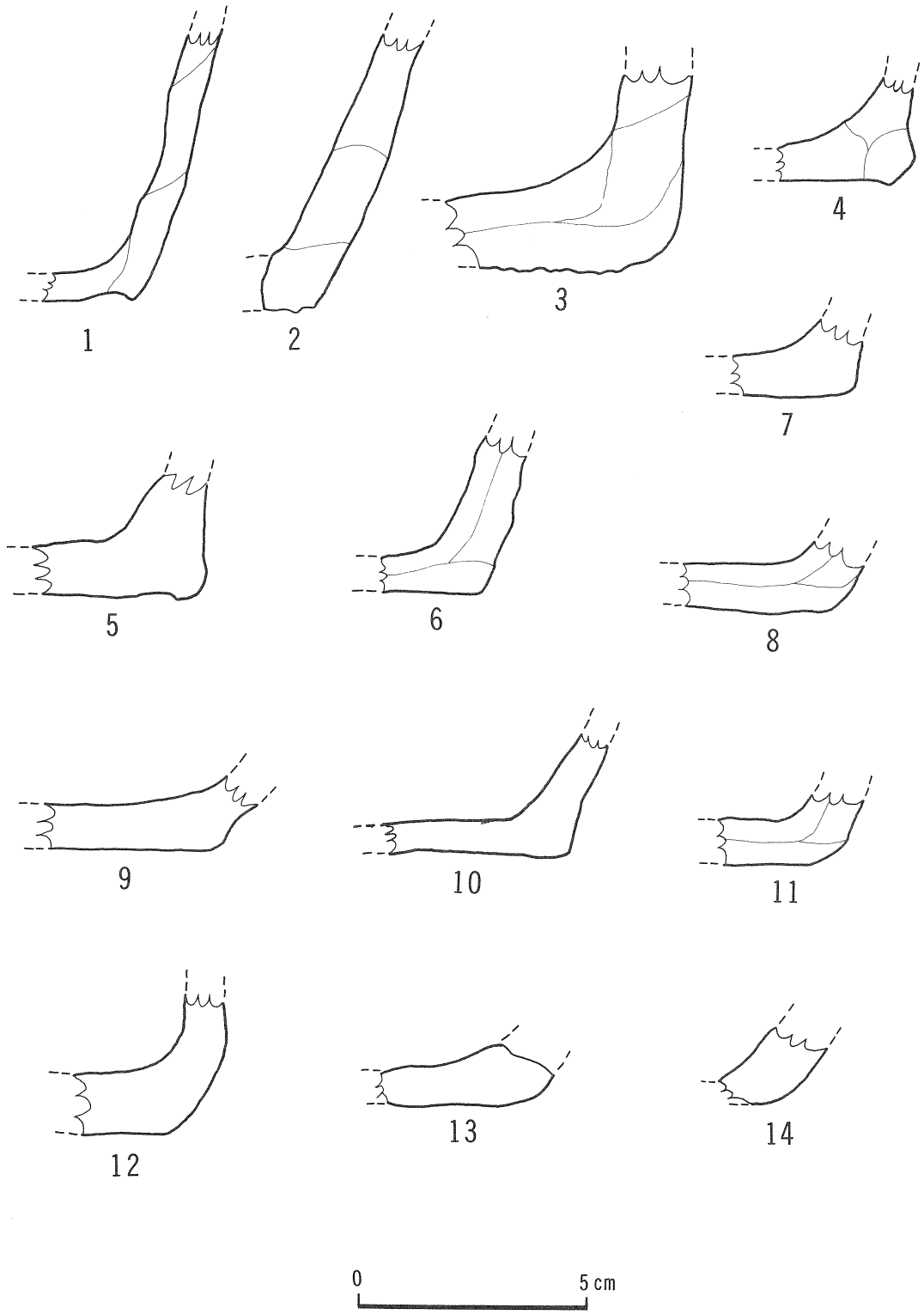
第Ⅰ－11図



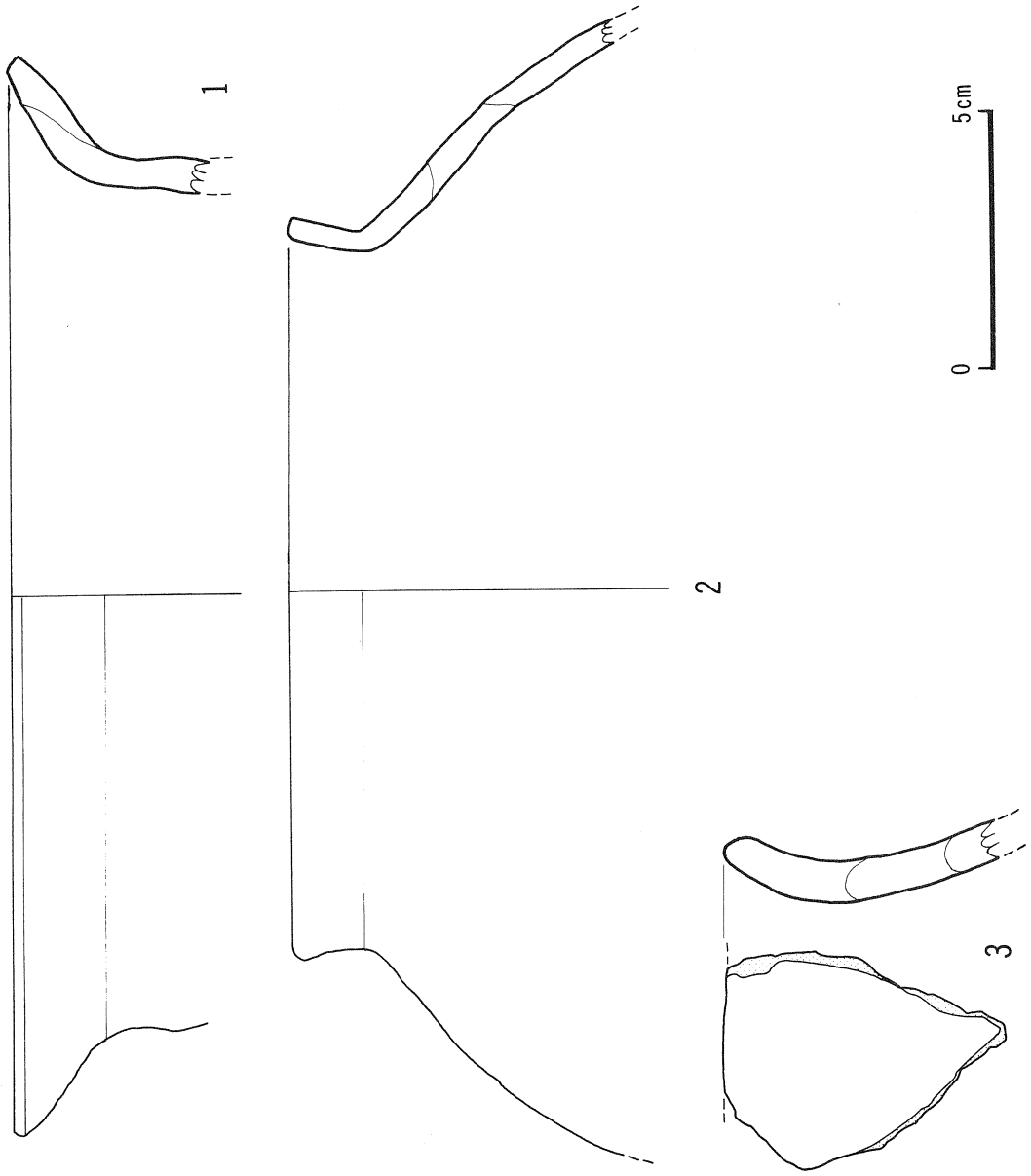
第Ⅰ－12図



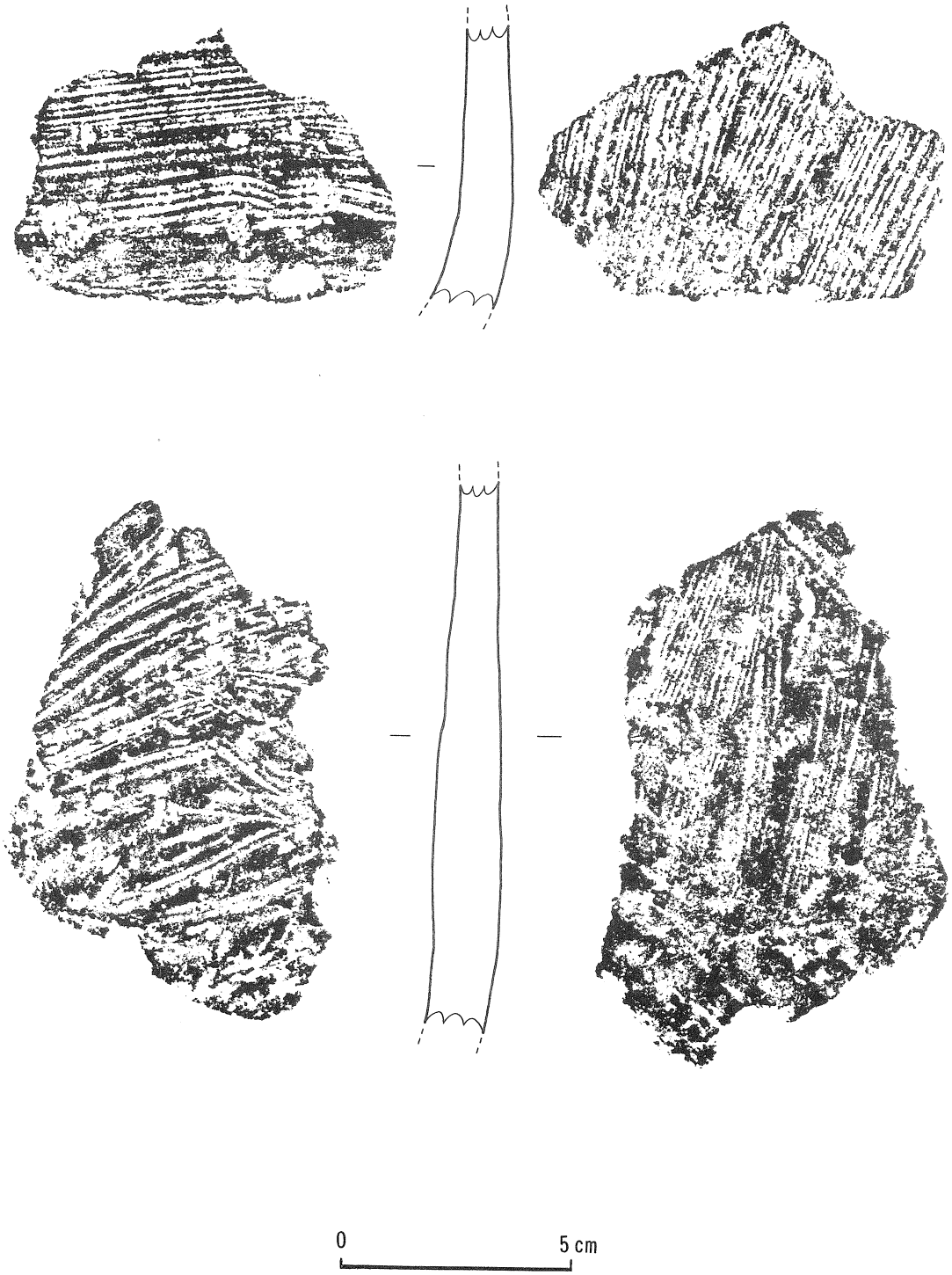
第Ⅰ－13図



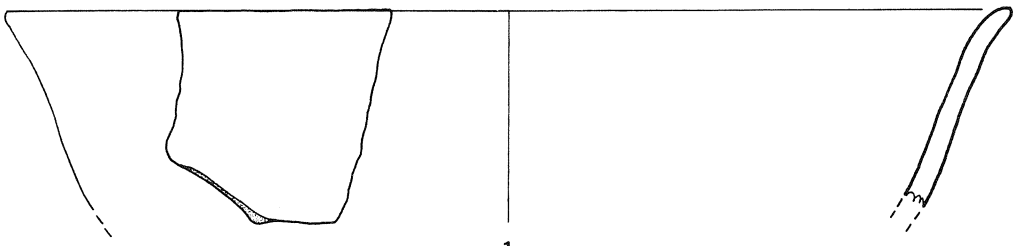
第Ⅰ－14図



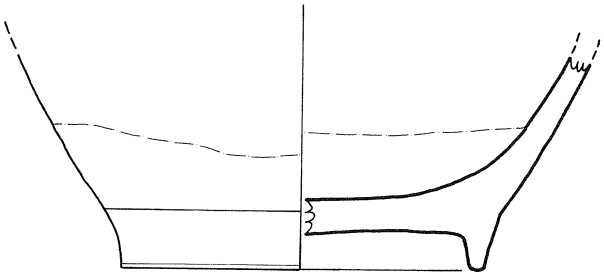
第Ⅰ－15図



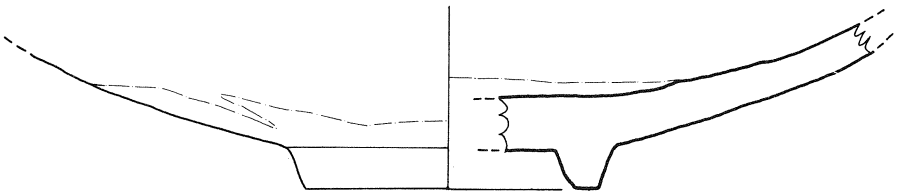
第Ⅰ－16図



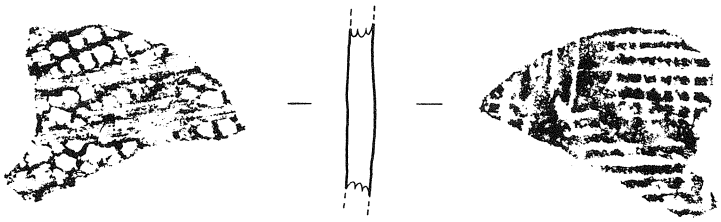
1



2



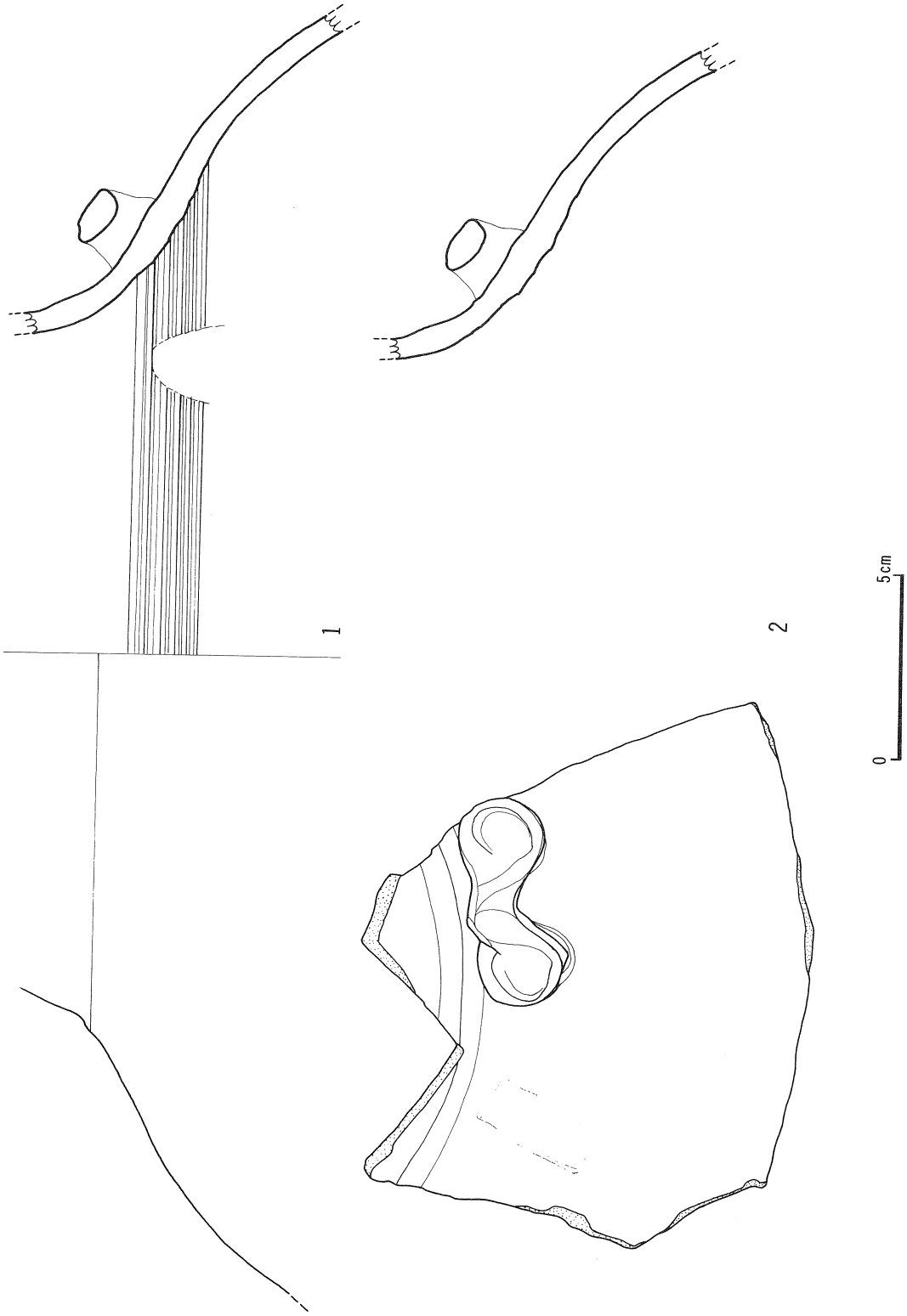
3



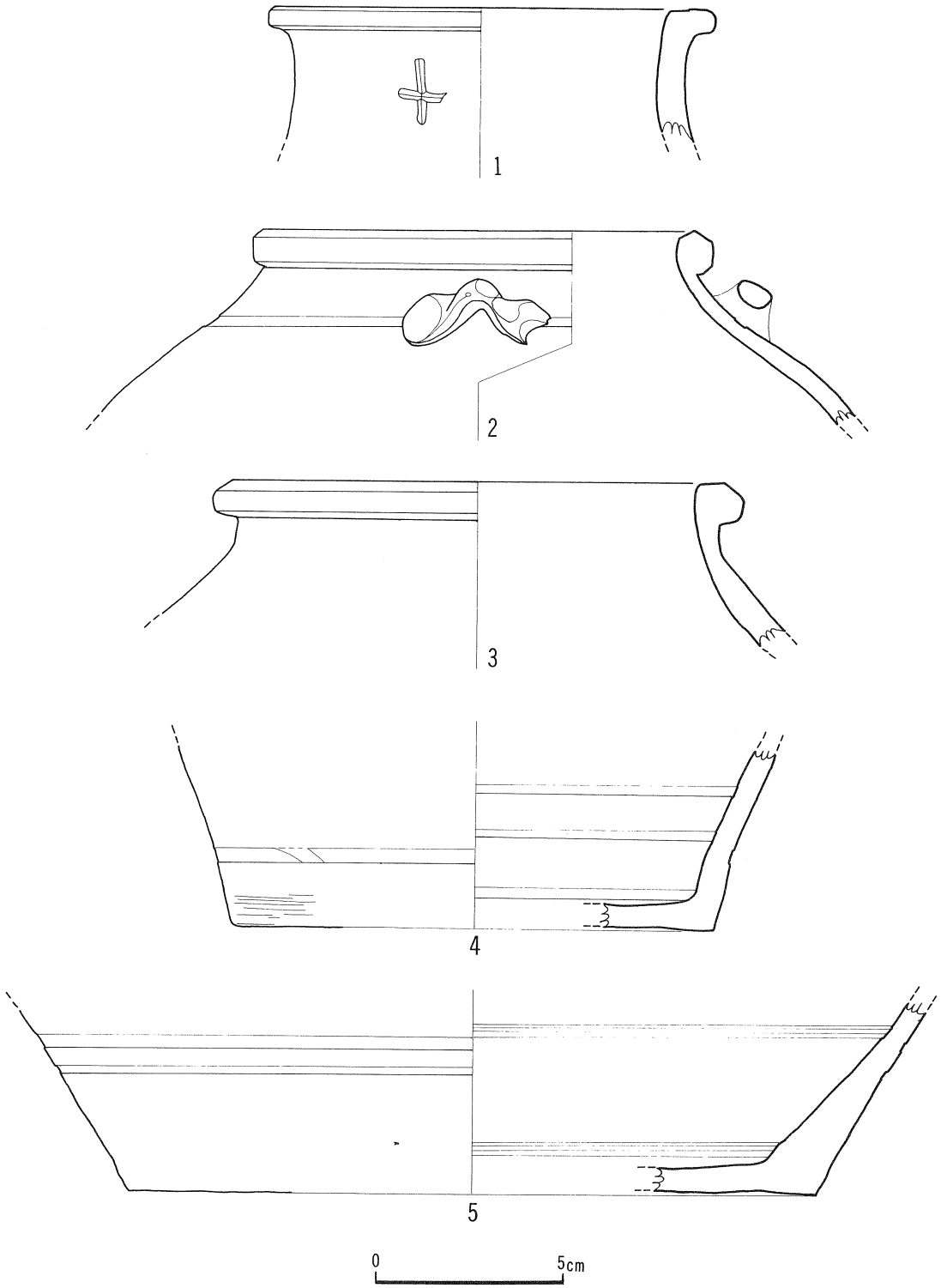
4

0　　5cm

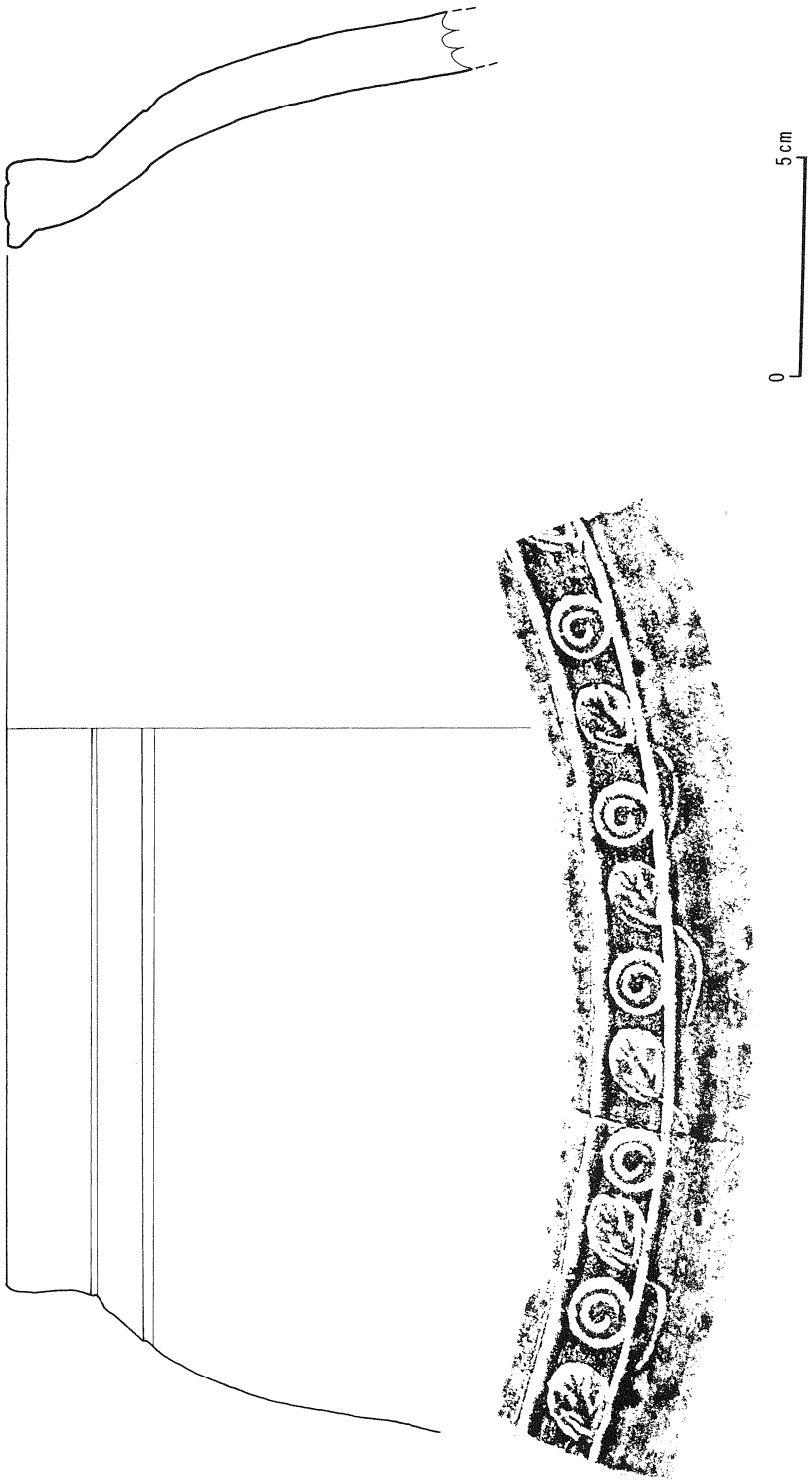
第Ⅰ－17図



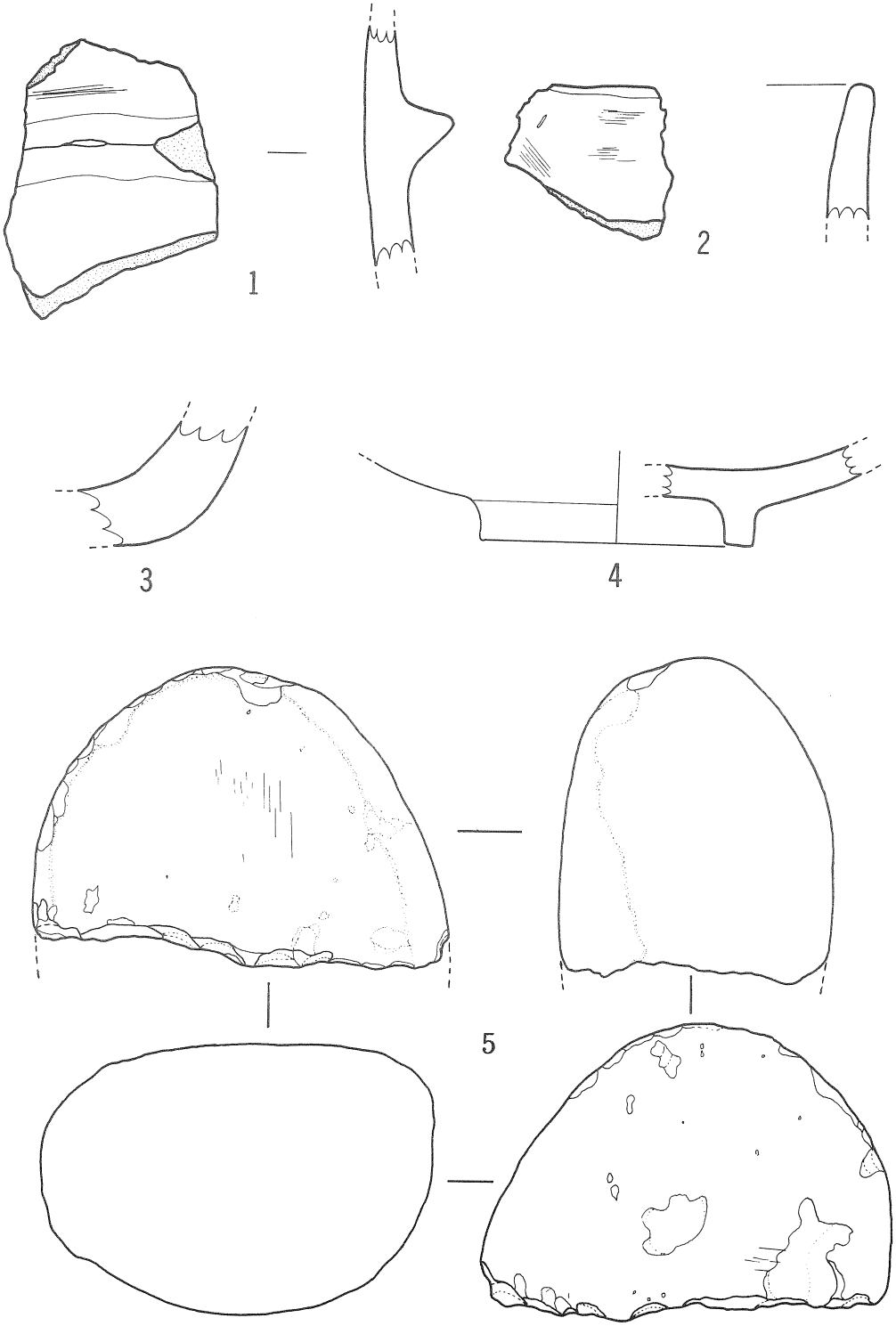
第Ⅰ－18図



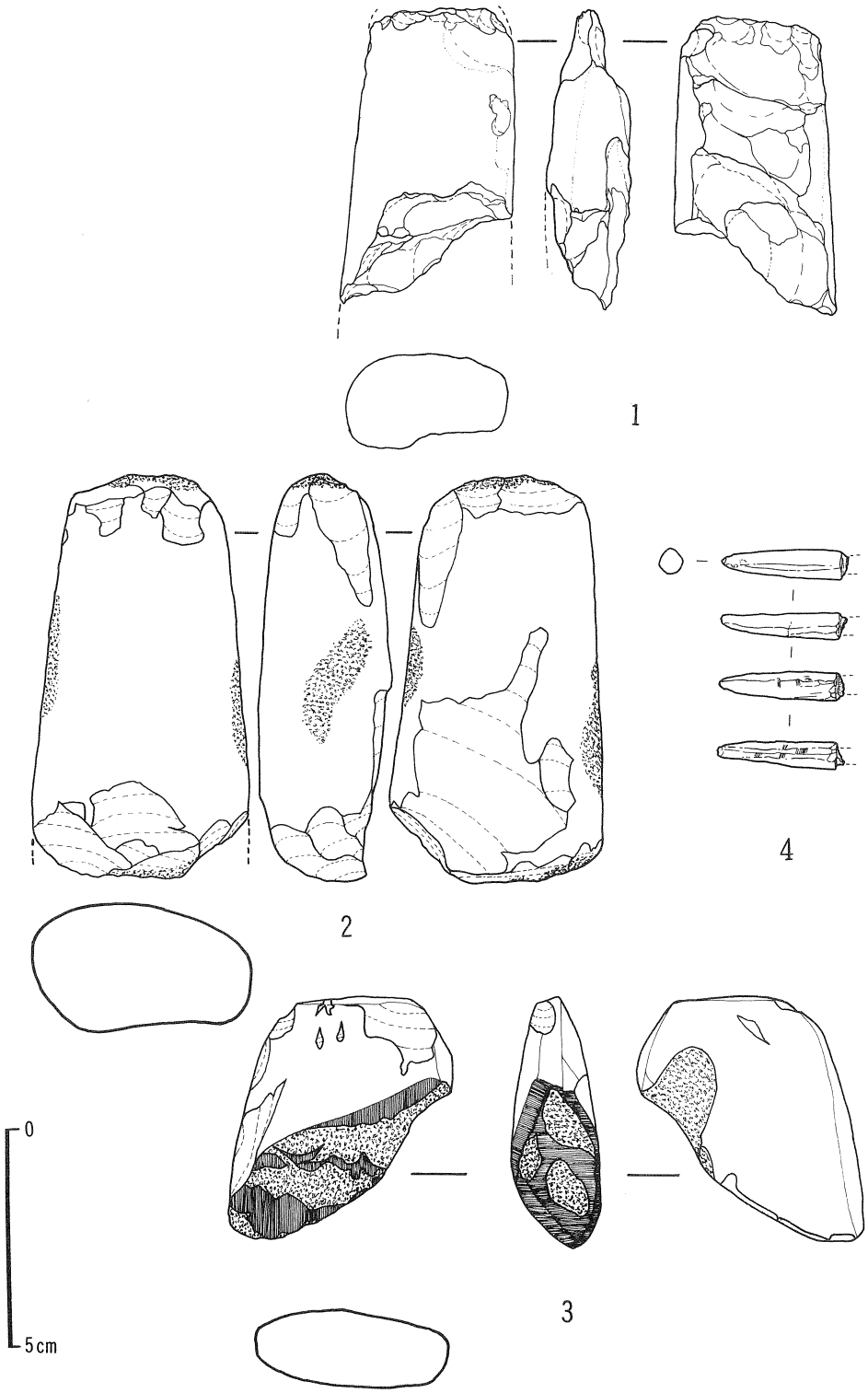
第Ⅰ－19図



第Ⅰ－20図



第Ⅰ－21図



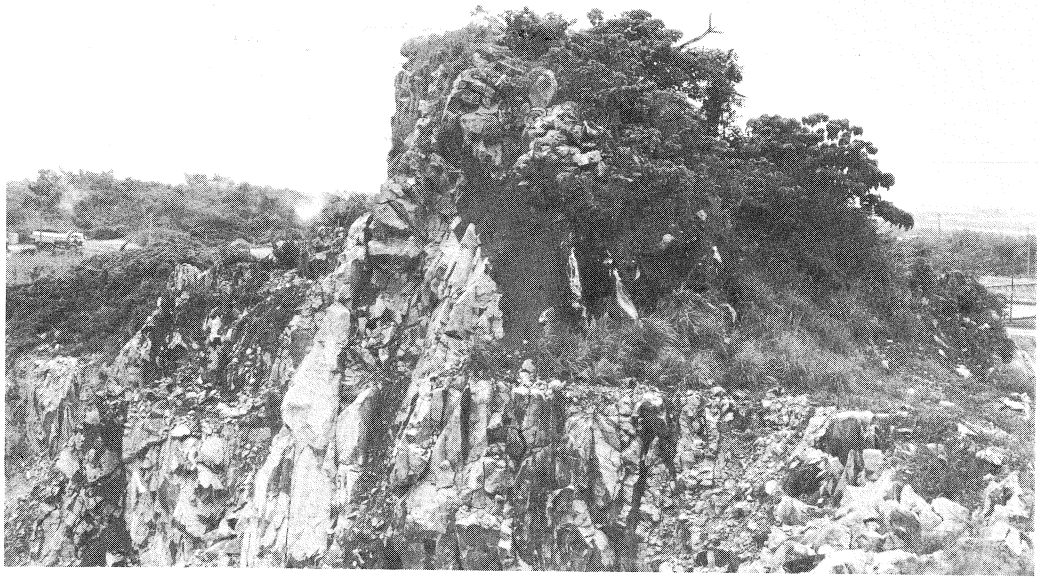
図版Ⅰ－1

A

B

図版Ⅰ－2

A



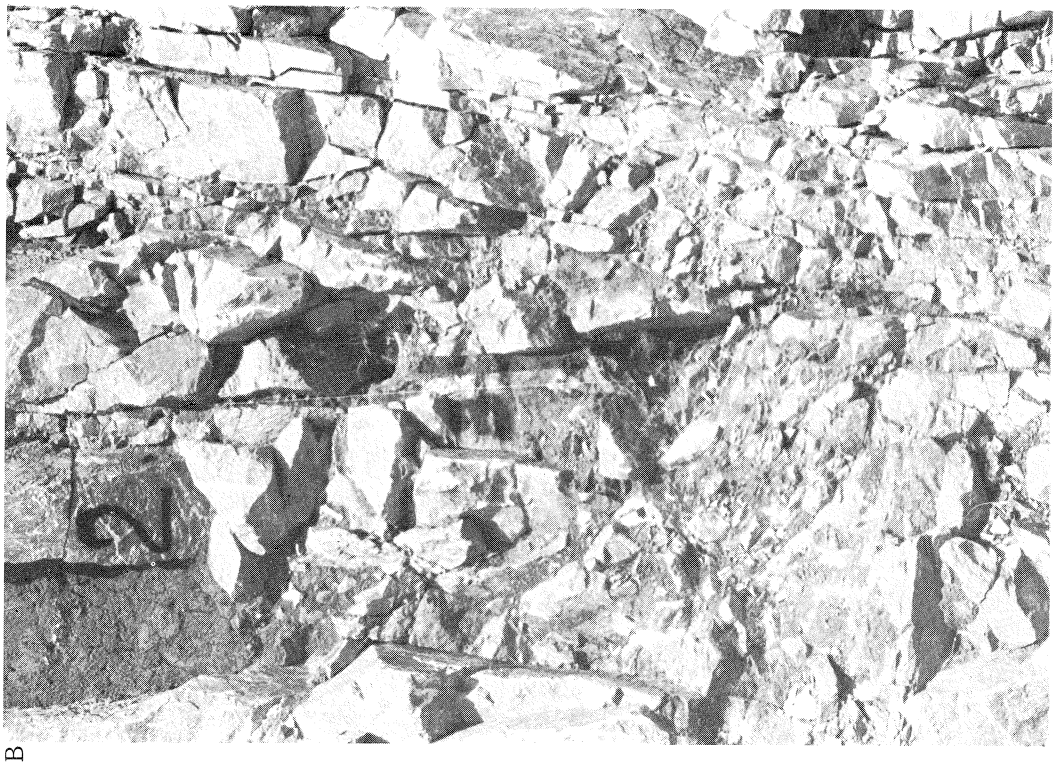
B

図版Ⅰ－3

A

B

図版Ⅰ－4



B

A

図版Ⅰ－5

B

A

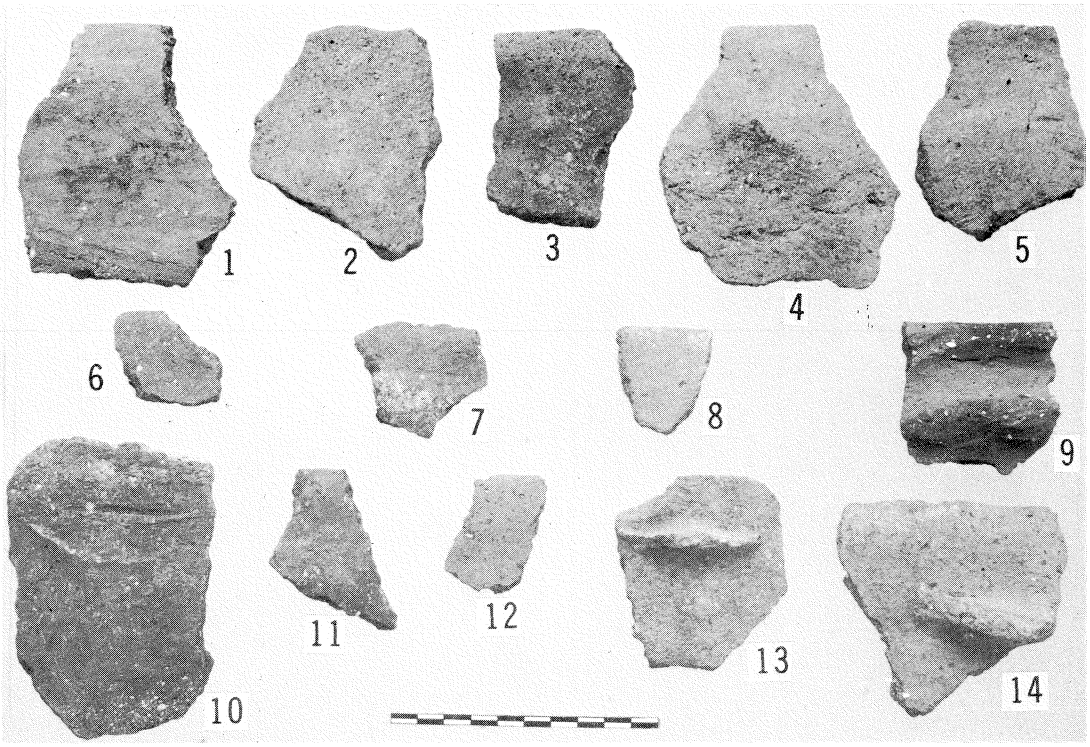
図版Ⅰ－6

A

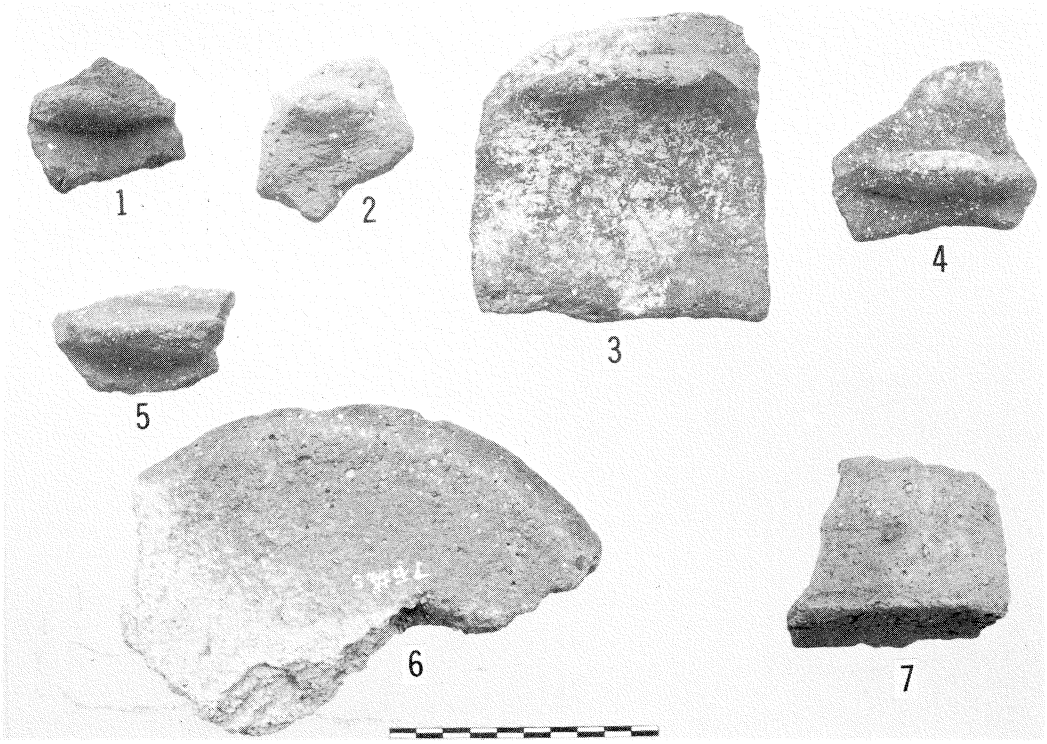
B

図版Ⅰ－7

A

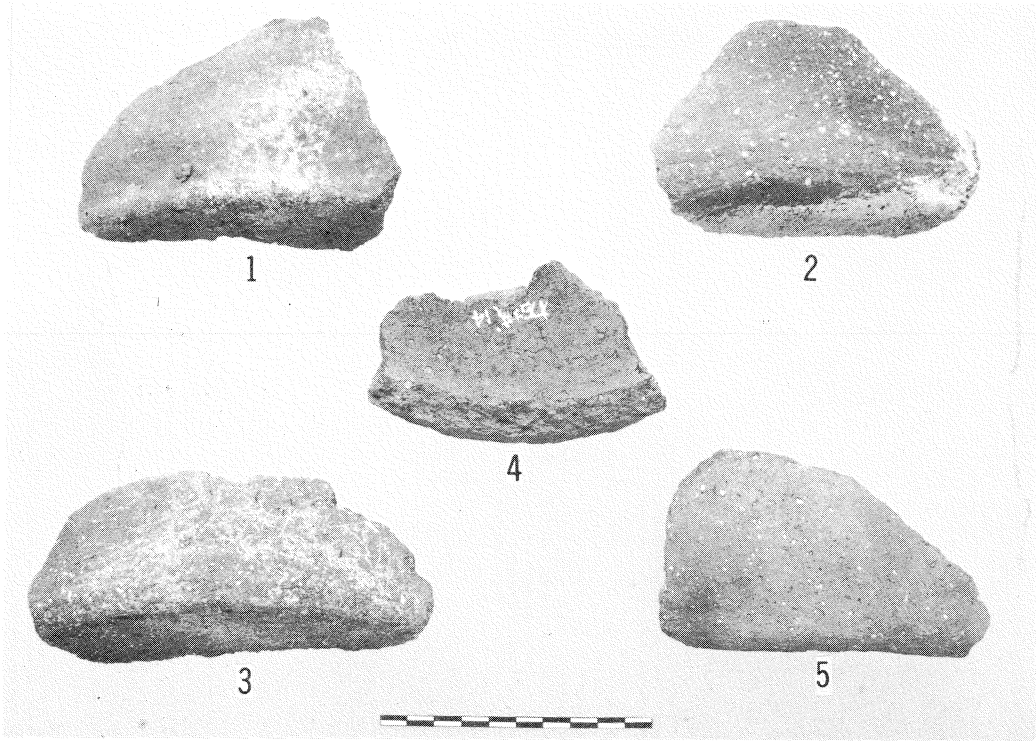


B

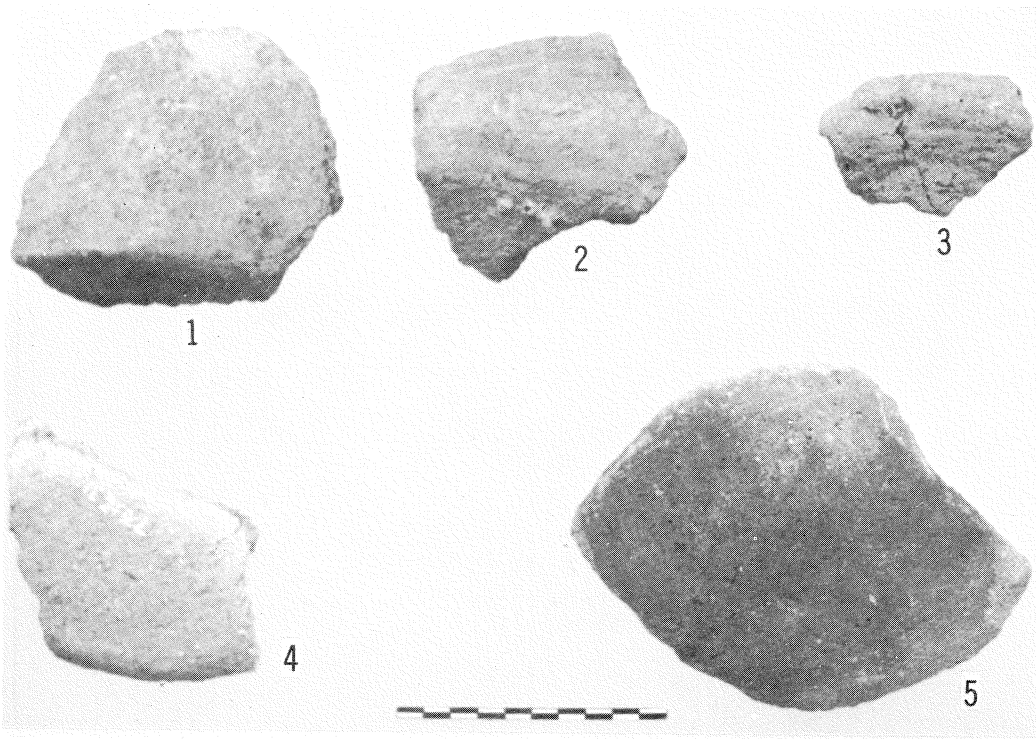


図版Ⅰ－8

A

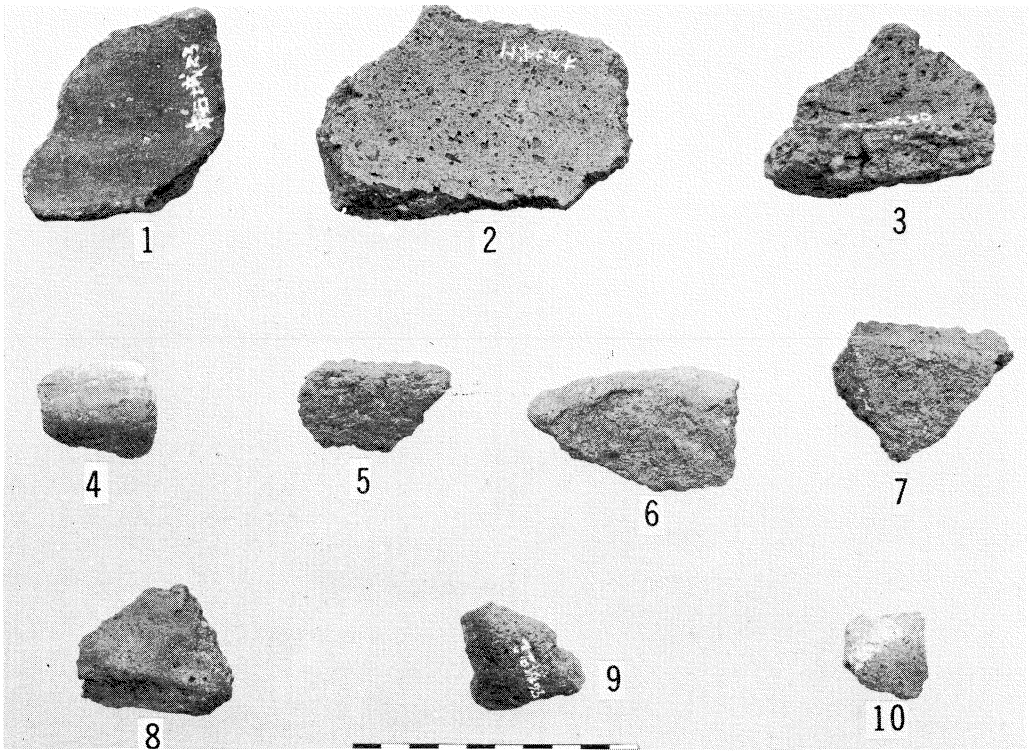


B

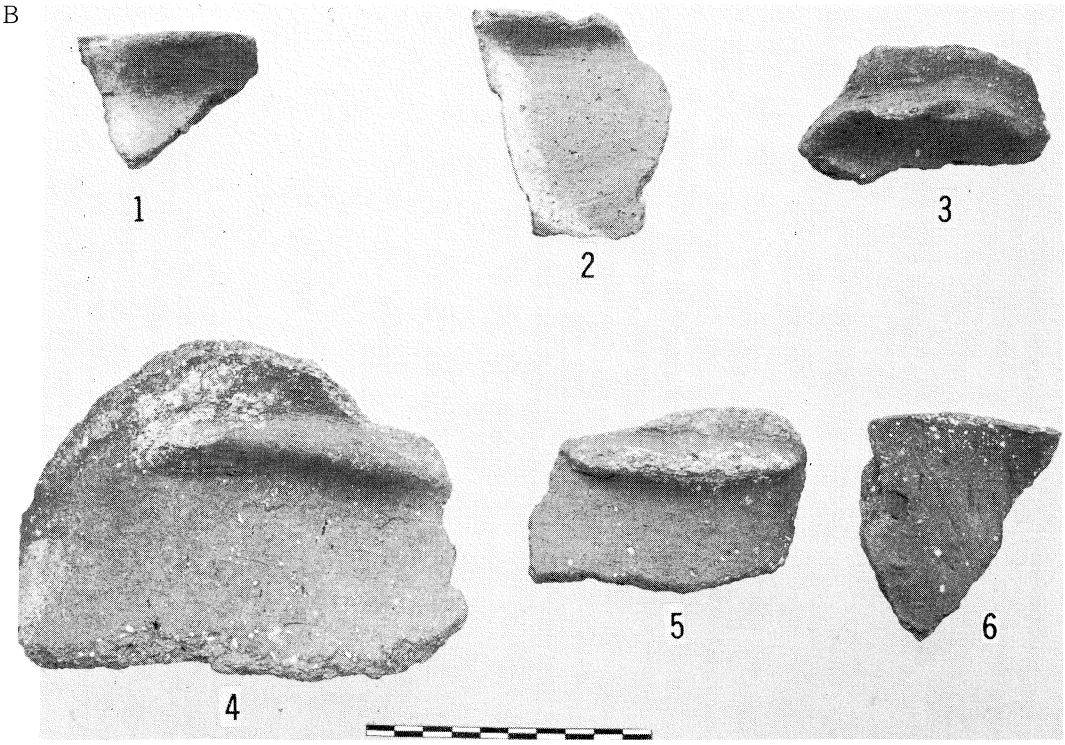


図版Ⅰ－9

A

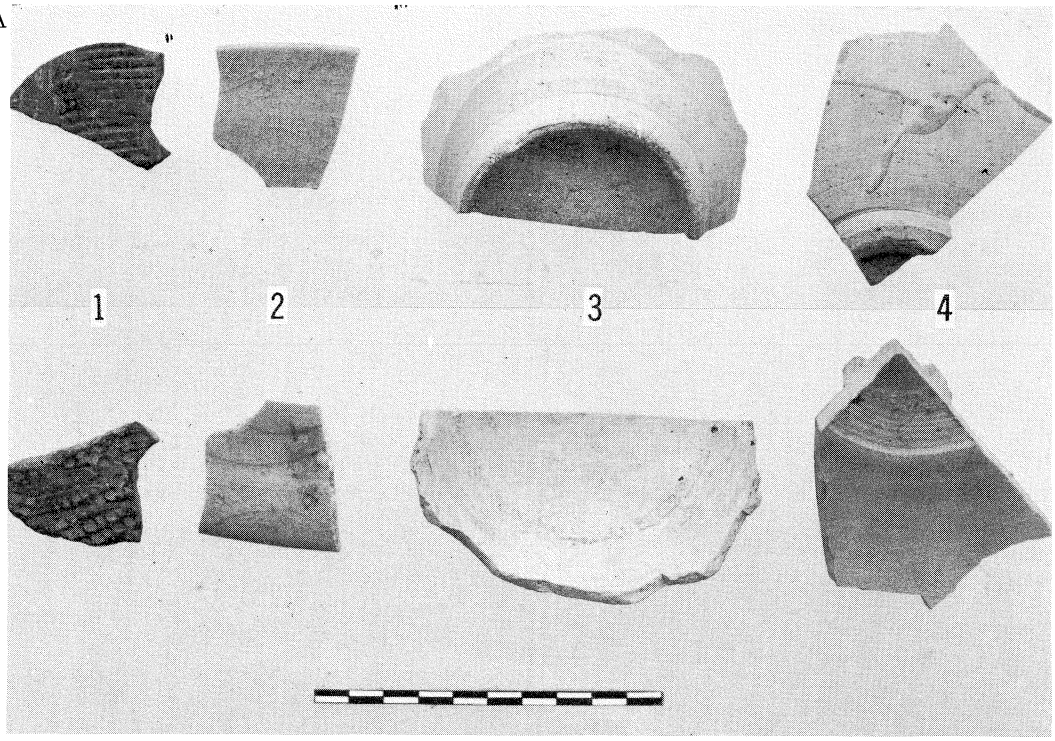


B

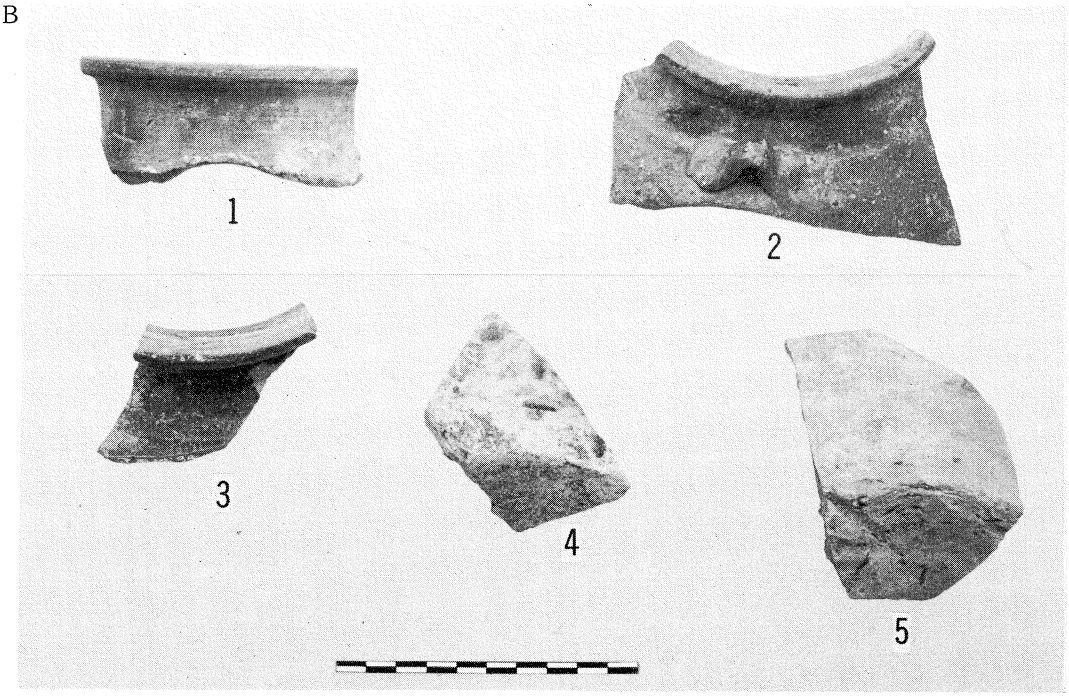


図版Ⅰ－10

A



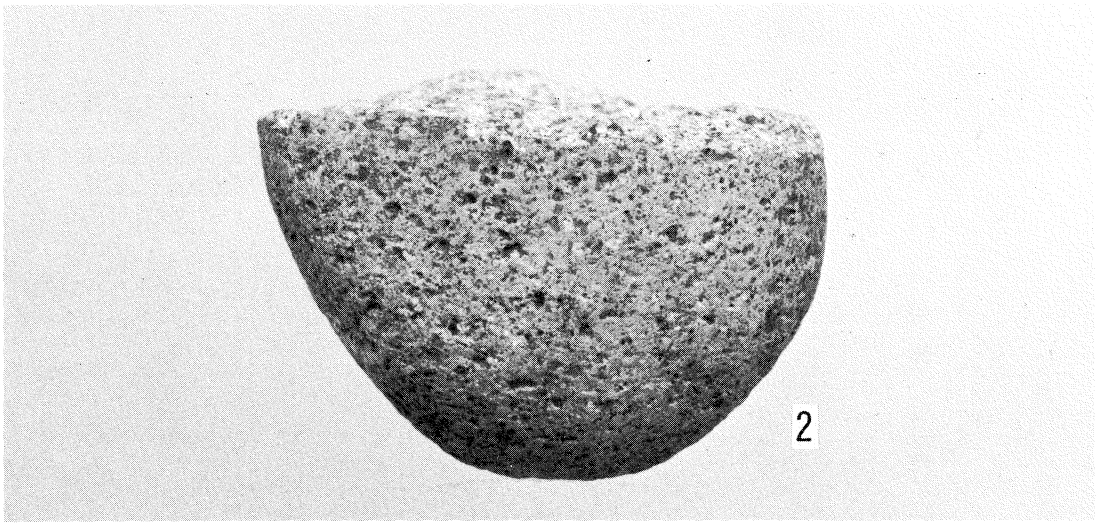
B



図版Ⅰ－11

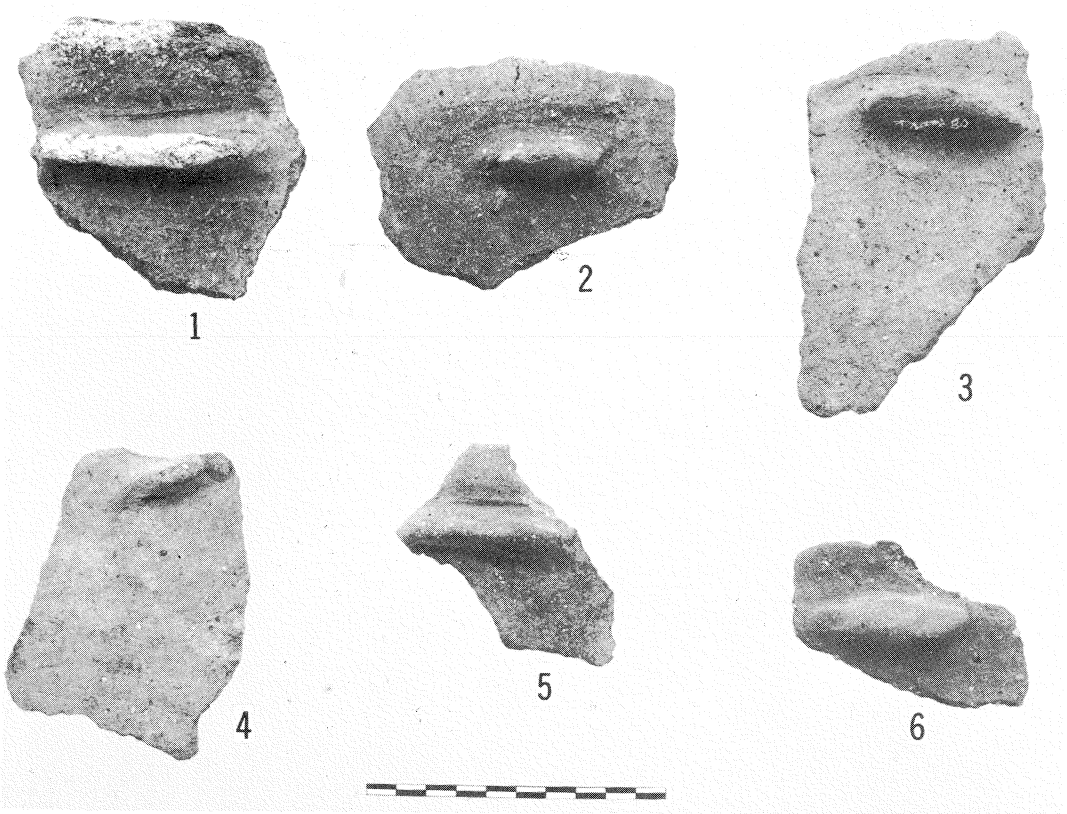
A

B

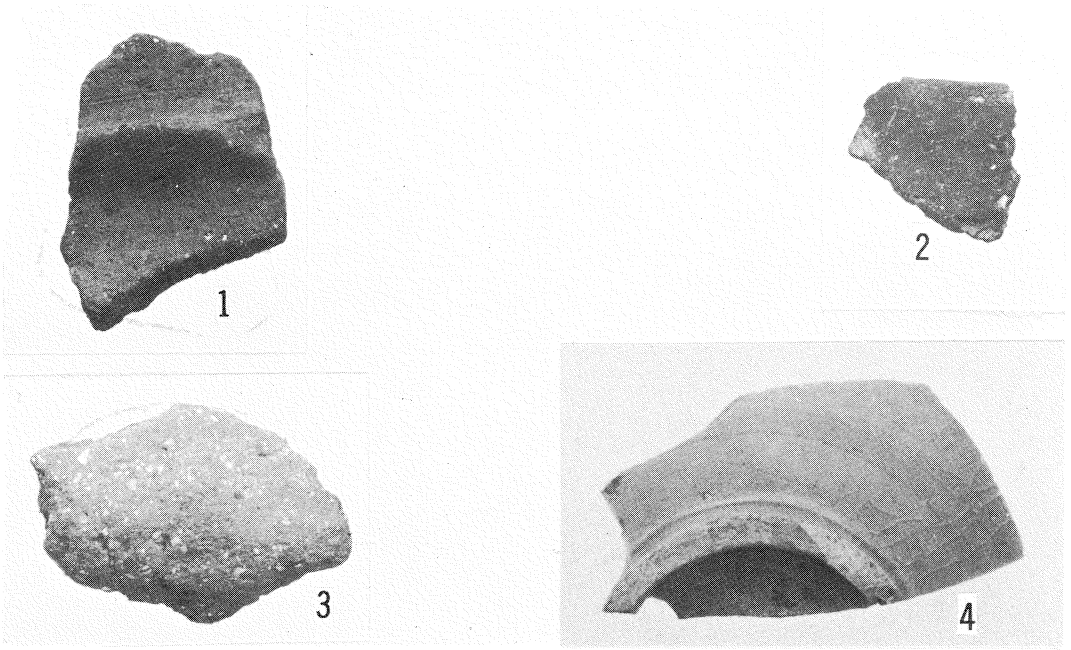


図版Ⅰ－12

A

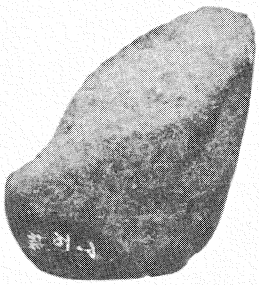


B



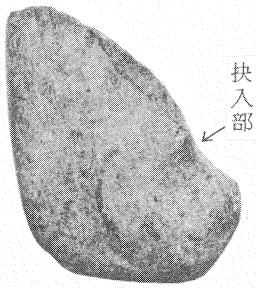
図版Ⅰ－13

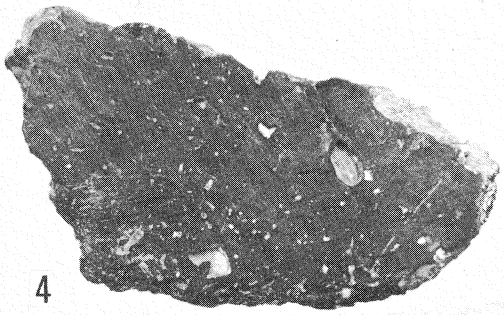
1



2

3





4

V　石垣市石城山動物遺骸群集の概要

長谷川　善　和[1]
野　原　朝　秀[2]

いきさつ

昭和51年7月17日に沖縄県教育委員会の知念勇氏，石垣市教育委員会の石堂徳一氏らによって石城山遺跡の踏査が行なわれ，その際若干の鹿角化石などを採集した。当標本の種名について筆者に同定の依頼があった。これはすでに琉球列島から絶滅してしまった，リュウキュウジカ，*Metacervulus astylodon* (MATSUMOTO) に属することが判明した。その后2回ほど現地を調査したが，この石城山遺跡はほとんど壊滅状態といえるほど荒れてしまった。石灰岩採掘によって生じた裂か堆積物は完全に破壊されずに残っていた事から若干の検討ができた。とくに昭和52年秋には正式に調査を実施した。ここにその概要を報告する。

石垣島の脊椎動物化石についての研究は皆無に近い。Foster（1965）が轟川流域から鹿化石の産出した報告があるが種名は記されていなかった。大塚，長谷川（1973）は白保部落の宮良松氏が轟川流域のトウンヌウ原の田んぼの中から採集した標本について記載し，これがリウキュウジカであることを報告した。その地点がFosterのそれと同じかどうか不明である。Fosterは鹿化石の層準を琉球層群の下にくる，名蔵礫層の1メンバーである，ブネラ粘土部層からの由来と考えた。大塚等はこれについて議論したが今回その層準がほぼ確定したので合せてその訂正をしておくことにした。　で合せてその訂正をしておくことにした。

石城山の動物群集はかくて第2番目のしかも優良な産地であることが判明したのでその内容と意味について若干の考察をしてみる。

この調査に際しては沖縄県教育委員会および石垣市教育委員会の関係者の皆様方の御協力によったが，とくに安里嗣淳，知念勇，石堂徳一，大浜永亘，石垣久雄の諸氏からは種々御便宜を得た。厚く御礼申し上げる。

この報告を上梓するにあたり琉球大学教育学部の上江洲直子さんに資料の整理を，日本大学の野刈屋宏氏に両棲類の同定を，国立科学博物館の小野慶一氏に鳥類の同定を手伝っていただいた記して厚く御礼申し上げる。

なお，本研究の一部に文部省科学研究費，特定研究「古文化財」52年度の経費（B－4）を使用した。合せて関係者の方々に厚くお礼申し上げる。

(1)　石城山動物群（いしすくやまどうぶつぐん）

石垣市の北方の石城山に発達する古生層に属する，レンズ状石灰岩塊のフィッシャー堆積物中には相当数の脊椎動物化石を包含する。この脊椎動物群集の示す動物相を石城山動物群と呼ぶことにする。この動物群を構成する種類については今後正確に同定を要するが比較資料が充分に揃わないため，その同定が完全に終えていない。また発掘から報告書作成までに時間が充分になかったため内容は暫定的である。しかし，その大要を把握することはできよう。次に種名を挙げる。

(1)　国立科学博物館古脊椎動物研究室
(2)　琉球大学教育学部

哺乳類

1 *Rhinolophus cornutus* コキクガシラコウモリ

2 *Pteropus dasymallus yayeyamae?* ヤエヤマオオコウモリ

3 *Rattus rattus* クマネズミ

4 *Metacervulus astylodon* リュウキュウジカ

爬虫類

5 *Clemmys mutica?* ミナミイシガメ？

6 *Lygosoma(Leiolopisma) neevesii boettgeri* サキシマスベトカゲ

7 *Japalura polygonata* キノボリトカゲ

8 *Elaphe?* sp. ヘビ類

鳥　類

9 *Corvus macrorhynchos* ハシブトガラス

10 *Corvus corone* ハシボソガラス

11 *Garrulus gladarius* カケス

12 *Strunus* sp. indet. ムクドリ類

13 *Hypsipetes amaurotis* ヒヨドリ

14 Passeriformes, gen. et sp. indet. スズメ類

15 Columbidae, gen. et sp. indet. ハト類

16 Falconidae, gen. et sp. indet. ワシタカ類

17 Picidae, gen. et sp. indet. キツツキ類？

両棲類

18 *Rana(R.)* cf. *nigromaculata* トノサマガエル

19 *Rana(R.) okinavana* リュウキュウアカガエル

20 *Rana(R.) limnocharis* ヌマガエル

21 *Rana(R?) namiyei* ナミエガエル

22 *Rana(R?) narina* ハナサキガエル

23 *Rana(Babina) holsti ?* ホルストガエル？

24 *Rana(R.) tagoi* タゴガエル

25 *Rhacophorus japonicus* ニホンカジカガエル

以上，哺乳類４種，爬虫類４種，鳥類９種，両棲類８種で計25種類の脊椎動物化石を得た。更に検討を進めるならば種数はより増加すると思われるが大局的には大体その傾向を知ることができよう。この中でリュウキュウジカは完全に絶滅種であり，琉球諸島に最も多い種類である。ただし，現在のところ宮古島などからは発見されていない。キツツキ類はノグチゲラに比較されるかもしれない。両棲類ではとくに興味深い。トノサマガエル，ナミエガエル，ホルストガエル？，タゴガエルなどは石垣島には現生種がみられず，トノサマガエル以外は沖縄島などに生息するものである。トノサマガエルは琉球諸島にみられないが，かつては全域にわ

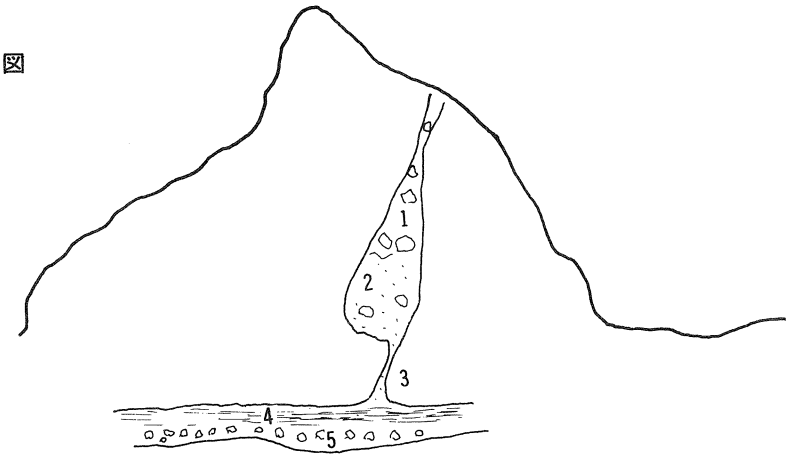
たって生息した可能性がある。この種は本洲系に分布するものでその分布ルート，系統など今後検討すべき問題が残されている。若干の陸生貝類化石も含まれているが保存が悪く採集をしてない。

この動物群集の示す内容は石垣島の現生種の出現が少くともこの時期までたどれることを意味する。しかも，その中には現生しない種類でかつ琉球列島のいずれかに類縁をたどる事のできるものが多く，大局としては第四紀の琉球列島要素の大部分であるといえる。これらがいずれのルートで琉球列島に渡来し，分化したものか今後の問題であるが，沖縄島の山下町遺跡での年代測定は32,100±1,000年，港川遺跡で18,000±500年といった値があり，大体更新世末までリュウキュウジカの存在があったと考えられることから，石城動物群集の時代も大体似たものであろう。とくに港川動物群集（高井，長谷川，1971）の要素とは必ずしも一致しないが，堆積状態などは類似する点が多い。この石城動物群集には港川上部層でみられるようなイノシシが存在しないことから極めて新しい時期のものではない。時代的にはほぼ港川下部層に対比できるものと考えている。

(2) 地　質

石城動物群集を含む地層は現在のところ石灰岩採掘現場において露出している，大小7箇所のフィッシャー（割れ目）の堆積物中にみられる。そのうち中央の突出した岩塊（第Ⅱ－1，Ⅱ－2，Ⅱ－3図版参照）を中心に発達した第2および第4フィッシャーに最も多くみられる。第2フィッシャーは大量の小型脊椎動物化石が含まれており，とくにネズミ類が多い（第Ⅱ－6図版参照）。

第Ⅱ－1図



図の説明

石城遺跡にみられる第4フィッシャーおよび下部の洞くつ堆積物の堆積状態を示す略図，第4フィシャーと下部の洞くつとの関係が明らかである。1. 含崩落石灰岩塊粘土層，2. 含礫オリーブ色粘土層，3. 残留粘土層，4. 含植物質シルト層，5. 亜角礫層。

第Ⅱ－1図および図版Ⅱ－2下図でみていくと，上から

1. 含崩落石灰岩塊粘土層10m±
2. 含礫オリーブ色粘土層　5m±
3. 褐色残留粘土層50cm±
4. 含植物質シルト層　5m±
5. 亜角礫層1m±

となる。4,5層は図版Ⅱ－2の2図（下図）中の記号Cあるいは第Ⅱ－1図でみられるような横穴を埋積した河成堆積物である。4層は海側では植物質を多量に含んだ黒味を帯びた粘土質のシルト層で花粉分析など行なう必要があろう。山側に向って残留粘土質と漸移する。残留粘土層は洞くつ堆積物の上部から次第に粘土質が強くなり，狭いフィッシャー内に多く堆積して上部オリーブ色粘土層に連なる。脊椎動物の大部分はこの層に含まれる。上部層は石灰岩塊の崩落が多い粘土層である。ほとんど化石をみていない。よって，4層と3層の一部は流入堆積物であり，3の一部から2，1の各層は裂か堆積物である。すなわち後者は落ち込みを示している。第2フィッシャーは第2層と同層準と考えられる。5，6，7の各フィッシャーからも若干化石が産出しているがいずれもリュウキュウジカであり，全体的にかなり大量のリュウキュウジカが産出している。

第1層の最上部すなわち表土近くは貝塚期の遺物が被覆している。

なお，この報告では時間的に各種の標本に関して記載できないので簡単に図版で示すことにした。別に改めてその報告をする予定である。

(3) 石垣島の鹿化石に関する補足

大塚，長谷川（1973）は石垣市，白保轟川流域から宮良松氏の採集した鹿化石について記載した。これは石垣島から鹿化石について記載した最初のものである。この標本については産状が不明であったために産出層準について疑問があった。この時はブネラ粘土層から出土した可能性を論じたが，その後筆者等が何回か現地調査を進めていた所，産地付近にはかつて琉球石灰岩のバンク状露頭があり，そこを崩した場所がみつかり，しかもさらにこゝに示した（図版Ⅱ－12・13）ような標本を入手できた。後背地は琉球石灰岩が広く分布していること，1部の標本（図版Ⅱ－12の1・2・3参照）に明瞭なトラバーチンの付着がみられることなどから，当地域の鹿化石は琉球石灰岩のフィッシャー堆積物中に含まれていたことは明瞭である。よって，鹿化石がブネラ粘土層である可能性は否定されたので明記する。

この鹿化石は前回報告した部分とは異なる部分も多いが，他地域で知られる多くの鹿化石との比較からリュウキュウジカに属することは間違いない。

(4) カンドウ原遺跡のリュウキュウジカ

1本の不完全な中手骨であるが化石化の状態は発掘された他の獣骨類とは異質である。よって周囲の地層中に本来あったものが発掘の際にまぎれ込んだか，当時の貝塚人が化石を拾ってきたもので偶然貝塚遺物の中にまぎれ込んだというような珍らしい例かもしれない。知念勇氏の了解のもとに特に本報告に併記させていただいたものである。

(5) 鳥類と両棲類の簡単な記述

鳥　類

スズメ目，（Passeriformes）

カラス科　（Corvidae）

ハシボソガラス　*(Corvus corone)*，（pl. 11; figs. 9，10）

右烏口骨：第4フィッシャー。骨体は細長くglenoid facet（上腕骨関節窩）は，長楕円形をなす。Scapular facet（肩甲骨関節窩）は無い。Procoracoid は突出していない。大きさから，ハシボソガラスに同定。

ハシブトガラス　*(Corvus macrorhynchos)*，（pl. 11; figs. 29，30）

右大腿骨：腸骨関節窩は，平担である。大腿骨頭窩は，大腿骨頭の上面にある。大転子稜は，直線状である。Obturator ridge はない。ハシボソガラスに比べて，腸骨関節窩の後縁を形成する，fossa が深い。大きさから，ハシブトガラスと同定。

左中手骨：第4フィッシャー。（pl. 11; fig. 25）

中手骨は，第2中手骨上面に深いtendinal groove がある。Intermetacarpal tuberosity が発達し，第3中手骨と融合する。第3指関節面（facet for digit Ⅲ）が大きい。大きさからハシブトガラスと同定。

カケス属（*Garrulus* sp. indet）

左大腿骨遠位端：第4フイッシャー。腓骨関節顆は，狭い。外側顆は，骨幹上に伸びて稜を形成する。Popliteal area は，深い窩を形成する。内側顆は，低い。大きさから，カケス属と同定。

ムクドリ科（Sturnidae）

ムクドリ属（*Sturunus* sp. indet），（pl. 11，figs. 14，15）

左肩甲骨．遠位端欠除関節窩は，円形をなす。鎖骨突起は，内側前方に突出し，下縁は肥厚する。鎖骨関節突起は，関節窩と，鎖骨突起の中位にあり，細い突起をなし，前方へ突出する。肩甲骨体は，一様な高さで，やや背側に弯曲する。大きさから，ムクドリ属と同定。

ヒヨドリ科（Pycnonotidae）

ヒヨドリ属（*Hypsipetes*）

ヒヨドリ（*Hypsipetes amaurotis*），（pl. 11，figs. 7，8）

右烏口骨：第4フィッシャー。Brachial tuberosity は，内側前方に突出する。Procoracoid は顕著である。Glenoid facet は長楕円形をなす。Scapular facet は Glenoid facet と連続しており，不明瞭である。大きさからヒヨドリと同定。

ハト目（Columbiformes）

ハト科（Columbidae，gen. et sp. indet）

左烏口骨近位端：第2フィッシャー。関節窩は，扁豆形である。肩甲骨関節窩は，烏口骨関節窩とは，完全に別の窩を形成せず，連続しており，境界がわずかに隆起しているだけである。Procoracoid は小さい。大きさは，キジバトより大きい。

ワシタカ目（Accipitormes gen. et sp. indet）

趾骨：第4フィッシャー。骨体は，背側に強くわん曲している。近位下端の突起は，大きい。大

きさから，中形のワシと同定。

両棲類

ハナサキガエル，*Rana (Rana) narina*, 左上腕骨，産地：第2フィッシャー，(pl. Ⅱ−10, figs. 32, 33)

完全な標本である。回外節の発達が弱いことから雌の個体と考えられる。化骨化の様子から現生の可能性がある。骨体の左右幅がアオガエル科のそれよりも幅広い。Epicondylus ulnaris の先端が，滑車の最下端と同レベルにある。結節間溝が（上腕骨稜基部内側に）ある。

Rana (R.) narina 種の特徴：骨体は，ほっそりとして左右幅は一定。上腕骨稜の前下縁は，骨体前縁に対して鋭角に交わる。結節間溝は，明瞭。内外側に frange がある。Olecranon scar は明瞭で，左右幅が狭く上下に長い。Olecranon scar 外縁は，外側 frange に近づく。

ハナサキガエル，*Rana (R.) narina* 左上腕骨，第2フィッシャー，(pl. Ⅱ−10, figs. 45, 46)
骨頭及び滑車を欠如する標本である。回外節の発達が弱いことから雌の個体と考えられる。
結節間溝が，（上腕骨稜基部内側に）ある。

Rana (R.) narina 種の特徴：骨体は，ほっそりとして左右幅は一定。上腕骨稜の前下縁は，骨体前縁に対して鋭角に交わる。結節間溝は明瞭。内外側に frange がある。Olecranon scar は明瞭。

ハナサキガエル，*Rana (R.) narina*, 右腸骨片，第2フィッシャー，(pl. Ⅱ−10, figs. 20, 21)

上角，下角及び腸骨突起の一部を欠如する標本である。腸骨翼が良く発達する。

Rana (R.) narina 種の特徴：Dorsal protuberance が，良く発達する。Dorsal protuberance 後下端と寛臼上縁との間隔が広い。dorsal protuberance 前端は，寛臼前端よりも前方にある。*Rana (B.) holsti* に比べて下部わん入角が広い。

リュウキュウアカガエル，*Rana (R.) okinavana*, 左上腕骨。第2フィッシャー産，(pl. Ⅱ−10, figs. 47)
骨頭及び epicondylus ulnaris の先端の一部を欠如する標本である。回外節がやや発達することから雄の個体と考えられる。結節間溝が，（上腕骨稜基部内側）にある。

Rana (R.) okinavana 種の特徴：骨体の左右幅は，長さの割に細い。内外側に frange がある。特に外側 frange は明瞭。滑車窩は浅い。

タゴガエル，*Rana (R.)* cf. *tagoi* 右上腕骨下端。第4フィッシャー産。(pl. Ⅱ−10, figs. 30, 31)
骨体上半分を欠如する標本である。回外節が発達しないことから雌の個体と考えられる。
Epicondylus ulnaris の先端は，滑車最下端よりも下方にある。

Rana (R.) cf. *tagoi* 種の特徴：外側 frange がある。Epicondylus ulnaris の先端は滑車最下端よりも下方にある。Epicondylus radiaris は明瞭である。Olecranon scar は明瞭で上下に長い。

トノサマガエル，*Rana (R.)* cf. *nigromaculata*, 仙椎部分。産地：第2フィッシャー下方，(pl. Ⅱ−10, figs. 22, 24)

左右の横突起の一部を欠如する標本である。横突起は，棒状。椎体前面は前凸。後仙椎顆は，互いに離れる。

Rana (R.) cf. *nigromaculata*　種の特徴：椎体前面は前凸。横突起は棒状で後外側に向う。横突起上の稜は全体に前方へ傾く。

アオガエル？，*Rhacoqhorus*，gen. et sp. indet，右腸骨。第2フィッシャー下方，(pl. II－10, figs. 18, 19)

上角及び腸骨突起の先端の一部を欠如する標本である。腸骨翼は，アカガエル科のものほど発達しない。腸骨基部下縁と寛臼前縁との間隔が広い。

ハナサキガエル，*Rana (R.) narina* 左上腕骨。産地：4フィッシヤー。(pl. II－10, figs. 34, 35, 36)

完全な標本である。回外節の発達が，弱いことより雌の個体と考えられる。Epicondylus ulnarisの先端が，滑車の最下端と同レベルにある。結節間溝が（上腕骨稜基部内側に）ある。

Rana *(R.)* narina 種の特徴：上腕骨稜前縁は，直縁的，この前下縁は骨体前縁に対して鋭角に交わる。結節間溝は，明瞭。内外側に frange がある。Olecranon scar は，明瞭で，左右幅が狭く上下に長い。この外縁は現生のものほど外側 frange に近づかない。

ヌマガエル，*Rana (R.) limnocharis limnocharis*　右肩帯（肩甲骨，烏口骨，鎖骨）。産地：第2フィッシャー下方。

ほぼ完全な標本である。但し鎖骨の近位を欠如する。標本の状態から現生のものと考えられる。

稜が，肩甲骨烏口突起腹側前喙を走る。肩甲骨鎖骨突起前縁が後方に凹となる。

Rana (R.) limnocharis limnocharis　種の特徴：肩甲骨前縁中央が前方へ凸となる。

ニホンカジカガエル，*Rhacophorus* cf. *Japonicus*　左大腿骨。産地：第2フィッシャー。

両骨端のついた完全な標本である。骨体の長さ及び，骨体近位下縁に稜が走ることよりニホンカジカガエルと考えられる。全長 14.5 mm。

参考文献

Foster, H., 1965. Geology of Ishigaki-shima, Ryûkyû-retto. prof Paper, U. S. Geol. Surv., 399－A：1－119.

Hanzawa, S., 1935. Topography and geology of Riukiu Islands. Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ., Ser 2, (Geol.) 17(5)：1－61.

長谷川善和・大塚裕之・野原朝秀，1973. 宮古島の古脊椎動物について，国立科博専報，(6)：39－52

小林桂助（1956）原色日本鳥類図鑑，保育社.

Matsumoto, H., 1926. On some new fossil cervicorns from Kazusa and Liukiu. Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ. Ser. 2, (Geol). 10, (2)：21－23.

中川久夫（1969）. 琉球列島における第四紀海水準変化，日本の第四系，p. 429－435

中村健児，上野俊一（1963）. 原色日本両生爬虫類図鑑，保育社.

大城逸朗，野原朝秀（1977）. 琉球列島における鹿化石産出地について，沖縄県立博物館紀要(3) 1－11.

Otsuka, Y., 1941. On the stratigraphic horizon of Elephas from Miyako Is., Ryukyu

Islands, Japan. Proc. Imp. Acad. Japan, 17, (2) : 43－47.
鹿間時夫（1937）. 化石象産地としての日本群島。科学，6p. 215－216.
――――（1943）. 哺乳動物より観たる東亜の洪積世に就いて(1)，満州帝国国立中央博物館論叢 6，p. 9－110.
鹿間時夫（1941）. Fossil deer in Japan. Jub. Comm. Prof. H. Yabe. 1125－1170.
――――（1950）. 本邦第四紀の編年について。地質学雑誌，56, p. 399－406
――――（1957）. 鮮新世・最新世の境界問題。地質学雑誌，63, p. 137－153
――――（1961）. 古脊椎動物の研究。化石，2，p. 25－43.
――――（1962）. 化石哺乳類等よりみた日本列島と大陸との陸地接続，第四紀研究, 2, p. 146
鹿間時夫・大塚裕之，1971. 東シナ海の陸橋（九州周辺海域の地質学的諸問題），日本地質学会，日本岩石鉱物鉱床学会，日本古生物学会，日本鉱山地質学会，日本鉱物学会連合学術大会シンポジウム資料（於九州大学）：131－139.
TEILHARD de CHARDIN, P. & TRASSAERT, M., 1973. The Pliocene Camelidae, Giraffidae and Cervidae of southeastern Shansi. Palaeont. Sinica, New Ser. C, (1) : 1－68.
TOKUNAGA, S., 1936. Fossil land mammals from the Riukiu Islands. Proc. Imp. Acad. Japan, 7(8) : 225－257.
TOKUNAGA S. & F. TAKAI, 1939. A study of *Metacervulus astylodon* (MATSUMOTO) from the Ryukyu Islands, Japan. Trans. Biogeogr. Soc. Japan, 3, (2) : 221－247.
内田照章（1963）. 琉球列島の哺乳動物相，とくに動物地理学的考察と鼡類の生態に関する2，3の知見。九州大学海外学術調査委員会学術報告，(1) 117－138.
YABE, H.（1929）. The Latest Land Connection of the Japanese Islands to the Asiatic Continent. Proc. Imp. Acad. Tokyo, 5－4, p. 167－169.

図　版　説　明

図版Ⅱ－1　石スク山遺跡の全景

石スク山遺跡および裂か堆積物分布域全景，右側小高い山の表土中に貝塚遺跡の散乱したものがみられる。手前の岩塊を山にしてある部分およびそのレベルの平担部は採石運搬車の道路である。上方にわずかに見える市街は石垣市内。番号はフィッシャーを示す（1～6），Cは洞くつ。

図版Ⅱ－2　第1図，（上図）フィッシャー1～4の配列状態

フィッシャー1からは化石らしきものが産出しなかった。うすい残留粘土層の残りが岩壁にへばりついた状態である。

フィッシャー2は約1mのポケット状フィッシャーである。中央がくぼみ，左右壁面が高い，鍋を重ねた状態の堆積を示している。

フィッシャー3はごくせまいわれ目の堆積を示す。

フィッシャー4はこの地域で最も大きいもので，その口は山の頂上から開いている。

第2図，(下図) フィッシャー4と下位の洞くつ堆積物の配列状態を示す。フィッシャー4は上から下にほとんど垂直に発達している。一方下位の横穴式洞くつは左側（海側）から右側（山側）方向に若干の傾斜をもって発達している。

図版Ⅱ－3　第2図，(左図) フィッシャー4と下位洞くつとの関係，フィッシャー4は2層に分けられる。上位層は石灰岩塊を多量に含んだ粘土層でやや黒色化している。下位層は化石を含んだ地層で黄褐色粘土層である。トラバーチン石灰岩の塊を若干含む，狭い割れ目を通じて下位の洞くつに連絡する。下位洞くつは礫層と植物性物質を多量に含んだ泥層の二層からなる。

図版Ⅱ－4　下位の洞くつ堆積物，第1図（上図，図版Ⅱ－2の2図（下図））における下位洞くつの左端の拡大，この部分では若干左側に堆積面が傾く。全体としては右方向に傾斜する。全層厚60cm，うち礫層部分は40cm 前後の厚さをもち，明らかに外来性の礫質よりなり，かつてこの洞くつ内を水が流れていたことを示している。

第2図（下図），第1図の左端をさらに拡大したものである。チャート，砂岩，千枚岩質の変成岩などの亜角礫よりなり，礫の大きさは拳大が多い。

礫層の最大厚で60cm，上位によるシルト質の部分は黒色を帯びている。植物破片を多量に含み葉が発達している。厚さ20～100cm崖の右端（山側）では除々に粘土質となる。分布の幅約15m。gr；礫層。

図版Ⅱ－5　第1図（右図），第2フィッシャーの堆積状態

上部の点在する白色の物は貝塚の貝層，かなり乱れている。下位の堆積物は黒味を帯びた褐色粘土層であるが，風雨に当り，かなり粘性を失なっている。中位にみられる白い物体はリュウキュウジカの脊椎骨である。同じ方向に並んでいることから同一個体のものといえる。堆積面は左右が高く，中央で低い，ゆっくり堆積したことが理解される。

第2図（左図），礫層と残留粘土層との関係

下部洞くつ堆積物の礫層上部には漸次褐色の残留粘土がのる。上部は狭いフィッシャーに連なる。右端の別のフィッシャーでは第4フィッシャー（図版Ⅱ－1，図版Ⅱ－3の第1図）に連絡する。gr；

層。R； 残留粘土層。

図版Ⅱ－6　図版Ⅱ－5の第1図の拡大

化石の産状を示す。大きな骨はリュウキュウジカの脊椎骨。小さい白点でみえるものは小動物，おもにネズミ類の化石，棒状のものは現生植物の根である。

図版Ⅱ－7　*Metacervulus astylodon*　(MATSUMOTO)，リュウキュウジカ

1　右下顎骨および臼歯列（PM－M_1），頬側面，最大長92.5mm，歯列長40mm。

2　左下顎骨および臼歯列（PM_3－M_1），頬側面，最大長67mm，歯列長31mm。

3.4　左下顎骨および臼歯列（M_2－M_3），3図，舌，側面，4図，頬側面。最大長72mm，歯列長32mm。

（計測値の単位mm。以下同じ）

5.6　右角，5図，前側面。6図，内側面。

7.8　左角，角の大部分を欠く，病的な変形による。

以上は昭和51年7月17日に県教委の知念勇氏，市教委の石堂徳一氏によって，第4フィッシャーから採集されたものである。大きさはほぼ実物大。

図版Ⅱ－8　*Metacervulus astylodon*　(MATSUMOTO)，リュウキュウジカ

1　右下第3前臼歯，頬側面。第2フィッシャー。長さ9.4，幅5.75，歯冠高頬12.75。

2　同上，舌側面。

3　右下第3前臼歯，頬側面。第2フィッシャー。長さ8.9，幅5.6，歯冠高頬10.75。

4　同上，舌側面。

5　左下第3前臼歯，頬側面。第2フィッシャー。長さ9.1，幅6.2，歯冠高頬7.65。

6　同上，前側面。

7　右下顎部分（第2前臼歯），舌側面。第2フィッシャー。長さ33.3。

8　同上，頬側面。

9　左下第4？切歯，咬合面。第2フィッシャー。歯根長9.5，歯冠長11.9。

10　同上，後側面。

11　右下第2？切歯，頬側面。第2フィッシャー。歯根長8.6，歯冠長9.7。

12　同上，背側面。

13　同上，舌側面。第2フィッシャー。歯根長8.7，歯冠長11.5。

14　右下第1切歯，前側面。第2フィッシャー。幅13.3，歯冠高頬12.3。

15　同上，背側面。

16　右下第1切歯，前側面。第2フィッシャー。歯根長13.5，幅11.8＋，歯冠長11.6

17　同上，背側面。

18　左下第1切歯，背側面。第2フィッシャー。歯根長14.5，幅7.7，歯冠長5.3。

19　同上，後側面。

20　同上，背側面。

21　左上犬歯，舌側面。第4フィッシャー。長さ25.1。幅7.9。

22　同上，頬側面。

23　左上犬歯，舌側面。第4フィッシャー。長さ22.7，幅8.1。

24　同上，頬側面。

25　左上第3前臼歯，咬合面。第4フィッシャー。長さ9.4。幅8.8，歯冠高頬 12。

26　同上，舌側面。

27　同上，頬側面。

28　同上，後側面。

29　右上第3前臼歯，咬合面。第4フィッシャー。長さ9.1，幅8.85，歯冠高頬 73。

30　同上，舌側面。

31　左上第3前臼歯，舌側面。第2フィッシャー。長さ8.8，幅10.5，歯冠高頬 14.2。

32　左上乳臼歯？，咬合面。第4フィッシャー。長さ13.5，幅11.3，歯冠高頬 12.6。

33　同上，舌側面。

34　同上，前側面。

35　左上第3後臼歯，後側面。第2フィッシャー。長さ13.8，幅12.8，歯冠高頬 20。

36　同上，舌側面。

37　左上第3後臼歯，咬合面。第4フィッシャー。長さ15.6，幅14.9，歯冠高頬 17.3。

38　同上，舌側面。

39　左上第2後臼歯，咬合面。第4フィッシャー。長さ12.2，幅13.3，歯冠高頬 8.4。

40　同上，舌側面。

41　左上第2後臼歯，咬合面。第4フィッシャー。長さ12.1，幅13.1，歯冠高頬 11.3。

42　同上，舌側面。

43　右上第1後臼歯，咬合面。第4フィッシャー。長さ12.7，幅11，歯冠高頬 11.3。

44　同上，前側面。

45　左下第3後臼歯，咬合面。第4フィッシャー。長さ14.7，幅8.1，歯冠高頬3.3。

46　同上，頬側面。

47　左下第3後臼歯，咬合面。第4フィッシャー。長さ20。幅9，歯冠高頬 9.8。

48　同上，舌側面。

49　同上，頬側面。

50　左上第2第3後臼歯，咬合面。第4フィッシャー。歯列長30.3，2M 14.1，3M 14.9。

51　同上，頬側面。

52　角，第5フィッシャー。

53　同上，長さ72.4，幅16.5。

図版Ⅱ－9　*Metacervulus astylodon*（MATSUMOTO），リュウキュウジカ

1　頚椎骨，背側面。第2フィッシャー。長さ47，幅39.4。

2　同上，後側面。高さ50.6。

3　軸椎骨，背側面。第4フィッシャー。長さ49，幅31。

4　同上，側面，高さ36.6。

5　左踵骨，内側面，第4フィッシャー。長さ52.6。

6　同上，前側面。幅 18.7。

7　同上，後側面。

8　左距骨外側面，第 4 フィッシャー。長さ 27.4。

9　同上，前側面。幅 20.8。

10　右第 4 中心足根骨，背側面。第 4 フィッシャー。長さ 26.7。

11　同上，腹側面。

12　左第 4 中心足根骨，背側面。第 4 フィッシャー。長さ 25.7。

13　左中足骨外側面。第 4 フィッシャー。長さ 71.8。

14　同上，前側面。幅 19.5。

15　右中手骨，後側面。第 4 フィッシャー。長さ 41.2，幅 21。

16　右中手骨，前側面。第 4 フィッシャー。長さ 51.5，幅 25.6。

17　左中足骨前側面。第 4 フィッシャー。長さ 52.7，幅 22。

18　右中手骨前側面。第 4 フィッシャー。長さ 53.9，幅 22.4。

19　左尺骨外側面。第 4 フィッシャー。長さ 53.8，幅 32.1。

20　趾骨（中節骨，末節骨）背側面。第 2 フィッシャー。

21　同上，背側面。

22　趾骨（末節骨）腹側面。第 2 フィッシャー。

23　同上，背側面。

図版Ⅱ－10

1　*Pteropus dasymallus yayeyamae?* KURODA，ヤエヤマオオコウモリ？左下顎骨上側面。第 4 フィッシャー。

2　同上，頬側面。

3　同上，舌側面。

4～6　同上，犬歯頬側面(4)，同舌側面(5)，咬合面(6)。

7～8　同上，尺骨内側(7)と外側(8)。

9　*Rattus rattus* クマネズミ。左下顎骨と臼歯（M_1～M_3），咬合面。第 2 フィッシャー。

10　同上，左下顎骨と臼歯（M_1～M_2），咬合面。第 2 フィッシャー。

11　同上，左下顎骨と臼歯（M_1～M_2），切歯を欠く。咬合面。第 2 フィッシャー。

12　同上，右下切歯，内側面。

13　同上，右上臼歯列（M ～M_3），咬合面。第 2 フィッシャー。

14　同上，左上臼歯列（M_2～M_3），咬合面。第 2 フィッシャー。

15　同上，左下顎骨頬側面，第 4 フィッシャー。

16　同上，右下顎首とM_2舌側面。第 4 フィッシャー。

17　同上，右下顎骨と歯列（M_1～M_3）頬側面。第 4 フィッシャー。

18　*Rhacophorus* gen. et. sp. indet，アオガエル科，右腸骨内側面。南地区 2 地点下方。最大長，6.5。

19　同上，外側面。

20　*Rana (R.) narina*,　ハナサキガエル，右腸骨内側面，南地区２地点下方。最大長，10.45。

21　同上，外側面。

22　*Rana (R.) nigromaculata*,　トノサマガエル，仙椎背側面．南地区２地点下方。最大長，5.3。

23　同上，腹側面。

24　同上，後側面。

25,26　*Rattus?*　尺骨，頬側面，外側面。第４フィッシャー。

27,28　*Rattus*,　右大腿骨，後側面と前側面。第４フィッシャー。

29　*Japarula palygonata*,　キノボリトカゲの大腿骨。

30　*Rana (R.)* cf. *tagoi*,　タコガエル，右上腕骨下半後側面，東地区４地点。最大長，6.25。

31　同上，前側面。

32　*Rana (R.) narina*,　ハナサキガエル，左上腕骨外側面，南地区２地点下方。25.0。

33　同上，前側面。

34　*Rana (R.) narina*,　ハナサキガエル，左上腕骨前側面，東地区４地点。最大長，22.65。

35　同上，内側面。

36　同上，後側面。

37,39　*Japarula palygonata*,　キノボリトカゲ，右下顎骨内側面，外側面。第２フィッシャー。

38,40　同上，左下顎骨内側面，外側面。第２フィッシャー。

41,42　同上，左上顎骨一部，外側面，内側面。

43　同上，右上顎骨一部，外側面。

44　*Gekko?* sp. indet。ヤモリ右下顎骨。第２フィッシャー。

45　*Rana (R.) narina*,，ハナサキガエル，左上腕骨前側面，南地区２地点下方。最大長，16.65。

46　同上，内側面。

47　*Rana (R.) okinavana*, リュウキュウアカガエル，左上腕骨前側面，第２フィッシャー。最大長，8.25。

48　*Clemmys mutica*,　ミナミイシガメの上腕骨？，側面。第２フィッシャー。

49～52　*Elaphe?*　脊椎骨，背側面，前側面，腹側面，後側面。第４フィッシャー。

53～56　*Elaphe?*　脊椎骨，背側面，前側面，腹側面，後側面。第４フィッシャー。

図版Ⅱ－11

1　Passeriformes. gen. et. sp. indet，スズメ目。歯骨背側面。第２フィッシャー，長さ11。

2　同上，腹側面。

3　Aves gen. et. sp. indet，頚椎骨背側面。長さ23.5。

4　同上，腹側面。

5　Aves gen. et. sp. indet，第９頚椎骨背側面。長さ15。

6　同上，腹側面。

7　*Hypsipetes Amaurotis*.　ヒヨドリ右烏口骨，前側面，第４フィッシャー。長さ25.7。

8　同上，後側面。

9　*Corvus corone*　ハシボソガラス。右烏口骨後側面。第４フィッシャー。長さ35.8。

10　同上，内側面。

11　Aves　gen. et. sp. indet，左烏口骨後側面。第2フィッシャー。長さ20.8。

12　同上，前側面。

13　Aves　gen. et. sp. indet，左烏口骨後側面。第4フィッシャー。長さ20.8。

14　*Sturunus*　sp. indet，左肩甲骨内側面。第2フィッシャー。長さ20.5。

15　同上，外側面。

16　Aves　gen. et. sp. indet，右上腕骨，外側面。長さ24.4。

17　同上，内側面。

18　Aves　gen. et. sp. indet，右上腕骨，外側面。第4フィッシャー。長さ23.9。

19　同上，内側面。

20　Aves　gen. et. sp. indet，左上腕骨内側面。

21　同上，内側面。

22　Aves　gen. et. sp. indet，橈骨外側面。長さ8.2。

23　同上，内側面。

24　Aves　gen. et. sp. indet，右尺骨前側面。

25　*Corvus　macrorhynchos,*　ハシブトガラス左中手骨後側面。第4フィッシャー。長さ51。

26　Aves　gen. et. sp. indet，左中手骨後側面，第2フィッシャー。長さ24.6。

27　同上，前側面。

28　Aves　gen. et. sp. indet，右中手骨後側面。第4フィッシャー。長さ19.5。

29　*Corvus　macrorhynchos,*　右大腿骨前側面。長さ24.9。

30　同上，後側面。

31　Aves　gen. et. sp. indet，左大腿骨後側面。第2フィッシャー。長さ15.3。

32　同上，前側面。

33　Aves　gen. et. sp. indet，趾骨背側面。第4フィッシャー。長さ11.9。

34　同上，腹側面。

35　Aves　gen. et. sp. indet，趾骨外側面。第4フィッシャー。長さ14.6。

36　同上，背側面。

37　Aves　gen. et. sp. indet，趾骨背側面。第4フィッシャー。長さ11.2。

38　同上，腹側面。

39　Falconiformes, gen. et. sp. indet. 中形のタカ，趾骨外側面。第4フィッシャー。長さ17。

40　同上，内側面。

41　*Corvus　macrorhynchos*，ハシブトガラス，趾骨内側面。第4フィッシャー。長さ9.4。

42　同上，外側面。

43　Aves　gen. et. sp. indet，趾骨内側面。第2フィッシャー。長さ9.8。

44　同上，外側面。

図版Ⅱ－12（白保採集）

Metacervulus　astylodon　(MATSUMOTO)　リュウキュウジカ

1　左角，内側面。白色部分はトラバーチンの被覆している所。落ち角ではない。

2　同上，外側面。

3　同上，後側面。

4　左角の落ち角，外側面。第1枝ほとんど生長せずわずかな隆起がみられる。角幹断面比較的丸い。

5　同上，前側面。

6　同上，内側面。

7　同上，角座下面，上方が前位となる。

8　右角の落ち角，内側面。骨幹部先端を欠く。

9　同上，外側面。

10　同上，前方より。

11　同上，角座下方における形態。

12　比較的保存がよく，第2分岐枝の根元まで残る。落角であるが良好である。

13　同上，前方より。

14　同上，内側面。

（倍率はほぼ原寸大）

図版Ⅱ－13（白保採集）

Metacervulus astylodon（MAT.）

1～5，カンドウ原，トレンチ4，3区，№6の第2層黒色砂層より出土。貝塚期の獣骨と一緒に出た。

1　左中手骨，近心関節面，左右幅24.4，前後長15.85。

2　同上，前側面。最大長49.4。

3　同上，外側面。

4　同上，後側面。

5　同上，内側面。

6　左中手骨，近心関節面，左右幅21.05。前後長14.05。

7　同上，遠心関節面，左右幅23.65。前後長11.7。

8　同上，前側面，最大長89.8。

9　同上，内側面。

10　同上，後側面。

11　右尺骨内側面，最大長55.85。前後長27.35。

12　同上，前側面，左右幅13.65。

13　同上，外側面。

14　左撓骨，前側面，左右幅27.2。

15　同上，内側面，前後長16.0。

16　同上，後側面，最大長18.15。

17　左中足骨後側面，最大長85.05。

18　同上，外側面。

19 同上，前側面。

20 同上，遠心関節面，左右幅 24.2。前後長 12.45。

図版Ⅱ－14（白保採集）

Metacervulus astylodon（MAT.）

1 趾骨（中節骨）後側面，長さ 20.5。

2 同上，内側面。

3 同上，前側面。

4 趾骨（中節骨）前側面。

5 趾骨（中節骨）遠心関節面。

6 同上，近心関節面。

7 趾骨（基節骨）後側面，長さ 26.6。

8 同上，内側面。

9 同上，前側面。

10 趾骨（基節骨）前側面。

11 趾骨（基節骨）遠心関節面。

12 同上，近心関節面。

13 趾骨（基節骨，中節骨）関節外側面。

14 左下顎（第1臼歯，第2臼歯）咬合面。

15 同上，舌側面，歯列長 26.3。

16 同上，頬側面。

17 左踵骨前側面，長さ 52.9。

18 同上外側面。

19 同上内側面。

20 腰椎骨背側面，長さ，37.3。

21 同上，側面。

22 同上，後側面。

23 同上，前側面。

24 頚椎骨後側面，長さ 32.3。

25 同上，前側面。

26 同上，腹側面。

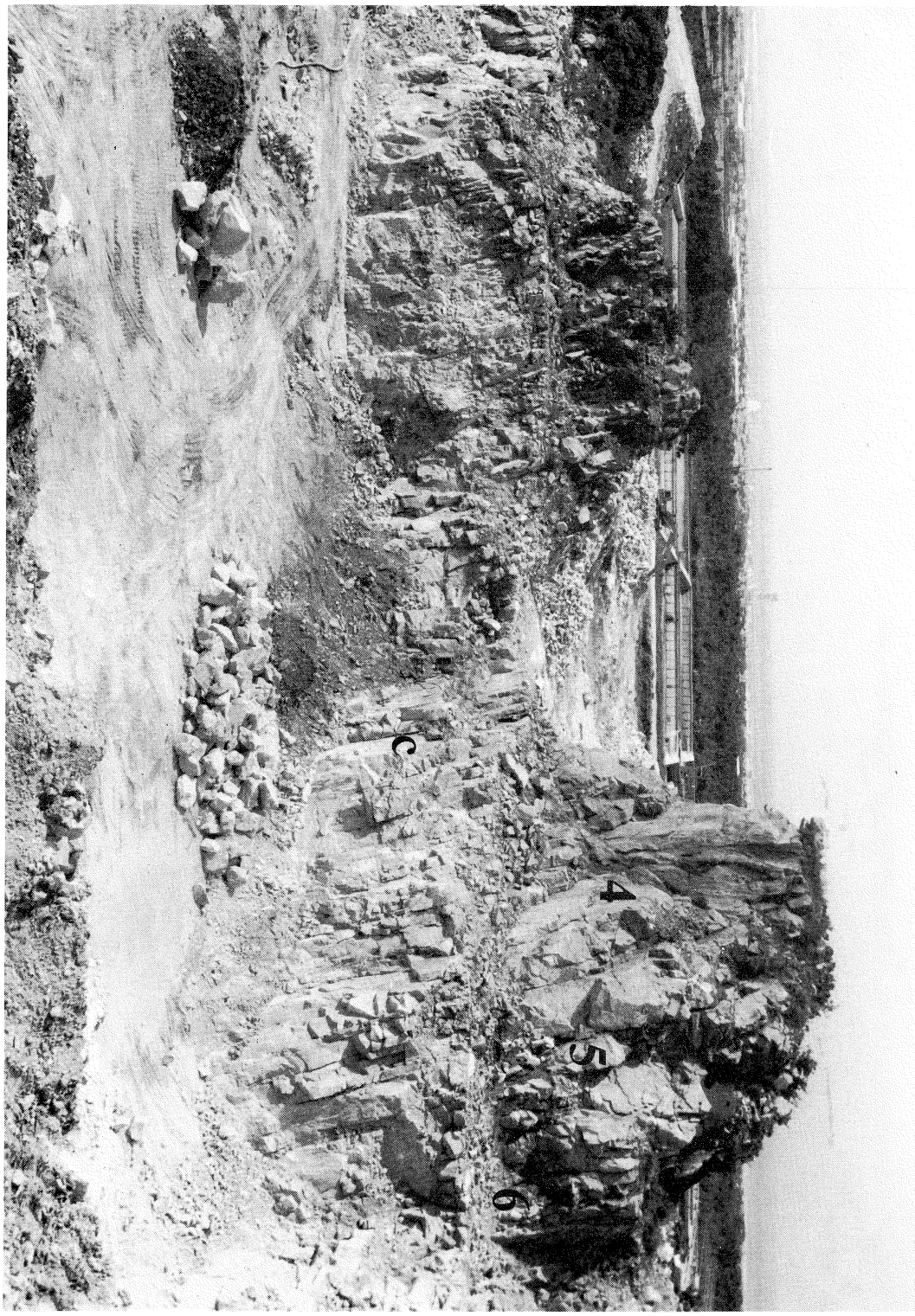
27 同上，背側面。

28 同上，側面。

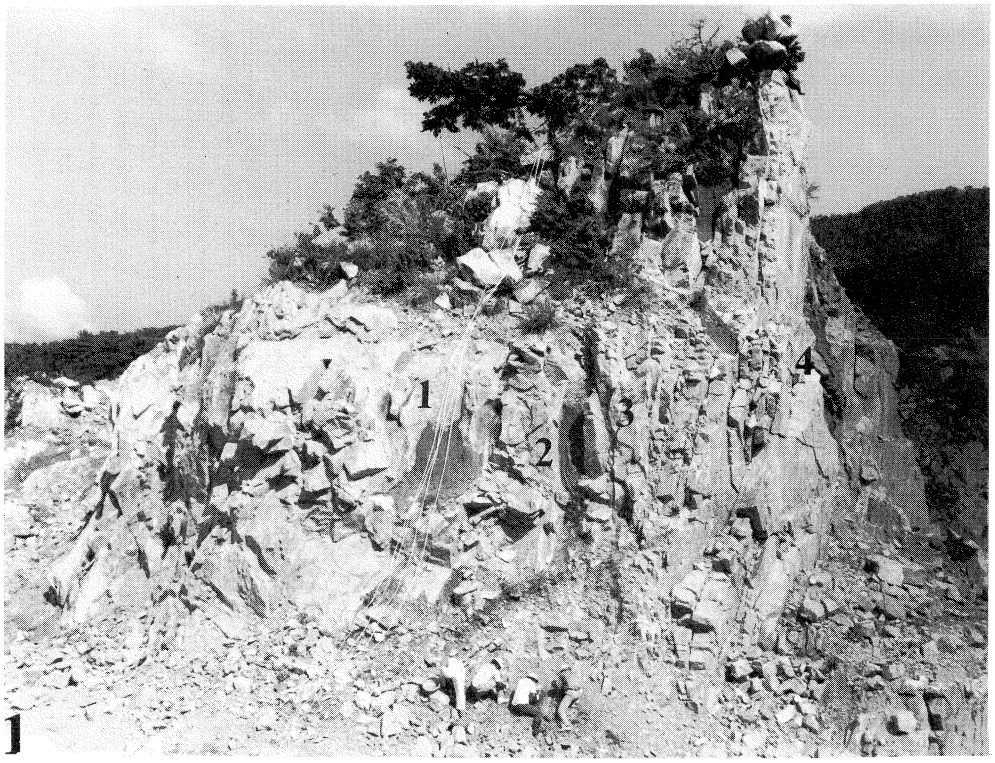
29 ミナミイシガメ左上腕骨，前側面，長さ 18.8

30 同上，内側面

図版II－1



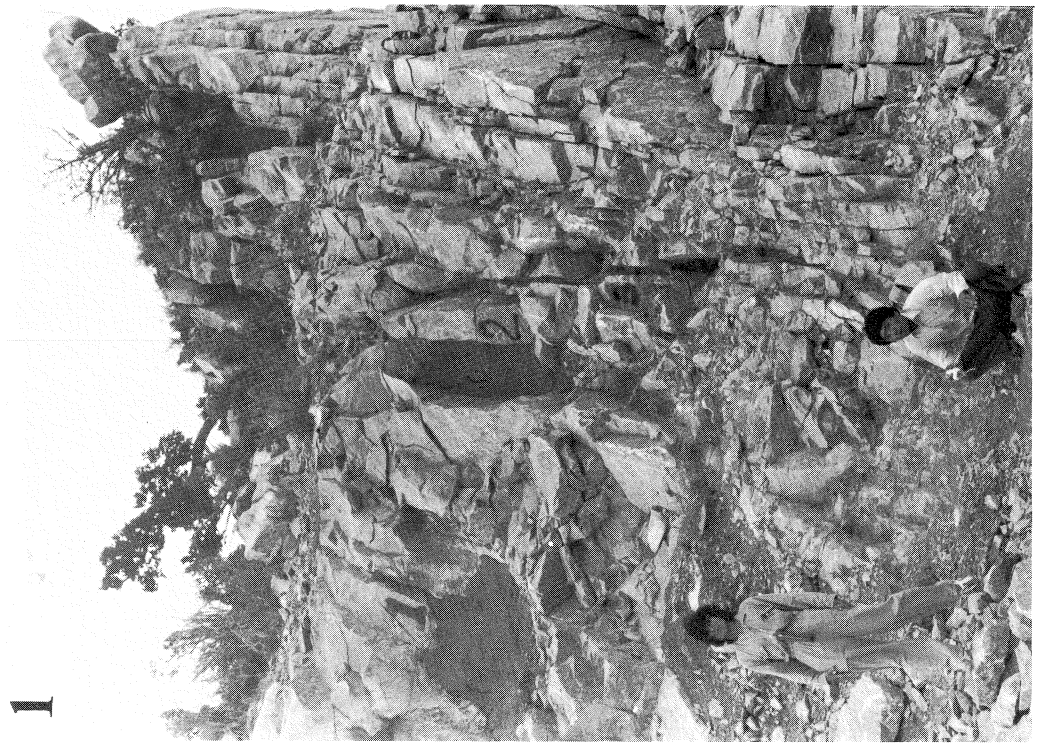
図版Ⅱ－2



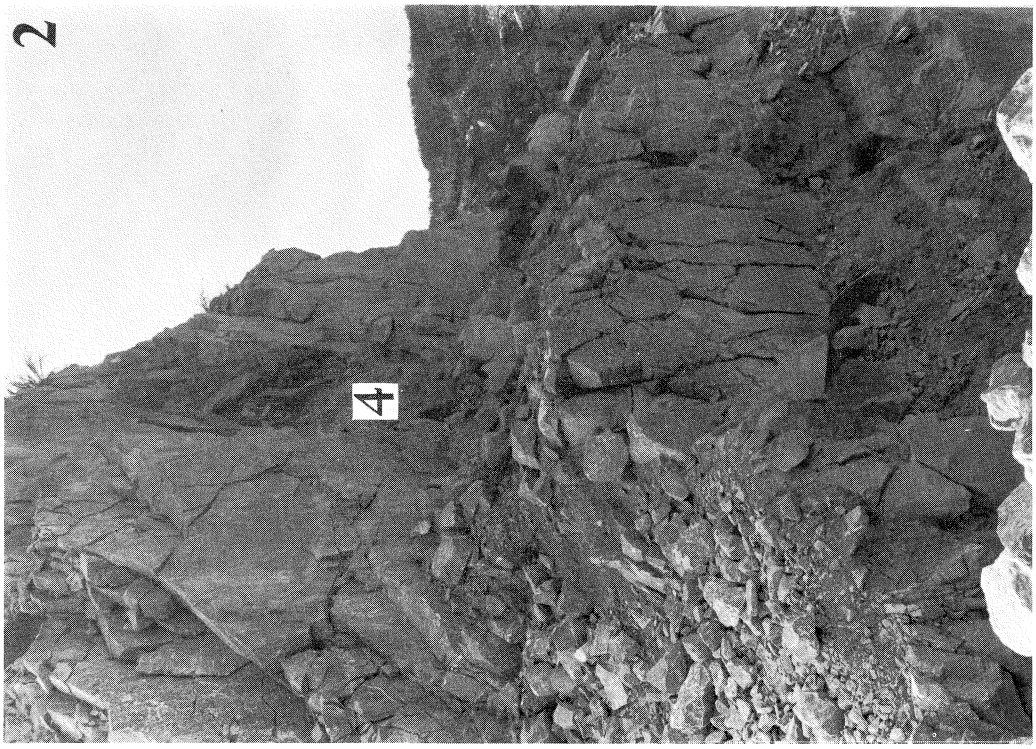
1

2

図版Ⅱ－3

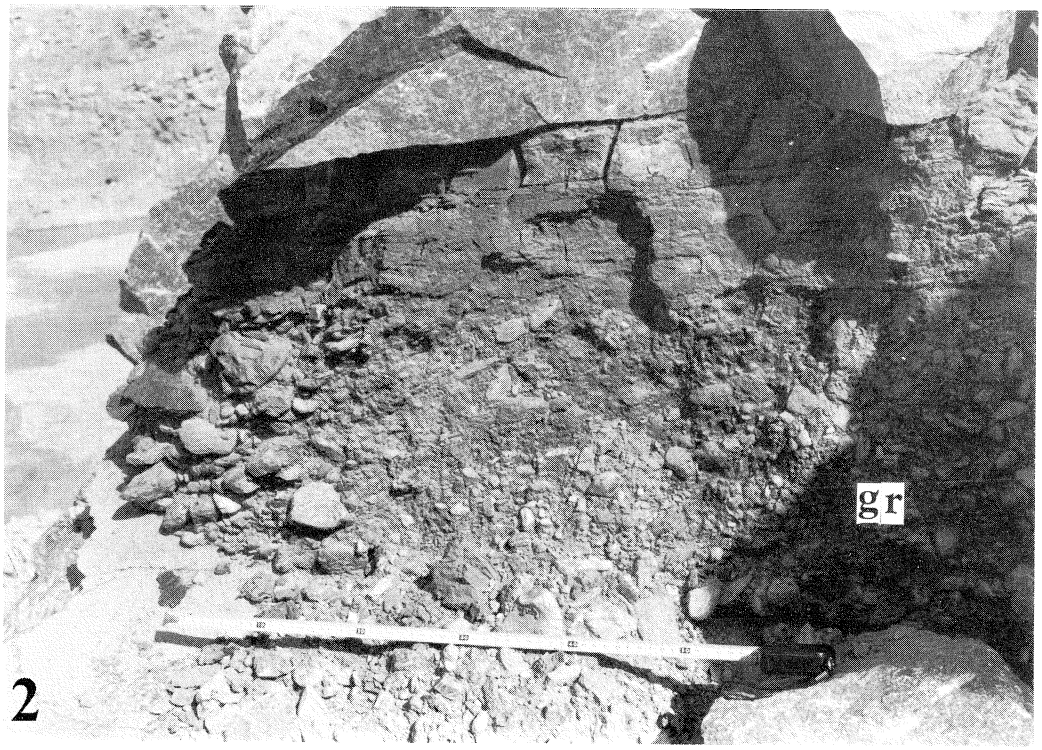


1

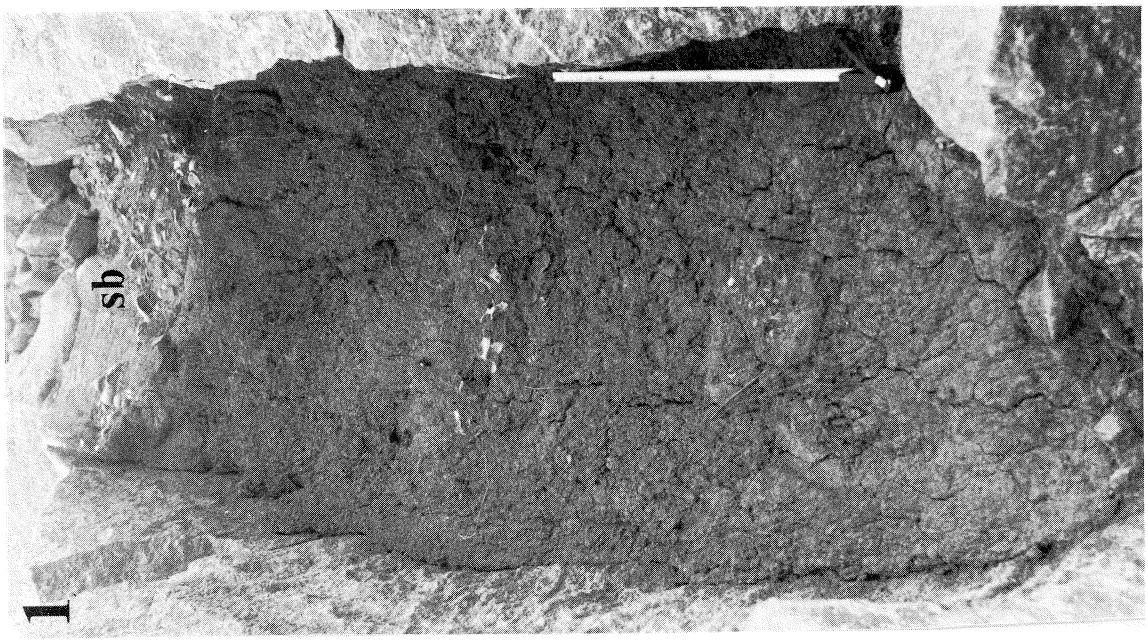


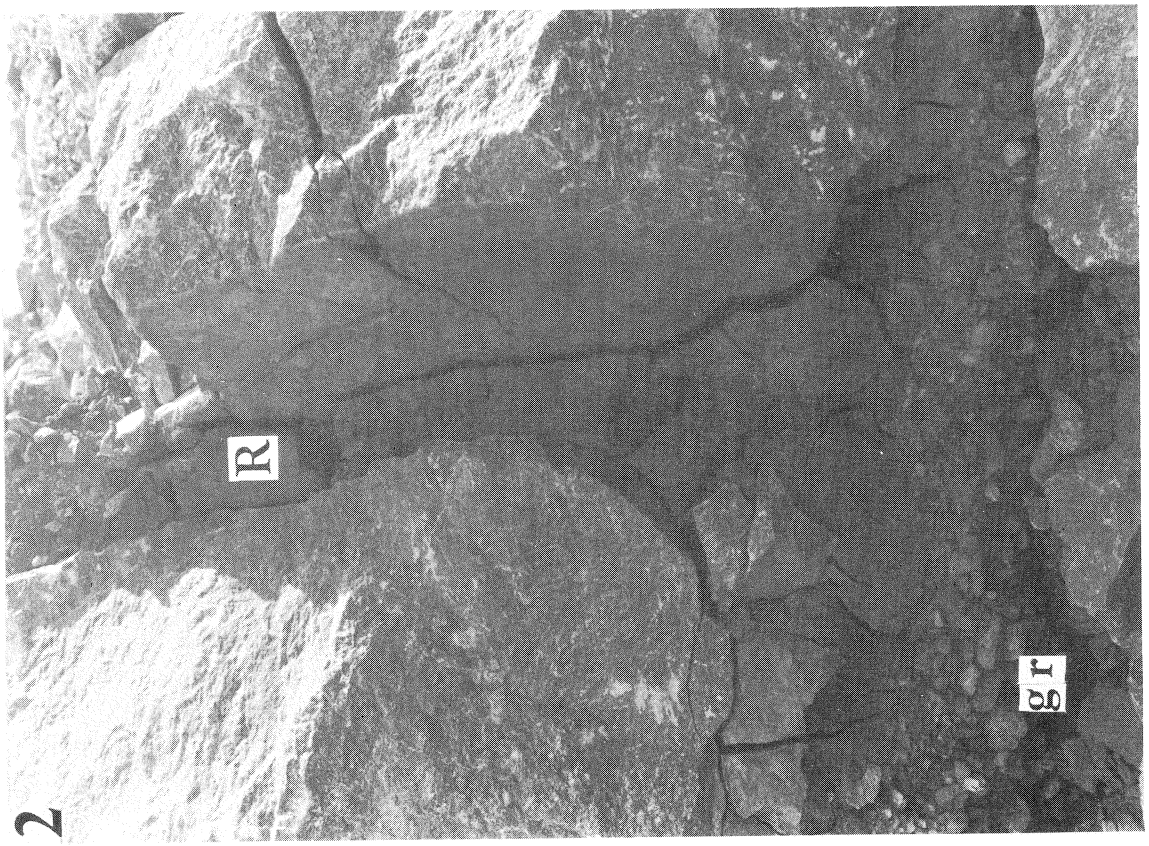
2

図版Ⅱ－4



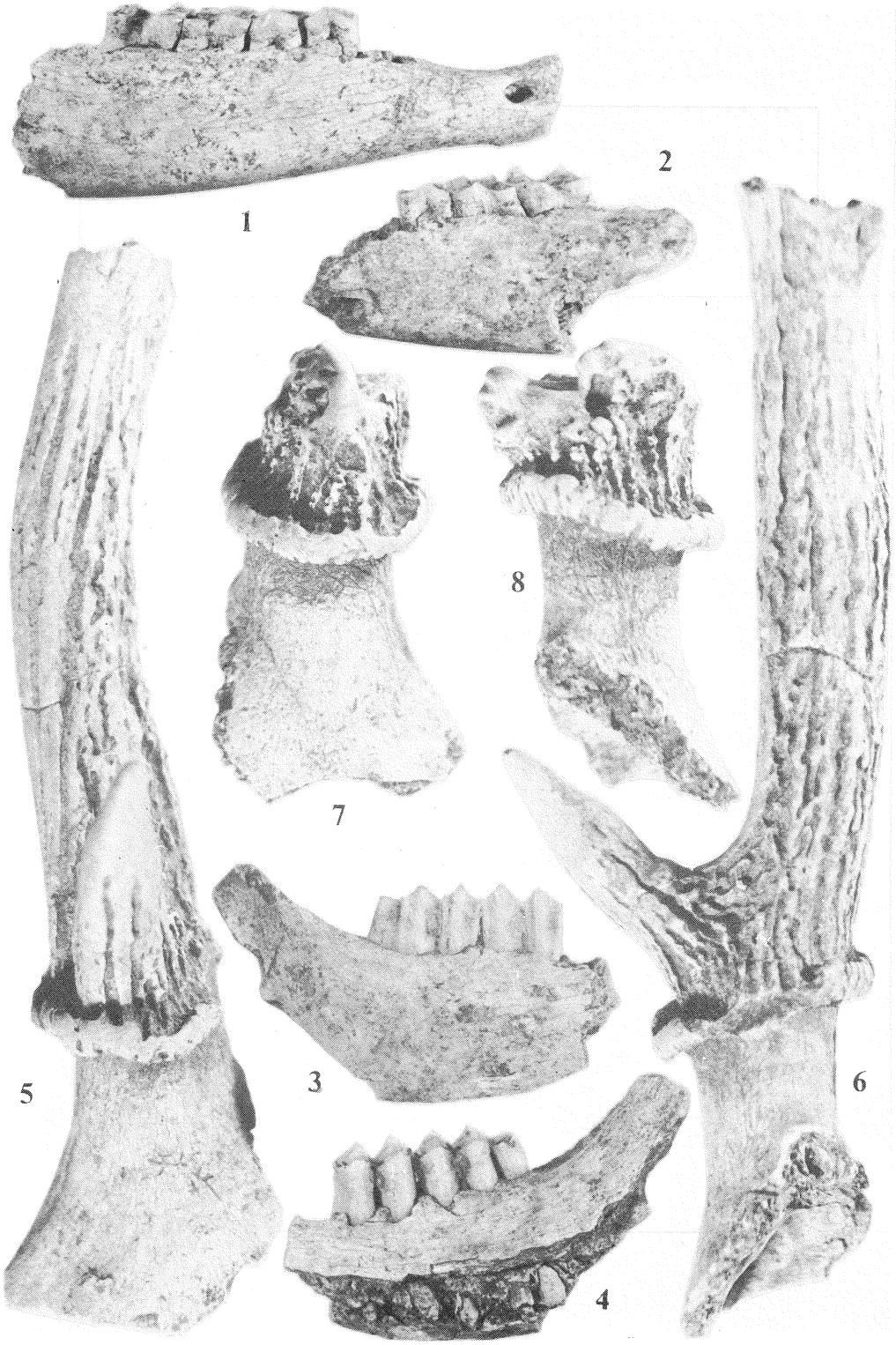
図版Ⅱ－5



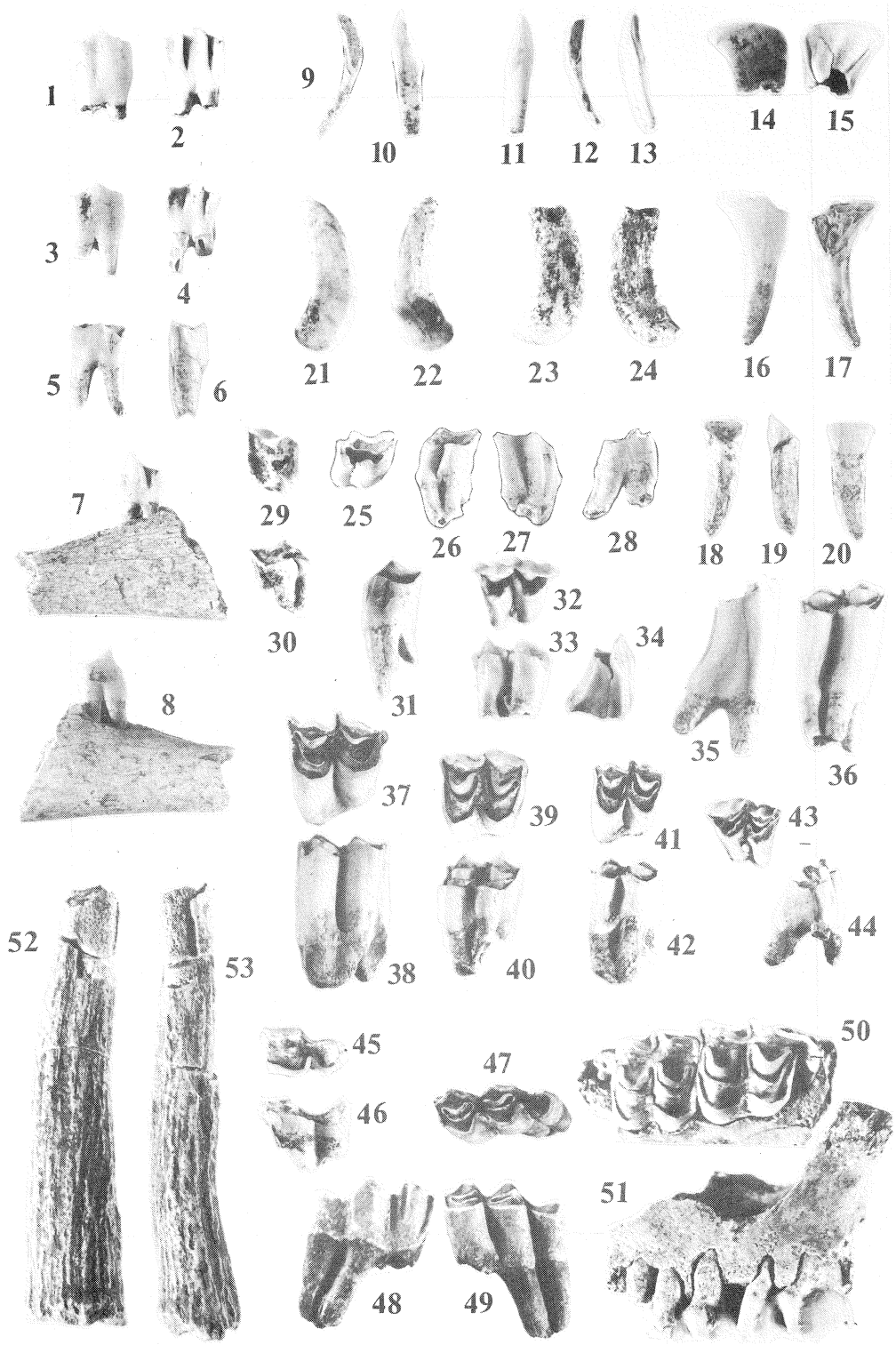


図版Ⅱ－6

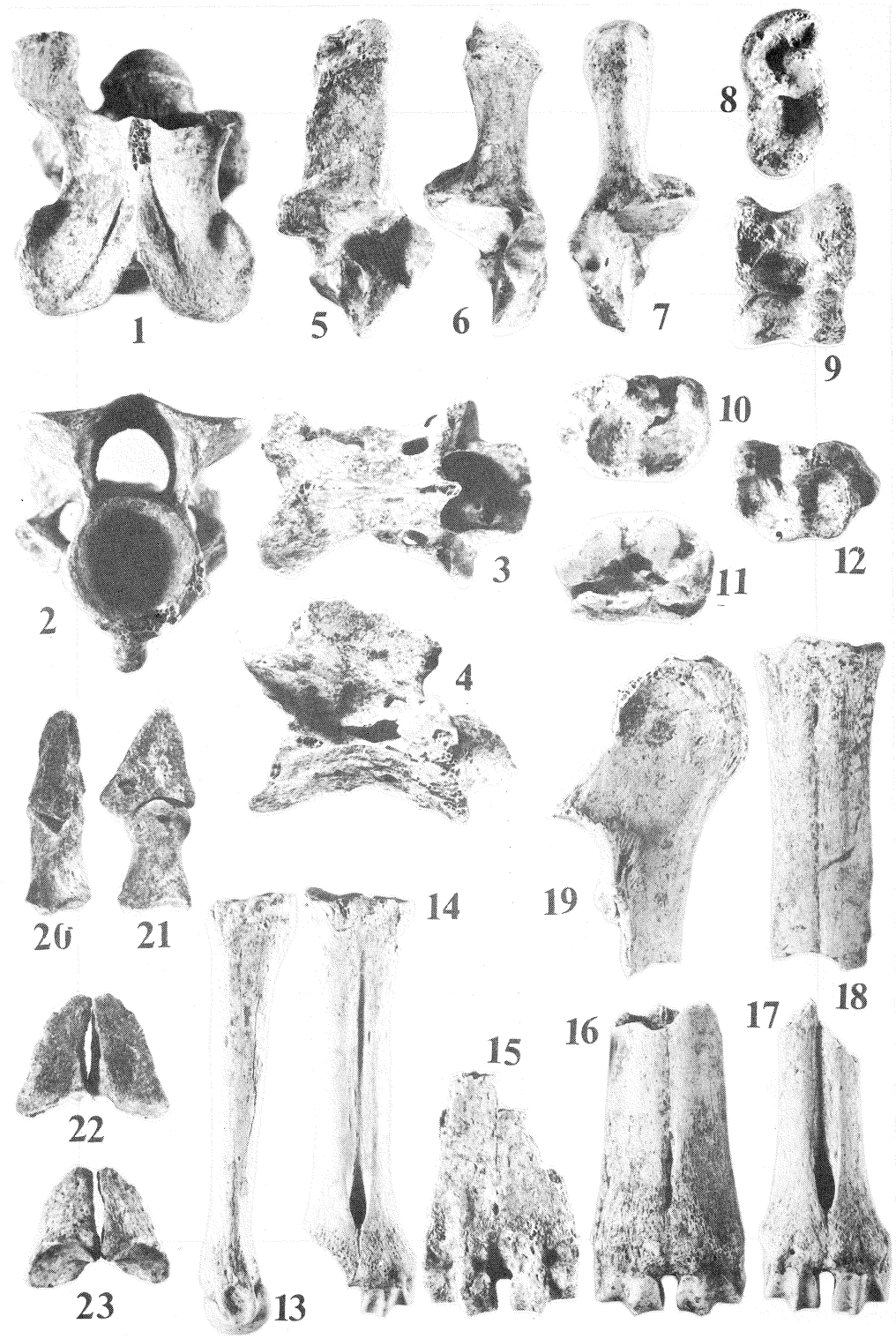
図版Ⅱ－7



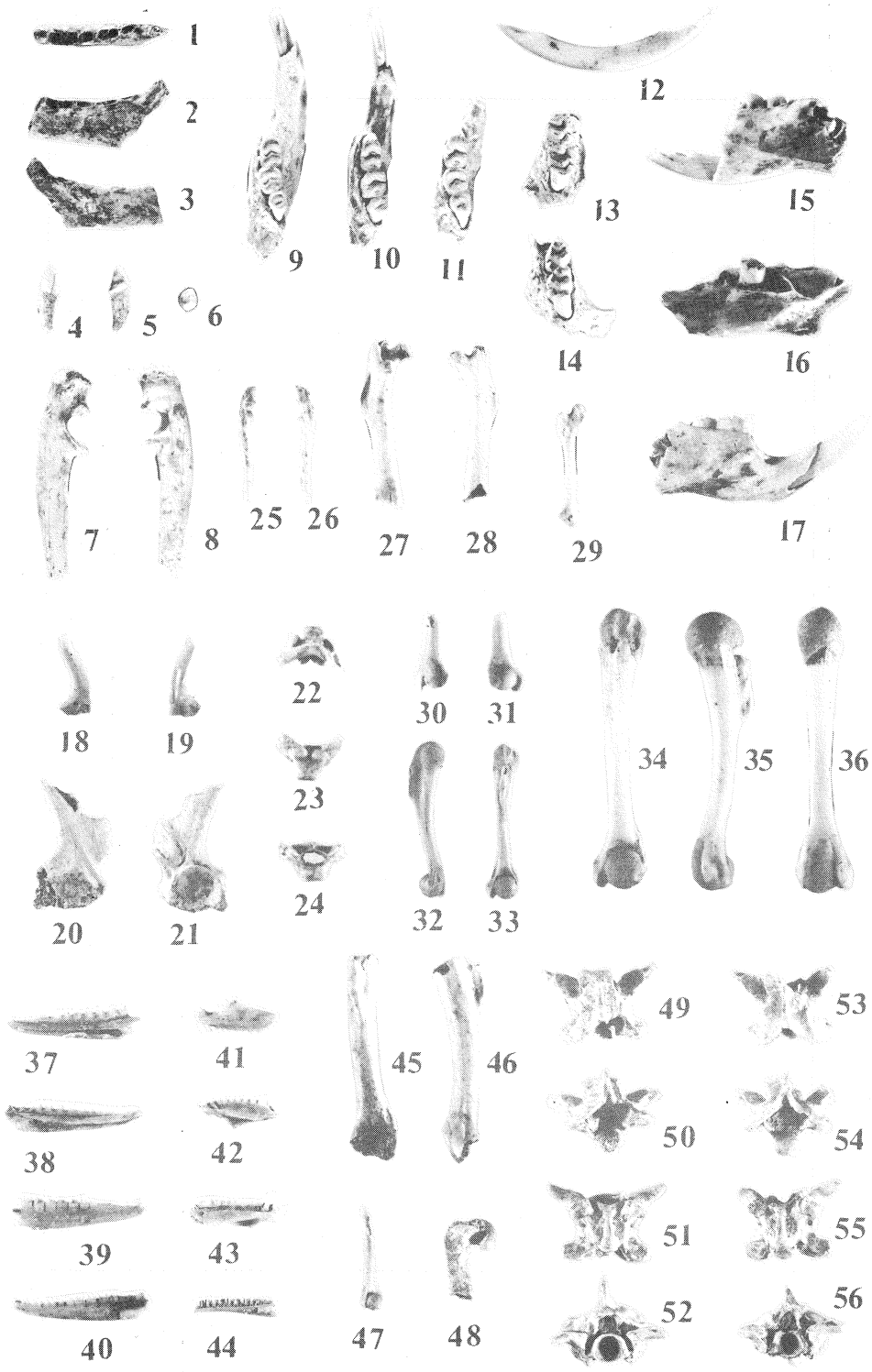
図版Ⅱ－8


1
2
9
10
11
12
13
14
15
3
4
21
22
23
24
16
17
5
6
7
29
25
26
27
28
18
19
20
30
31
32
33
34
35
36
8
37
39
41
43
38
40
42
44
52
53
45
46
47
50
51
48
49

図版Ⅱ－9



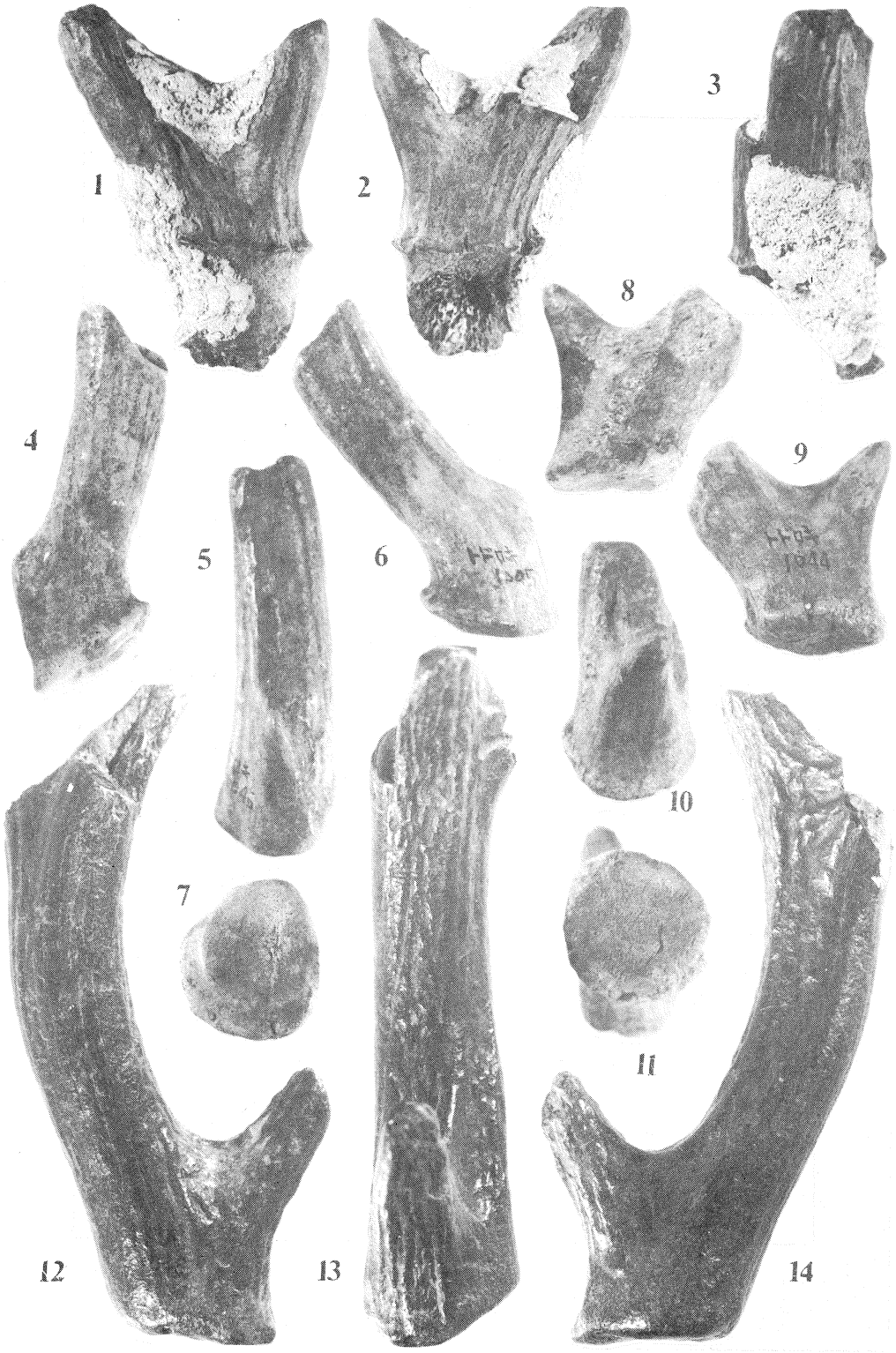
図版Ⅱ－10


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56

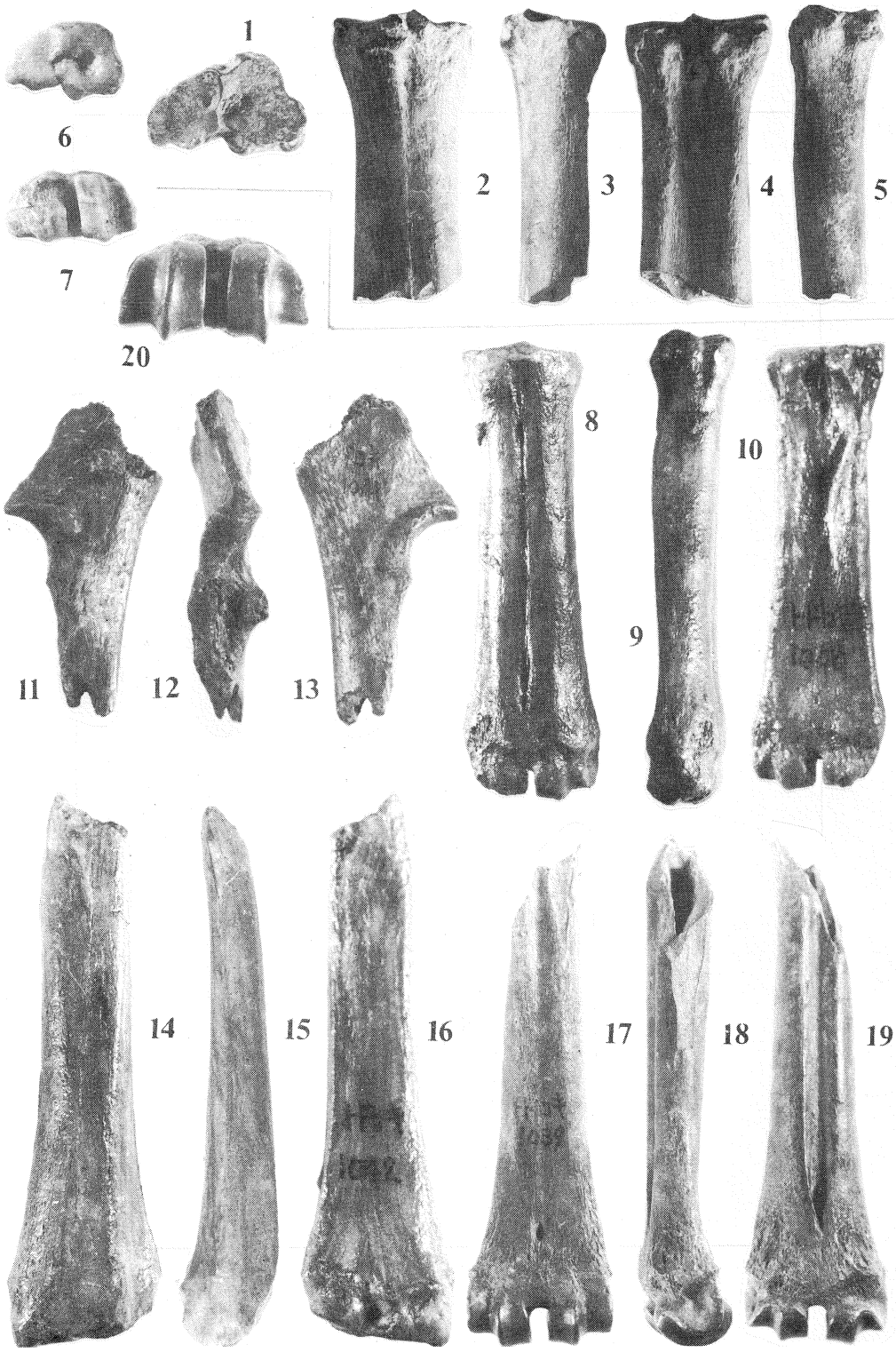
図版Ⅱ－11

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

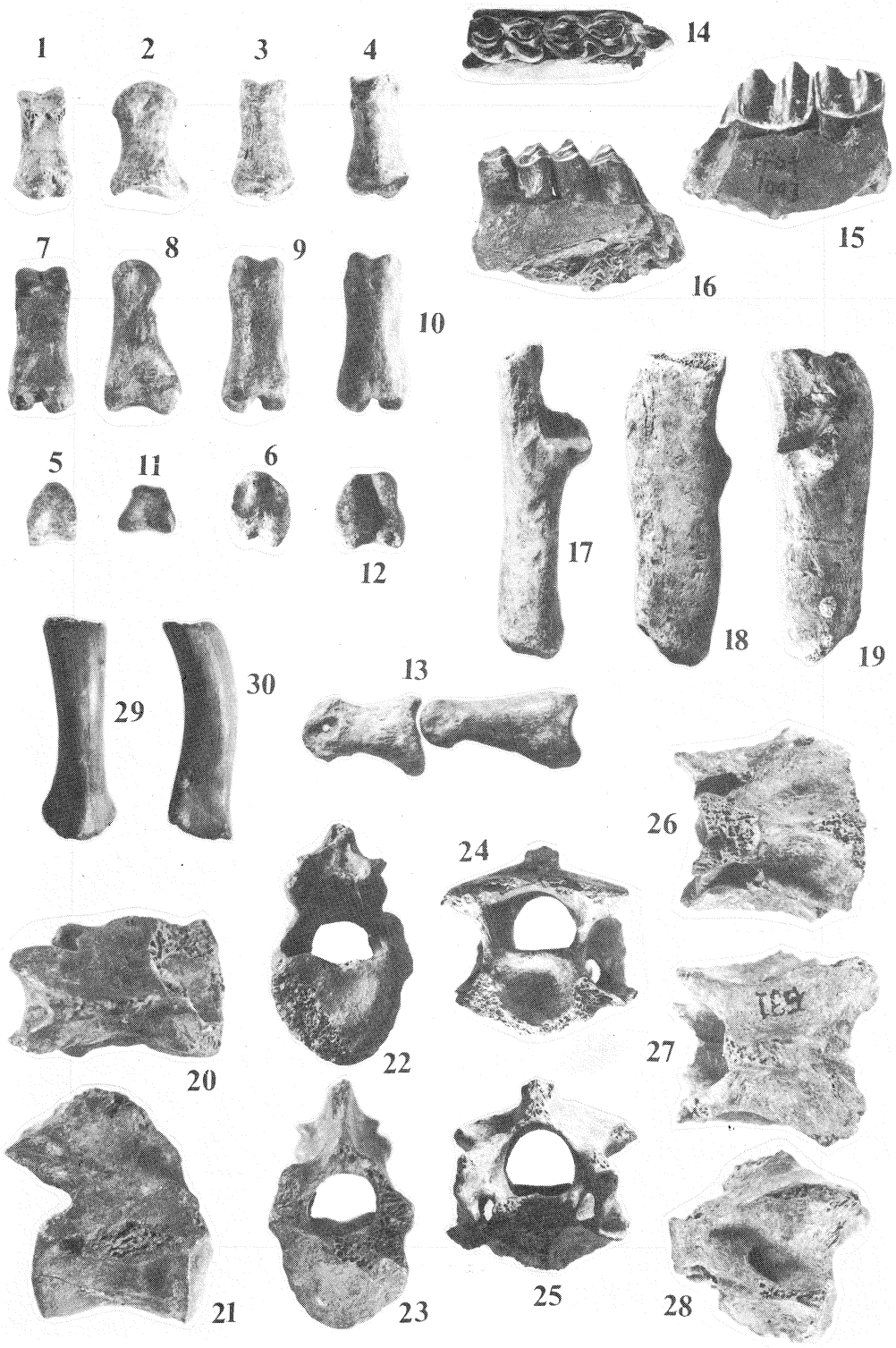
図版Ⅱ－12（白保採集）



図版Ⅱ－13（白保採集）



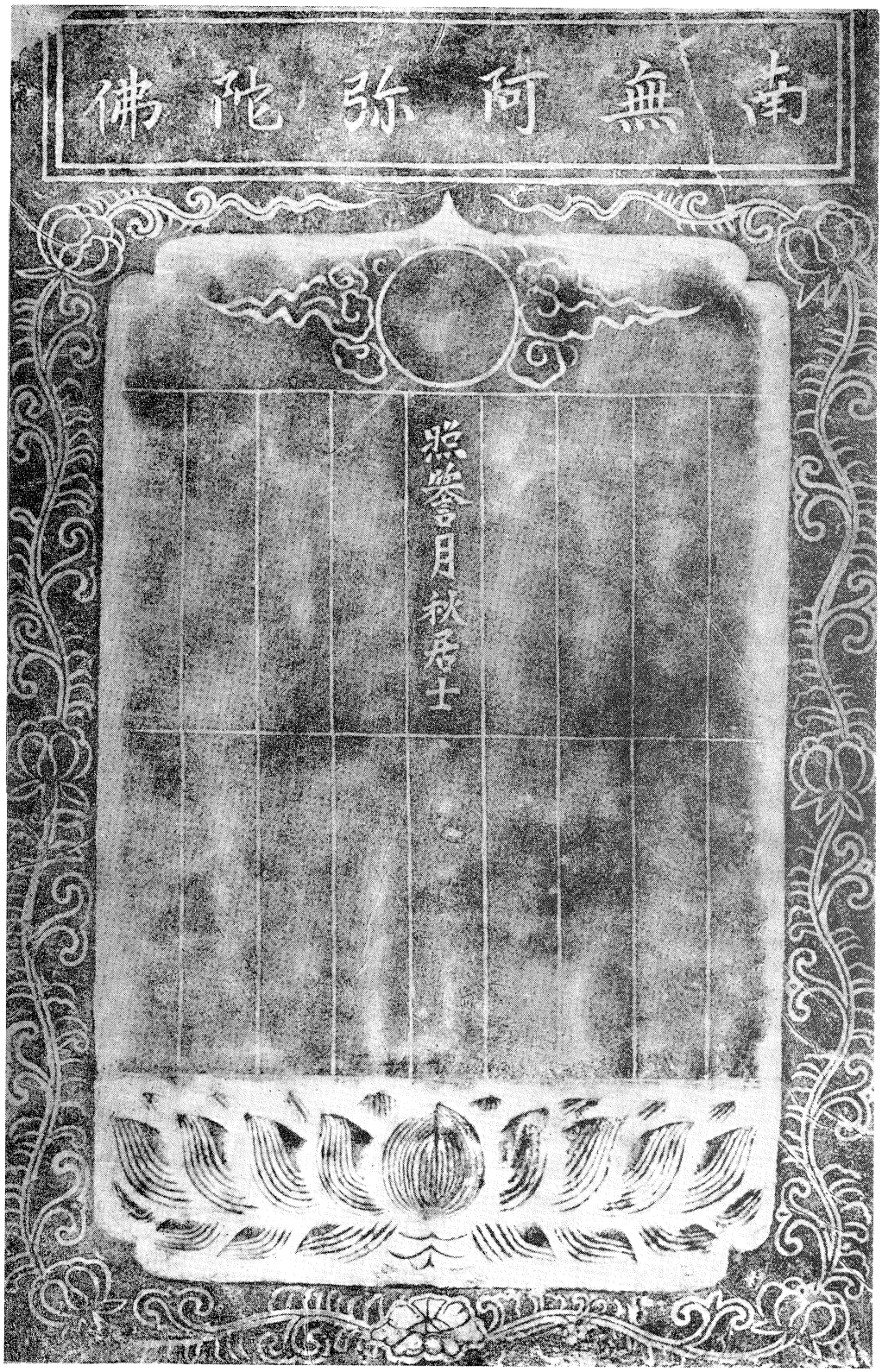
図版Ⅱ－14（白保採集）


1
2
3
4
14
15
16
7
8
9
10
5
11
6
12
17
18
19
29
30
13
26
24
20
22
27
21
23
25
28

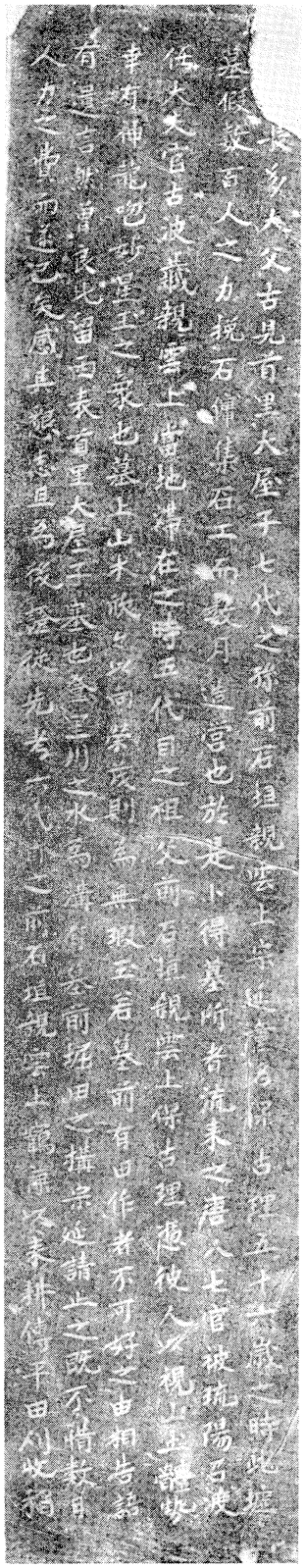
この項は著者の承諾を得て，「九州歴史資料館研究論集２」（1976）所収の同名論文を転載したものである。

Ⅵ 八重山の名号碑石

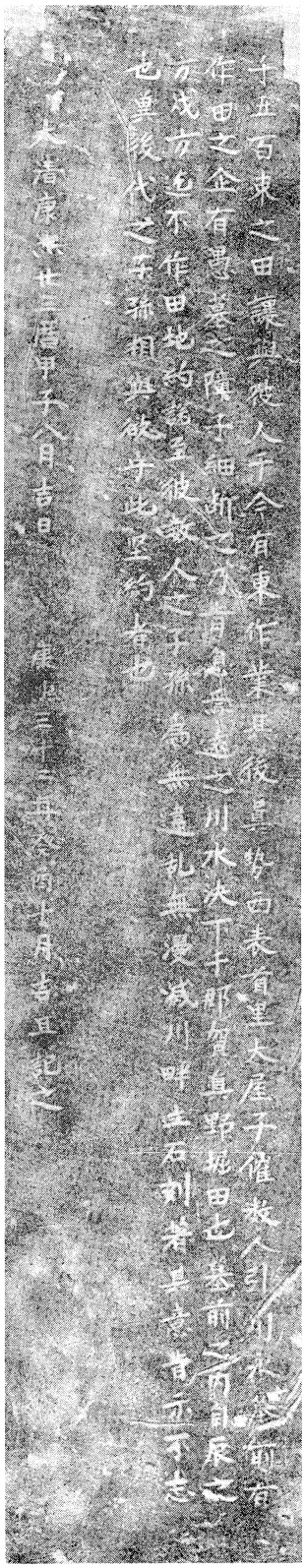
鏡　山　　猛



第 1 図　墓碑の正面（拓本）

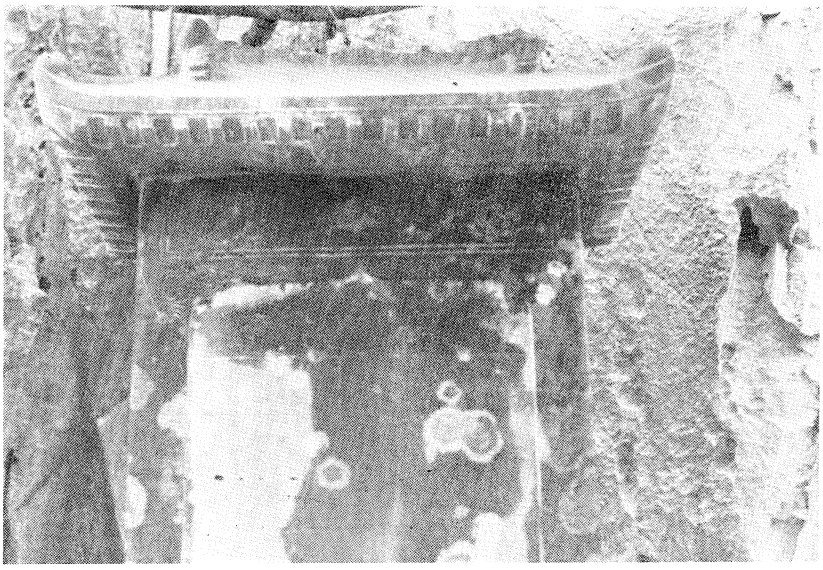


1

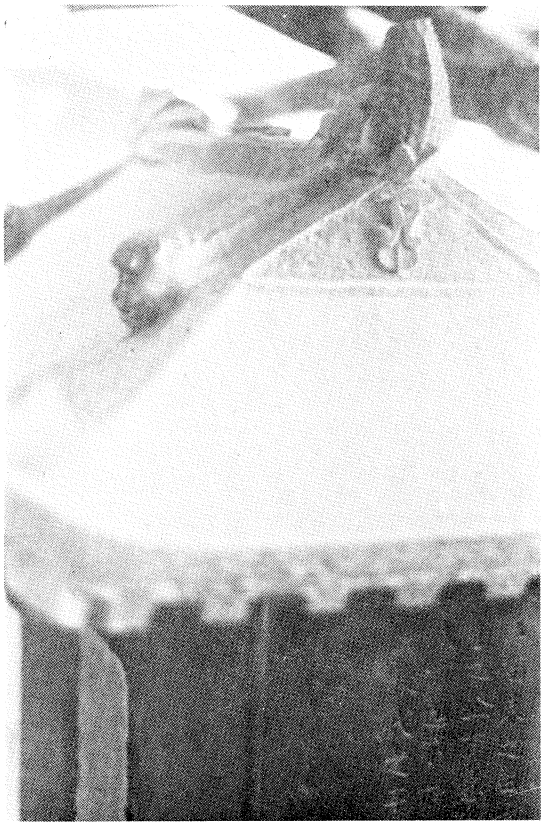


2

1 向て右側面　2 向て左側面　　第2図　墓碑の側面の記文(拓本)



1



2

1　墓碑正面上半部

2　墓碑の屋蓋部

第３図　　墓碑の部分写真

側 面 碑 文

元祖長多大父，古見首里大屋子七代之孫，前石垣親雲上宗延，童名保古理，五十六歳之時，此墟墓，假数百人之力，挽石，傭集石工，而数月造営也，於是卜得墓所者，流来之唐人七官被琉陽召渡任大夫，古波蔵親雲上當地滞在之時，五代目之祖父前石垣親雲上保古理，憑彼人以視山土體勢，幸有神龍咆妙星玉之象也，墓上山木欣々以向榮茂，則為無瑕玉，若有墓前有田作者，不可好之由，相告語有遺言，然曽良比留西表首里大屋子塞也答里川之水為溝，有墓前堀田之構，宗延請止之，既不惜数日，人力之費而遂已矣，感其懇志，且為後證，従先考六代目之前石垣親雲上鶴兼以来，耕伝平田刈収稲，千五百束之田，譲與彼人，于今有東作業，其後真勢西表首里大屋子，催数人引用水墓前，有作田之企，有愚墓之障子細断之，乃肯息焉，遠之川水決下于那賀真野堀田也，墓前之内自辰之，方戌方迄不作田地，約諾至彼数人之子孫，為無違乱，無漫滅，川畔立石刻著其意告示不忘也，

後代之子孫相與欲守此堅約者也，

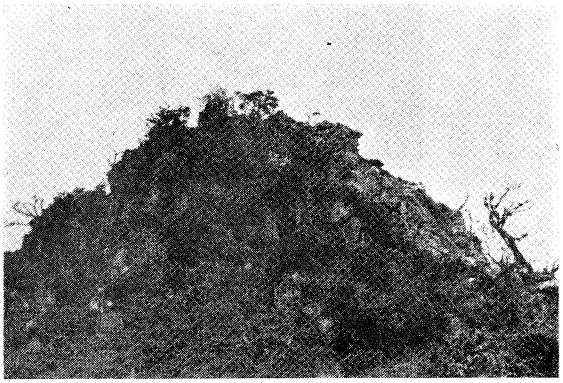
大清康熙廿三暦甲子八月吉日　　康熙三十二年癸酉十月吉日記之

八重山の名号碑石

まえがき

昭和46年8月，沖縄の復帰前に八重山を訪ねた筆者は，彼の地の歴史や文化財の研究家宮良賢貞氏を訪れた。氏は石垣の街の北にある石城(いしすく)山の中腹にあった一つの岩洞のなかに，床に灰を敷いた所があり，側の人骨らしいものを採集したと語られ，骨は桃林寺に預けてあるともらされた。私は早速石城山に出かけたが，数年前から採石場となり，すでに山の半ばは失われていた。石城山はその名のように石灰岩の岩肌を露わしていたが，山の側面には幾つかの岩窟があり，沖縄県文化課の知念勇氏などの教示によると，洞穴の幾つかは遺跡地として知られていたようである。宮良氏の話の洞穴がどれであるかは知ることが出来なかったが，この石山は洞穴住居に適した所とみうけられた。当の宮良氏は今は故人となられ，骨の所在も桃林寺で行先不明になり，手がかりは失われてしまった。

その翌年ここに赴いた時，山の南すそに一墓の墓碑があり，正面の題記に「南無阿弥陀仏」の6字名号を刻してあるので，自分勝手に名号碑石と呼ぶことにした。建碑年号は清の康熙の文字があるので，さほど古いものではないが碑名の側面（両面）記載内容に金石文としての価値を認め，更に入母屋の屋根形の笠石といい，全体の姿が筑前宗像大社の国宝に指定されている阿弥陀経石に似ていることにも興味をそそられた。その時は拓本の用意もなかったので，応急の墨やタンポをつくり資料として持ち帰った。



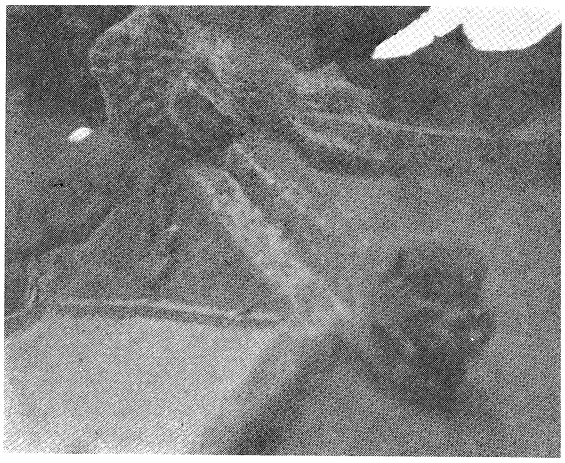
第1図　石城山全景
（昭和47年夏撮影）

昭和50年11月，3年ぶりに石垣市に渡る機会があったので，拓本用具を携行して現地を訪れたところ，名号碑は基石が残っているのみで姿を消していた。しかも石城山の大半はすでになく，地下採石が露天掘りの状態ですすめられていた。間もなく私は復帰記念に開設された石垣市立八重山博物館を訪ねて，最近博物館の玄関脇に運び移された碑石に再会した。ここで館長玻名城泰雄氏の好意により，改めて拓本をとり，また参考資料を見せて頂いた。この遺跡の重要性からみて，湮滅の災にあわないように，その大要をここに紹介し，碑石の系譜に一考を加え，将来現地墓域の復原と保存に役立てていただきたいと念願して止まない。

1　碑石の構成と記文

石城山の名号碑石は，屋蓋と碑身と台石の三つに分けて記述しよう。屋蓋は入母屋造り，大棟両端に大吻（鴟尾）があり，中央に火焔または塔形（基部のみ，僅か残存で全形不明）がある。下(くだ)り棟(むね)端に鬼面瓦，4隅軒先に獣頭様飾りがある。山花（破風）には，花形の懸魚（花板）が刻されている。碑身の高さ95糎，幅62糎，厚さ20糎。台石は現地に残され，巨石で（2.3

米×1.7米×0.8米）で，この下に棺が安置されているといわれるが，詳細は不明である。碑石の用材は硬い砂岩質のようであるが，専門家の鑑定を経たわけではない。この墓碑の周りは，現在狭い石垣が残っているだけで，碑石背面は石城山の母岩がそそり立っている。字名（あざな）は石垣市字バンナである。碑身正面の題記は「南無阿弥陀仏」の名号で，蓮座に乗った位牌形の罫線（2段9行）があり，上段に「前石垣親雲上長多」の法名「照譽月秋居士」があり，周りには蔓草様の文様をめぐらす。記文は碑石の両側面にあり，拓本に図示（第2図）の通りであるが，いま私なりのよみ下し文に改め，最後に裏面の記文をあげておこう。



第2図　屋蓋の大吻と鬼面

「元祖，長多大父ハ古見首里大屋子七代ノ孫ナリ。前石垣親雲上宗延，童名保古理，五十六歳ノ時，此の墓ヲツクル。数百人ノ力ヲ假リテ，石ヲ挽キ，石工ヲ傭イ集メテ，数月ニワタリ造營スル也。是ニ於テ墓所ヲトヒ得タルハ，流来ノ唐人ナリ。七官琉陽ニ召シ渡サレ，大夫ノ官ニ任ゼラレシ古波蔵親雲上，当地滞在ノ時，五代目ノ祖父，前石垣親雲上保古理彼ノ人ニ憑リテ以テ山土ノ體勢ヲ視ル。幸ニ龍神ノ妙星ノ玉ヲ咆ムノ象アリ。墓上ノ山木ハ欣々トシテ以テ栄茂ニ向フ。則チ瑕無キ玉ト為ス。若シ墓前ニ田作ノ者アラバ，好ムベカラザルノ由，相告ゲ語リテ遺言アリ。然ルニ曽良比留西表首里大屋子，也登里川ノ水ヲ塞ギテ溝ト為シ，墓前ニ田ヲ掘ルノ構アリ。宗延之ヲ止メンコトヲ請フ。既ニシテ数日，人力ノ費ヲ惜シマズシテ遂ニナル。其ノ懇志ニ感ジテ後ノ證トナス。先考六代目ノ前石垣親雲上鶴兼ヨリ以来，平田ヲ耕シ伝ヘ，刈収ムル稲千五百束ノ田ハ彼ノ人ニ譲リ與ヘ，今ニ東ノ作業アリ。其ノ後，眞勢西表首里大屋子数人ヲ催シテ，墓前ニ作田ノ企アリ。愚墓ノ障ル子細アリトテ之ヲコトワル。乃チ肯ジテ息ム。遠之川ノ水ヲ決シテ，那賀間野ニ下ス堀田ナリ。墓前ノウチ，辰ノ方ヨリ戌ノ方マデ，田地ヲ作ラザルノ約諾ハ，彼ノ数人ノ子孫ニ至リ，違乱無ク，川畔ヲ漫滅スル無キタメ，石ヲ立テ，刻シテ其ノ意旨ヲ著シ示シ，忘レザラントスナリ。後代ノ子孫相共ニ此ノ堅約ヲ守ラント冀フモノナリ。

大清康熙　二十三暦　甲子　八月吉日

康熙三十二癸酉十月吉日，之ヲ記ス（以上側面）

「照譽月秋居士，前石垣親雲上，宗延氏，長多，童名保久里，歳十七与人，三拾一首里大屋子，三十五頭役，四十八御座舗，五十三隠居，康熙三十八年己　十月十七日卒寿七十一」（以上裏面）

2　記文の内容

以上墓碑に書かれた内容は，文意からみて，便宜上分くれば，

(イ)　前石垣親雲上の家系

(ロ)　墓地建設の由来

(ハ) 墓前開田の是非

となる。ただ序述は多少錯乱している所もある。

(イ) 家　系

碑文に現われた前石垣親雲上の家系は次の通りである。

始祖（初代）　古見首里大屋子

祖父（五代）　宗延，童名保古里

先考（六代）　鶴兼

大父（七代）　長多　童名保久里

七代目の長多の閲歴は碑石裏面の記述で，比較的明らかである。

法名　照譽月秋居士

昇進　歳十七－与人（コンチュー）　三十一－首里大屋子　三十五－頭役（カンラ）

四十八－御座舗（オザシキ）　五十三－隠居　七十一死没（康熙三十八年十月十七日）[註(1)]

この家系の当主は十九代大浜隆信氏（現石垣市大川住）である。当地で玻武名屋（ハ ナ ヤ）と呼ばれる家である。筆者は石垣市立八重山博物館長の好意で，玻武名屋系図[註(2)]のなかより，必要の分を複写していただいた。抜き書きすると，

五代　信本　童名保久里，生萬暦二十年一月十一日，没順治十八年十月二十六日，七十才

六代　信門　童名鶴千代，生萬暦三十九年三月七日，没順治元年十二月二十六日，三十四才

七代　信明　童名保久里，生崇禎二年二月七日，没康熙三十八年十月十七日，七十一才

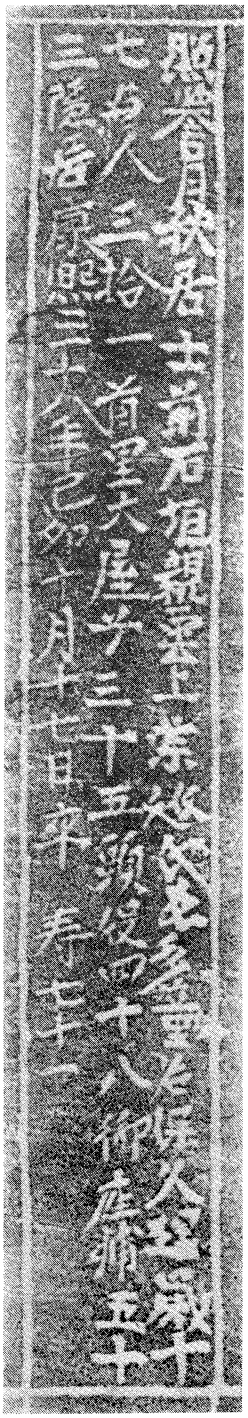
八代　信平　童名鶴千代，生順治七年八月十三日，没康熙二十年九月一日，三十三才

九代　信茂　童名保久里，生康熙七年十一月十三日　没康熙四十七年五月一日，四十一才

となっている。墓碑に刻された題号名は「照譽秋月居士」であるから，七代の長多（信明）の法名である。この部分と裏面の長多閲歴は彼の没年（康熙三十八年）以後に刻まれたもので，この追刻の部分は異筆である。この年には既に長子の信平は死没しており，孫の信茂三十一才の時である。

(ロ) 墓地建設の由来

碑文に記された宗延五十六才の年は順治四年にあたる。墓の開基は標流の唐人の助言によるとなっている。彼の唐人は七官[註(3)]と呼ばれまた大夫の官について古波蔵親雲上（ハ クラベイチン）と呼ばれるに至っている[註(4)]。大夫の官についた唐人は，久米村にいたいわゆる唐栄（とうえい）である。『久米村



第3図
墓碑裏面の記文

日記』（「那覇変遷記」に引用）によると，[註(5)]

「覚，（中略）

八重山ニ標着ニ而，順治五年罷渡候人

正統楊（引用書に揚とあるは誤ならん）」

とある。碑文にある五代宗延五十六才の時，流来の唐人の卜によって築かれたというこの年を，武名屋系図によって計算すると，順治四年となる。那覇久米村に渡った年を順治五年とするならば，この唐人は八重山に於て滞留年を越したことになる。流来の唐人は唐栄と称し，沖縄に於て重く用いられ，ことに明，清代の対外交渉関係の事迹に力のあったことはよく知られている。彼等は故国の道教に関連する民間信仰を琉球にもたらし，墓地卜定にも関与したことをこの碑文により知ることが出来る。沖縄では，このような卜地を「風水見（フーシーミー）」といって，現在でも民間信仰の習俗となっている。唐栄の人土にもこのような占卜に長じた人が，活動していたと思われる。

(ハ) 墓前開田の是非

五代宗延の時，ここに墓地が択ばれて以来，墓前開田は好ましくないことは当初からの意志であったが，第一回の西表大屋子による開田は，事が急に行われて，阻止することが出来なかった。この時の開田は，「也登里川」の水を引いたことがあるが，この川の名について石垣市大川居住の長田紀光翁の証言で，石城山の東側の流水をヤドレ川といっていたことがわかった。ヤドリ川の訛言であろう。これで墓前東作の意味も了解された。次に第二回目の開田の企ては阻止することが出来ている。この墓碑の文章の結びは，子々孫々この約諾を守って墓前開田のことなきよう，銘記する意旨が表明されている。墓前辰（東々南）の方から戌（西々北）の方向まで，田地を開くことが禁止されている。この方位は，墓地の面する平地，すなわち開田の可能性のある全域をさしている。墓の背後は石城山の傾斜地がせまっているので，開田の可能性は全くない地形である。墓前開田を禁忌する風習は，恐らく風水説から来た民間信仰に基づいた考えであろう。

3 名号碑石の系譜

石城山の碑石をみて第一に思い出されたのは，福岡県宗像郡玄海町の宗像大社の阿弥陀経石であった。入母屋作りの屋蓋と長方形の碑石の対比である。この方は宋代中国よりの渡来品と考えられ，私も中国よりの舶載に間違いないと思っている。時代は平重盛の請来品という伝説であるが，旧記によると碑文のなかに

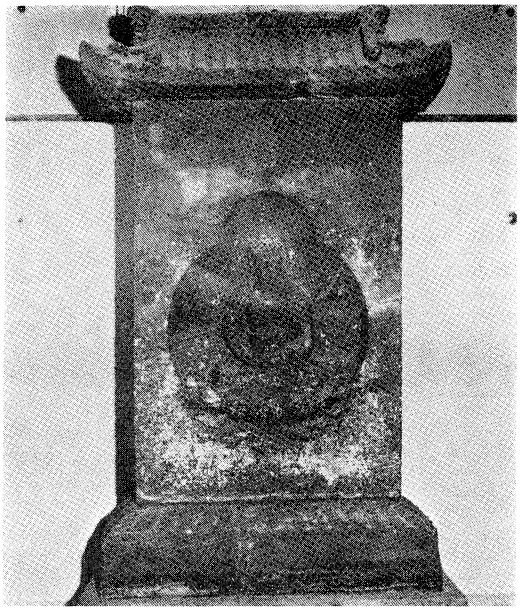
「大宋 紹熙六 年 乙卯孟 陽日 □

と判読された句がある。紹熙六年が，この碑石の製作年代か，日本伝来に関係のある紀年なのか，判定出来ないが，この年号は日本の建久六年（1195）に相当し，南宋の年号である。このような経石の類例について，中国本土での伝世品を寡聞して知らないが，恐らく唐代に盛行した経幢の流れをくむものであろう。経石の起源はともかくとして，碑石の形態の類似を第一に指摘しておこう。

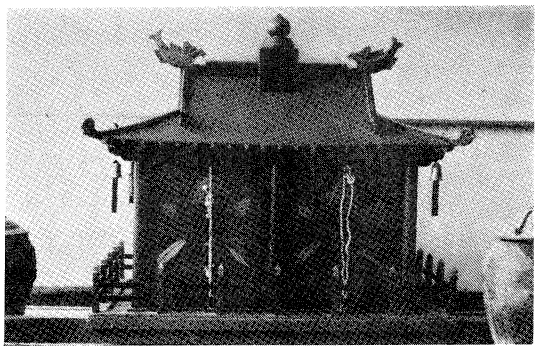
宗像阿弥陀経石の碑身の丈量は次の通りである。

1　高さ　107糎－3.53尺（1.165尺ノ3倍）
2　幅　70.7糎－2.33尺（1.156尺ノ2倍）

宋の尺度の資料は余り知られていないが，単位尺1.165は唐の長尺（小尺の一尺二寸）の値に近い。すなわちこの単位尺によって計測されると碑面の対比は三尺と二尺となる。八重山石城の碑石も，前記のように，これに近い3.1尺と2尺である。入母屋の屋蓋のプロポーションも相似たものであるが，宗像の経石は軒先瓦まで表現している。瓦葺に対し石城山の碑石は，元来瓦葺の下り棟を模したものであるが，軒先は棟木の表現のみで瓦葺の明らかな表現を見せていない。恐らく瓦葺を模した板葺の表現ではあるまいか。『球陽』の記事によると，首里の宮殿を瓦葺にしたのは，尚真王の二年（康熙九年）で，「古ヘ国殿並ニ宮室楼台ミナ木版ヲ用イテ之ヲ蓋ス」とある。ただ碑石の大棟の表現は，両端に明代の高級建築にあるような，怪魚が棟端を喰むような形の鴟尾が表現されている。明系統の鴟尾は，琉球の古建築にもしばしば現われるが，更に大棟の中央部に宝珠の形の飾りがある。最初私がみた時から基部の痕跡だけが残っていたので，全形は知る由もない。しかし宝珠形の大棟飾りは，沖縄の石造建築（例えば園比屋武御嶽石門）にも残っており，中国では，唐代以降の仏教や廟建築の大棟にも宝塔，宝珠の飾りがみられることで，特殊のものではない。



第4図　宗像大社の阿弥陀経口



第5図　沖縄の龕

なお下り棟の先端には夫々ユーモラスな鬼面瓦の表現がみられ，四隅の軒飾りには獣面様の表出もある。このような屋根飾りは，近代の葬礼用の「龕（ガン）」と称せられる死棺運搬用の木製の輿（こし）に伝統が見られる。私は石垣市の八重山博物館と首里の県立博物館でその近代遺例をみせてもらい，説明を聞いた。[註(6)] 更に近代まで伝統が生きているのは，唐式の位牌である。いまも八重山旧家の仏壇にみられる位牌は，上下二段に区切られ各段十枚程度の板が並んで，それに戒名が書かれている。石城山の石碑の表中央上段にみる「照譽月秋居士」の戒名と，裏上段にある長多の閲歴など，各々二段九行の罫線の枠内に書かれている。これも中国式の規格であろう。このようにしてみると，沖縄に近世まで伝統を残している葬礼に関する文物の起源が，明代の中国，ことに南シナに源流があり，それを遡のぼると中国唐宋以来の文物ともつながってくる。ことに石城山の碑石に，宗像の宋代阿弥陀経石の遺影がある所以も，私なりに理解出来そうである。

追　記

1　沖縄県石垣市の名号碑石調査については，多くの現地の人々の御世話になった。文中に氏名をあげ得なかった方々のうち，その一部をあげて謝意を表し度い。

大浜茂，内間善貞，竹盛生吉郎，牧野清

（順不同，敬称略）

2　本文成稿後倒着した中国の『文物』1975年12期をみると，遼寧省法庫県叶台で発掘された遼代の墳墓が紹介されている。この古墳の玄室に石棺を収めた「小帳」があるが，これは正面2.5米の木製屋舎である。屋蓋の形態が名号碑石の笠石に似ているし，龕の構造にも共通した特徴があるので，これらの祖原形態を考える資料として追録しておく。

註

(1)　近世八重山では蔵本と呼ばれる地方行政庁があり，ここは在番（ざいばん）一名が中山から派遣され，総取締としていた。地方出身の最高役は頭（かしら）職として名家の世襲となった。位階は親雲上（ぺぃちん）と呼ばれ，事務職として里首大屋子，与人などの名が見える。御座敷は栄誉職名である。

参考　喜舎場永　氏編『八重山歴史』

牧野清氏『新八重山歴史』

(2)　大浜隆信家蔵

表紙に「長栄氏玻武名屋系図」とあり，「明治四十二年一月八日表紙替」とある。原書頭書に「長栄氏系図家譜」とあり，五世信本より書きはじめる。

(3)　七官の意味はよく判らないが，『球陽』（付巻一）尚寧王二十八年（元和2年1616）の条に「鹿児島に陶工を懇請，高麗人張献功，一官，三官等ヲ帯テ回到ス」とあり，一官三官などと類する呼び名であろうか。

(4)　唐栄については，左記の論文に詳しく述べられている。

東恩納寛惇氏「三十六姓移民の渡来」（『黎明期の海外交通史』所収）

(5)　「久米村日記」の原本は県立図書館付属の東恩納文庫についてその所在をたずねたが，今次大戦の戦火に焼失したとの回答があった。

(6)　首里の県立博物館出陳中の龕については種々の説明を聞き，挿図の写真も同館の好意によって提供されたものである。

Ⅶ　石城山に関する伝説

県立八重山高校教諭　石　垣　久　雄

その1

古昔石城丘(イシスクモリ)ニ「イシスク・オフムシャラ」ト云フ膂力無比身ノ丈ケ九尺，島民威武ニ悦服セリ。卯方二十丁ヲ離レ名倉湾ヲ抱擁シタル貝底丘(ミナスクモリ)ニ「フサキ・ガバネノ」居住ス身長八尺，弓術ニ巧妙ニシテ騎慢放肆人ヲ凌駕セリ。常ニ湾内ヲ航走スル船舶，ソノ居堡ニ表敬ノタメ，卸帆ノ礼式ヲ行フ。若シ式礼ヲ欠ケバ強弓ヲ曳キ絞リテ人命諸共覆没シタリ。性質貪悍，石底丘ノ威名ヲ猜忌シテ掠奪セント苦肉ノ計略ヲ行ヒタリ。各自対峙シテ決闘戦ヲナス。貝底丘ノ「ガバネノ」牛革ノ弦ニ新ラシク矧イダル強矢ヲ番ヒ，満月ノ如ク引絞リテ矢ヲ放ツニ弦音凄マジク空ニ響キテ飛ビ行キ「オフムシヤラ」ノ心ヲ串キ黒血迸り腰ヨリ下ハ唐紅ニ染メ倒レ，又妻女，夫ノ拙ナキ武運ニ歎キ号泣シ，敵ノ意ニ従ハズ貞操ヲ守リ同刃ニ斃レタリト云フ。（岩崎卓爾著ひるぎの一葉より）

その2

昔，この島で彌勒と釈迦の対談があった。釈迦がいうのには，目を閉じている間に白蓮の華が前に立ち現われる者をこの島のユーヌヌシ（世の主）と決めようということであった。両神とも各々目を閉じて待った。しばらくして釈迦は目を半開して見た。すると自分の前には赤蓮の華が立ち，彌勒の前には白蓮の華が立っているではないか。釈迦はそれをひそかに取り替え置き直した。その後に両神とも目を開くことになった。そして釈迦はいった。どうだ。私の前に白蓮の華は立った。今後は私がこの島のユーヌヌシ（世の主）である。これから後はもうこの島は釈迦の世であると宣言した。

ところが，そういうことがあって後のこの島は旱魃がうち続き凶作となり，島全体飢饉の状態となった。この島の生ある万物は困り果ててしまった。そこで神々や人間，島獣から昆虫までこぞって，この窮状をどうにかしようと集い協議会がもたれた。この島がこうなったのは何の因果なのかみんなで話し合った。その結果は，この島のユーヌヌシである彌勒が隠れてしまったからであるという結論に達した。そこで「だれかユーヌヌシの隠れ家を知る者はいないか」と呼びかけた。そしたら蝗虫(ばった)がそれに答えて自分が知っていると申し出た。蝗虫は自分には目が四つある。羽の下にも目がある。だから飛んでいてもよく物が見える。釈迦と彌勒のやりとりから彌勒が隠れるまでのことも終始見えた。彌勒の隠れている所はイシスク森である。蝗虫(ばった)の話しを聞いてこの島の生きとし生けるもの全てイシスク森に集り彌勒の隠れ家を探し当てました。そしてみんなで恭しく拝みました。爾来，この島は豊かになって発展して来たとのことである。昔からイシスク森が神々しい山だといわれるゆえである。（伊波寛氏の安室雲月氏からの採録より）

その3

イシスク森の頂上には天に昇降する白蛇が住んでいた。これはイシスク森の守り神であった。イシスク森で蛇を見たら短命になるといわれていた。（伊波寛氏の採録より）

Ⅷ　石城山保存運動年表

石垣市教育委員会
文化財担当　石　堂　徳　一

石城山は，石垣市の字バンナにある。

石垣市教育委員会は，今年，字大浜にある，オヤケアカハチの居住跡として伝えられている，フルスト原遺跡を国指定史跡文化財として保存活用することとなったが，わたしたちは，その指定作業をしながら15年前の“石城山”のことを想起していた。

わが石垣島の４ケ村の発祥の地として広く知られ，民俗学，地質学，考古学的にも重要な文化財として，貴重な価値を有していたにもかかわらず，現在は土深く掘り下げられ，無残な姿を呈している石城山。

人間の幸福とは何であるのか，文化遺産を守ることは，人間社会の経済，産業の発展を阻害するものであるのか。

物質文明の豊かさの裏で，顔をけずられ，手足をもぎとられ泣いている自然物を想うとき，いつかは，彼ら自然物に，人間は，報復される日がきっとくると思わずにはいられなかった。

人間が，あまりにも，地球の主人公として強まんにふるまうのならば，もともと人間の生命を誕生させ，そして，人間そのものを形成してきた自然（環境）は黙ってはいないであろう。

石城山を破壊への運命をたどらせた反省と教訓に学び，フルスト原遺跡は，どんなことがあっても守り抜かねばならない，みんなはそう思った。

石城山が，常にわたしたちに呼びかけ，励ましてくれた。

わたしは，15.6 年前，石城山をめぐって，地域住民が，どのように考え，どのように行動したのか，記録にとどめたいと思った。

とりあえず，今回は，石城山保護運動年表を作成した。

石城山保存運動年表

1959. 9.　琉球政府文化財保護委員会の多和田真淳主事が石城山を調査。横穴式の住居跡を発見。動物の骨でつくった管玉と，貝殻条痕紋のある土器を採集。

1960. 8. 15　W・I・O考古学研究グループによる石城山調査がおこなわれる。

1961. 2.　国場組（国場幸祐氏）石糖建設用のバラス採掘のため豊川善要氏から石城山を買収

1961. 12. 18　沖縄文化財保護委員会から，八重山歴史民俗資料調査委員の安室雲月氏へ石城山の調査依頼

1962. 1. 22　安室氏，現地調査，沖文保委へ調査報告送付
（１千年前とみられる八重山の原住民が穴居生活をしたと思われる洞穴を確認，貝殻，陶器，土器片，人骨などの遺物を採集）

1962. 1. 25　八重山毎日新聞社主催，石城洞窟第一次調査行なわれる。（団長，宮良賢貞）

（外耳土器，青磁器，石かま，半磨かま，シレナシジミ，シココ貝，琉球パカ貝
シャコ貝，首里マイマイ，琉球山高マイマイなど遺物採集。
狩猟時代の穴居生活の跡→文化財に指定すべき。）

1962. 2. 3　八重山毎日新聞社主催，石城山第二次調査おこなわれる。
（古代八重山解明のカギをにぎるものである）

1963. 2. 6　「石城山を守ろう」桃林寺に於いて懇談会がもたれる。→文化財として保護すべき。

1963. 3. 27　「石城山をみんなでまもろう」兼本信知氏，八重山朝日新聞へ投稿

1963. 4. ?　八重山歴史民俗資料調査会々長の宮城信勇，神司代表の国吉マンダの両氏が，石城山の保護について陳情。

1963. 3. ?　石垣長泰氏，国場氏と，石城山の保護について那覇で話し合う。

1963. 8.　石垣市議会，石城山を買い上げ，重要文化財に指定し，並びにハンナー主の墓を建造物として指定し，保護することを採択。

1963. 10. 11　建設業界の向井信雄，西里松太郎氏，石垣市に口頭陳情
（石垣市は文化財と市の近代文化建設の比重をどうみるのか，問いただす）

1963. 10. 11　石垣市と国場組の間に石城山の譲渡について覚書がかわされる。

1963. 10. 15　国場組から石垣市へ電話。石垣市は国場氏に対し，「現在上覇中の浦本助役と国場氏との折衝が順調に行けば，直ちに予算を計上して買い戻しにかかるつもりであるから，よろしく取り計らってくれるよう」要請。

1963. 10. 19　国場氏来島

1963. 10. 21　国場氏と石垣市の間に，石城山売買についての仮契約書締結

1963. 10. 28　石城砕石場主任，石垣市へ陳情書（砕石させてほしい）送付

1963. 10. 28　八重山民俗資料調査会，沖縄文化財保護委員会に専門委員の至急派遣を要請

1963. 10. ?　石垣市長，沖縄文化財保護委員会へ専門委員の派遣を要請

1963. 11. 15　石垣市の要請に応之，沖縄文化財保護委員の多和田真淳主事来島，調査を実施

（石城山は，山全体が遺跡で，琉球歴史を研究するのに貴重である。ハンナー主の墓を，史跡建造物に，山を，天然記念物及び史跡として文化財に指定したい）

1963. 12. 17　石垣区議会開かれる。石城山買い戻し案件，否決（12対6）

1963. 12. 18　議会表決，全住民に大きなショックを与えた。
「石城山を守る会」が結成。（八重山連合区教育庁，八重山教職員会，八重山文化協会，八重山観光協会，八重山商工会，八重山歴史民俗資料調査会，八重山婦人連合会，八重山青年連合会）→声明書を出した。「今後，石城山を文化財として子々孫々まで伝えるべきだとし，そのためにも，島ぐるみで運動を展開し，ぜひ，石城山を守らねばならない」と決意を固めた。

1963. 12. 19　白保において大浜町，石垣市の合併説明会開かれる。石城問題で論議ふっ騰。

1963. 12. 19　八重山毎日新聞社，社説「文化財を愛護する心」掲載

1963. 12. 20　詩「石城山」富村和史氏，八重山毎日新聞へ投稿掲載

1963. 12. 20　「石城山買い戻しの陳情書」八重山教職員会が市議会へ送付

1963. 12. 21　「文化財の理解と良識を」吉田一郎氏，八重山朝日新聞へ投稿掲載

1963. 12. 22　沖文保委，多和田主事，石城調査（8日間）終えて帰沖

「調査報告」— 史跡，地質学上貴重，石城山は保存すべき

① 外耳土器，青磁，須恵器（祝部土器）などが出土する貴重な遺跡である。およそ700年から1000年前の居住地

② 全山が古生期石灰岩からなっているので沖縄の古生期石灰の分布を知るうえに貴重な天然記念物である。

③ 頂上からは石垣市をはじめ，遠く大浜町までながめることができる景勝地である。

1963. 12. 23　沖文保委，臨時委員会開催

声明書発表

① 石城山は文化財として貴重なものだから，全住民で保護する必要あり。

② 石垣市へ勧告 — 早く買いとって保護すべきである。

③ 宮里委員長，真栄田副委員長，多和田主事，現地へ派遣，石垣市と話し合う。

1963. 12. 25　「石城山問題」の緊急会議が八重山地方庁の音頭でひらかれる。

（守る会 — 5名，市議会 — 5名，建設業者 — 1名，政府 — 1名）

1963. 12. 26　「石城山は消えようとしている」嘉手川重昭氏，八重山毎日新聞へ投稿掲載

1963. 12. 30　石垣市は「石城山問題」，世論があれば再提案をすると言明

1964. 1. 5　沖文保委は石垣市長，石垣市議会議長に対し，「石城山の保護について」勧告書送付。

（貴重な文化財を，市当局，市議会はもとより，全市民の良識により，万難を排して守り抜くよう早急なる処置をなすよう勧告する。）

1964. 2. 7　「石城山を買いあげて文化財として指定するよう」石城山を守る会は石垣市長，石垣議会議長へ陳情書を手渡す。

1964. 2. 28　建設業界が八重山建設事務所へバラス不足を訴える。石城山を砕石場に認めてほしい。

1964. 3. 19　石垣市議会（2日目）「石城問題」論議

特別委員会を設置，継続調査研究

1964. 3. 21　第一回「石城山に関する特別委員会」開催

（中央でも折衝する必要があるということで上覇することをうちあわせる）

1964. 3. 23　第二回「石城山に関する特別委員会」開催，午後から上覇のため全委員乗船

1964. 3. 24　「石城山に関する特別委員会」上覇，沖文保委へ石城山の指定を要請

文保委としては，市が買いとって指定を受けるのならともかく，いきなり指定することはスジがとおらない。あくまでも地元側が主体となって保護策を講ずべきだとの態度

1964. 3. 28　石垣市議会議長帰島，那覇での「石城山問題」の情況を報告。
国場氏―　八重山の経済発展のため石城山を割る，市に石城山を売りたくない
沖文保委―　逃げ腰である。
1964. 5. 6　第三回「石城山特別委員会」開催（政府の文化財指定が先か市の買いあげが先か）
1964. 5. 7　第四回　〃　〃
1964. 5. 18　第五回「石城山特別委員会」開催
①　建設協会からの陳情書不採択
②　石城山は，政府が文化財に指定するよう議会の名で沖文保委へ意見書作成
1964. 5. 18　沖文保委の真栄田義見，徳田安周両委員来島，現地視察
1964. 5. 19　第六回「石城山特別委員会」開催
①　前日の沖文保委への意見書とりさげ
②　次回定例会（6月）まで情勢を見守る。→審議末了
1964. 5. 19　沖文保委の真栄田、徳田委員は石垣市長、石垣市議長と会談，石垣市の態度をきく。
石垣市長「政府が文化財として指定したあとに市では買収する考えであるので，一日も早く国場氏と文保委の方で話をつけてほしい」と要望。
1964. 5. 20　沖文保委「石城山を守る会」など関係者と会う。
1964. 5. 22　「文化財に愛情をもとう」八重山毎日新聞，社説で論説
1964. 5. 23　沖文保委臨時委員会開かれる。→石城山問題，しばらくの間静観
それから約10年の年月が流れる。……。
1973　7. 11　石垣市文化財審議会，石城山の鉱業権者，伊良部砕石と，ハンナー主の墓の保護，復元について話し合いをもつ。
1973. 7. 14　石城山ハンナー主の墓碑移転作業，八重山博物館に保管
1976. 7. 17　シカの化石を石城山の砕石場から発見（石教委―石堂徳一，県教委―知念勇による）
1976. 11. 7　石垣市教育委員会主催「石垣島の文化財めぐり」で石城山を見学，石城山の破壊状況に憤激
1977. 2. 11　大川婦人会「石垣島史跡めぐり」を実施，石城山の現状をみて怒る。
1977. 3. 6　バカー島を語る会，石垣島文化財めぐりを実施，石城山の保護について論議
1977. 3. 13　登野城婦人会「石垣島史跡めぐり」を実施
1977. 3. ?　バガー島を語る会，石垣市長へ，石城山の保護について口頭陳情
1977. 4. 17　石垣婦人会「石垣島史跡めぐり」を実施
1977. 4. 25　石垣市教育委員会，沖縄県開発庁鉱業課へ
「採石地域における文化財の保護について」（石城山遺跡）公文送付
1977. 6. 25　沖縄県開発庁鉱業課，来島，石城山の現地踏査（鉱業課，鉱業権者，石教委）
1977. 9. 3　沖縄県教育委員会，石城山遺跡の調査のため来島
1977. 9. 3　石垣市教育委員会は石垣市文化財審議会へ「石城山遺跡の保護について」を諮問
1977. 9. 5　石垣市文化財審議会は市教育委員会へ「石城山遺跡の保護について」答申
（石垣市指定文化財として，わずか残っている部分だけでも保護すべきである）

1977. 9. 5　県教育庁による石城山遺跡調査はじまる。

1977. 9. 10　石城山遺跡調査関係者，午後から「石垣島の自然と文化について」講演会（中，高の理科，社会の先生，一般研究者26名参加）

1977. 9. 10　「石城山遺跡調査終了後の措置について」の要請を石教委から県教委へ送付。

1977. 9. 12　石垣市教育委員会，（第68回臨時委員会）で文化財審議会からの答申採択。

1977. 9. 14　「石城山遺跡の保護についての要請」，石垣市教育委員会から沖縄県開発庁鉱業課へ送付。

1977. 9. 14　「石城山遺跡の保護について」石垣市教育委員会は石垣市長，石垣市議会議長へ公文送付（市文化財指定にともない，地主及び鉱業権者のうける損失を保障するため石垣市は残存石城山を買いあげるための予算措置を講じていただきたい）

1977. 9. 19　「石城山遺跡の取り扱いについて」県教委から石教委へ公文

①　すみやかに業者との協議に入るように

②　石城山遺跡の現状保存の確認を随時行なうように

1977. 9. 19　「石城山遺跡のとり扱いについて」県教委から業者へ公文（石垣市教育委員会との合意が成立するまで石城遺跡地域の採石はしてはならない。）

1977. 9. 27　「石城山の取り扱いについて」4者協議（沖縄県開発庁鉱業課，業者，市教育委員会，市文化財保護委員会）

→石城山を文化財として保護することに協力するとの合意に達する。

そして，53年度予算に，石城山買いあげ費が計上された。石垣市及び議会が，どう対応するか。歴史の教訓は，どのようにうけとめられるか，石垣市民の1人1人が注目している。

終

おわりに

石城山は不幸な遺跡である。

神々に関する伝説をもち，かつては地域の人々からも聖なる山として尊崇された石城山は，近年の高度「成長」下における諸開発の激化の中で，採石工事に伴ない年々やせ衰えてきたのである。

この石城山から，15年間に亘って運び出された土石の数々は，石垣島において港となり，道となり，建物となって地域の中に根をおろした（？）のであろう。

今や石城山は無残な姿をさらけ出している。もはや「聖なる山」の姿ではなくなった。

今回の調査によって，ともかくもこれまでの資料をかき集め，現時点で知り得る情報を収録することとなったのは，不幸の中でのひとつの光明……というよりは救いともなり，積極的な評価をすれば可能な限りの記録保存の措置を講じた適切な事後処理であったといえるかも知れない。

本報告書は，基本的には５つの分野に分けて扱ってある。

1　人間の生活活動の遺跡としての，考古学的調査

2　裂か堆積土中に埋蔵されている古脊椎動物化石の古生物学的調査

3　石城山の一角にある「前石垣親雲上」の家系の墓碑についての金石学的調査

4　石城山に関する伝説についての採集調査

5　石城山の保存問題をめぐる経過についての記録調査

1については，おそらくかつては，この石城山全体が遺跡であり，人間集団の生活がこの地において，或る時期に展開されていたことは明らかである。その時代は，出土品の一部や周辺遺跡との比較で，略15世紀前後頃を中心とする時代であろうと考えられる。

彼らは外耳把手をもつ，いわゆる八重山武土器を製作・使用し，中国等との何らかの形による交渉によってもたらされた陶磁器をも使用していた。土器の中に籾圧痕を有するものが得られているが，他の類例遺跡では炭化米・麦も発見されており，彼らの集団において米・麦（および粟）栽培＝生産経済が一般化していた可能性は強い。

よくいわれるように，いわゆる八重山式土器の中のU字形の煮沸容器は，これらの穀物類の調理用具であろうという推定は，より高い蓋然性をもつものと考えられる。

しかし一方においては，アラスジケマン貝を主体とする海産貝の貝塚も形成されており，自然物への依存も並行していたようである。

石器については表面採集であり，他との共存関係は把握できないが，大雑把な推定として，八重山式土器・外国製陶磁器等の出土する時期に属すべきものとみられる。

これらの石器は，八重山における初期の石器文化＝局部磨製石器の伝統を脱却した，後の段階に位置すべき形態を有している。

外国製陶磁器の出土は，彼らの集団が，何らかの形での交易をし得る段階にあったことを示すものであろう。また，そのことがもたらした影響についても，当然検討されねばならない。しかし現時点では交易や分配のあり方等，あれこれの具体的な様相を論ずるにはまだ一定の困難を伴う。

2については，1966年，採石の進行に伴って裂か内堆積土中より鹿角が発見されたことに端を発し，今回調査した古脊椎動物に関するものである。かつて石垣島白保轟川流域で鹿化石が採集されているが，明確な形で層を伴って発見されたのは石垣島ではこれが初めてである。考古学的な立場

からの検討では，今のところ人類活動との関わりの証拠となるべきものは，これらの化石群の中からは見出されていない。古生物学の立場から，八重山における古脊稚動物相の一端を明らかにしたことは，今回の調査の中でも貴重な意義をもつものである。

3については，石城山の一角に近世期に建造され前石垣親雲上の家系の墓に関する碑文の調査である。幸いにして九州歴史資料館館長の鏡山猛先生の貴重な論文があり，ここに改めて転載することができたのである。石城山の破壊が進行する中で，墓碑についての調査，研究が記録されていたのは，誠に幸いなことであった。

4については，石城山が聖地として尊崇されてきた由来の一端を窺える伝説を収集したものである。この地が，かつて或る時期に人間集団の生活活動の場であったことの反映として，このような伝説が存在するのかも知れない。

5については，1960年代から現在までの，石城山の保存をめぐる経過を年表形式に整理してみたものである。この経過をふり返りつゝ，今後のより適切な文化財保護の方策を追求していければ幸いである。

石城山は不幸な遺跡ではあったが，大浜永亘・宮良賢貞・安室雲月・長谷川善和・野原朝秀・鏡山猛の各先生方の以前からの各立場からの調査があったために，幸いにしてこれを利用させていただく形で，この概報ができあがったのである。上記の先生方の労を多としなければならない。

沖縄県文化財調査報告書第15集

石城山（いしすくやま）——緊急発掘調査概報——

1978年3月31日

発行　沖縄県教育委員会

編集　沖縄県教育庁文化課

電話　0988－66－2731

沖縄県那覇市旭町1